大阪市
平野区

長原遺跡東部地区発掘調査報告 XIV

財団法人 大阪市博物館協会
大阪文化財研究所

大阪市平野区

長原遺跡東部地区発掘調査報告

XIV

2008年度大阪市長吉東部地区

土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

2011.3

財団法人　大阪市博物館協会

大阪文化財研究所

古墳時代の遺物（NG08－２次調査）

大阪市平野区

長原遺跡東部地区発掘調査報告

XIV

2008年度大阪市長吉東部地区

土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

2011.3

財団法人　大阪市博物館協会

大阪文化財研究所

序　　文

本書は財団法人大阪市文化財協会が刊行してきた『長原遺跡東部地区発掘調査報告』シリーズの14冊目に当るものである。当協会は2010年４月、財団法人大阪市美術振興協会との統合により、財団法人大阪市博物館協会と名称変更を行い、埋蔵文化財の調査・研究機能を引き継ぐ同協会大阪文化財研究所が本書の発行を行った。

長原遺跡は、遺跡発見の契機となった1978年の発掘調査以来、調査が積み重ねられ、旧石器時代から江戸時代にかけての複合遺跡として全国的にも著名な遺跡となった。また、東部地区では、1995年からの土地区画整理事業施行に伴う調査開始を契機として、旧石器時代の石器製作址、大阪市内最古となる縄文土器、弥生・古墳時代の集落や墓域、古代の水田やこれを統括する建物群など、数多くの成果が得られている。

本報告では、2008年度に実施した調査成果を収録する。弥生時代の集落遺構、古墳時代前期の水田、古墳時代の河川などについて新たな知見を加えることとなった。これらの資料によって、当遺跡の実態がより一層明らかになることが期待される。

最後に、発掘調査ならびに報告書刊行に当ってご尽力をいただいた大阪市都市整備局・地元住民の方々ならびに関係者各位に心より感謝の意を表したい。

2011年３月

財団法人　大阪市博物館協会
大阪文化財研究所
所長　長山　雅一

例　　言

一、本書は財団法人大阪市博物館協会(2010年４月設立)の前身団体である財団法人大阪市文化財協会が2008年度に実施した、大阪市都市整備局長吉東部土地区画整理事務所による平野区長吉六反１丁目発掘調査(NG08－２・08－４次、NG は長原遺跡を示す)ならびに長吉出戸８丁目(NG08－３次)の土地区画整理事業に伴う発掘調査の報告書である。

一、発掘調査と遺物整理・報告書作成の費用は、大阪市都市整備局の負担による。

一、発掘調査は、財団法人大阪市文化財協会文化財研究部次長(現財団法人大阪市博物館協会大阪文化財研究所次長)南秀雄の指揮のもと、同部学芸員(現同研究所調査課学芸員)小田木富慈美・黒田慶一・平田洋司が主として担当した。調査の期間・面積は第Ⅰ章に記す。

一、本書の執筆は、南・同部技術管理担当課長兼長原調査事務所長(現同研究所総括研究員)田中清美の指揮のもと、田中・小田木・平田が分担して行った。執筆者については、各原稿の末にその名を記している。本書の編集は主として平田が行った。本書の用字用語や体裁等の調整は、同研究所研究副主幹趙哲済・総務企画課長代理清水和明、長原調査事務所長佐藤隆、同副所長岡村勝行、学芸員小倉徹也による報告書校正委員が行った。

一、遺構写真は調査担当者が撮影した。遺物写真の撮影は、楠華堂内田真紀子氏に委託した。

一、基準点測量および水準測量は株式会社パスコに委託した。

一、樹種同定作業は文化財調査コンサルタント株式会社に委託した。その報文は第Ⅱ章第４節に収録した。

一、発掘調査で得られた出土遺物、図面・写真などの資料はすべて当協会が保管している。

一、発掘調査から本書の作成に係わる作業には、補助員諸氏から多くのご援助を受けた。深謝の意を表したい。

凡　　例

1．本書で用いた層位学・堆積学的用語、および断面図に示した岩相の基本パターンは、[趙哲済2010]に準じる。

2．本書における地層名は第〇層と表記する。また、各遺構埋土の地層名は「第」をとって〇層とのみ表記し、調査地の地層名と区別する。

3．遺構名の表記は、竪穴建物(SB)、溝(SD)、井戸(SE)、土壙(SK)、小穴(SP)、自然流路(NR)、その他の遺構(SX)の分類記号の後に、番号を付している。この番号はまず遺跡における層序番号を冠し、その後に遺構の分類別に各層序ごと１からの通し番号を付けた(例：第６層上面の溝SD601)。

4．本書における遺物番号は、各調査地を越えて１からの通し番号を付した。

5．本書で用いた座標値は世界測地系に基づく。水準値はT.P. 値(東京湾平均海面値)を用い、本文・挿図中ではTP＋〇mと記した。

6．本書で用いた地層の土色および土器の色調は[小山正忠・竹原秀雄1997]に拠った。

7．各遺物の記述方法、分類、年代観などについては、以下の文献に従っている。石器について：[絹川一徳2000]、弥生土器について：[寺沢薫・森井貞雄1989]、古墳時代の須恵器について：[田辺昭三1981]、飛鳥～奈良時代の土器について：[古代の土器研究会1992]、平安時代の土器について：[佐藤隆1992]。

本　文　目　次

序文

例言

凡例

第Ⅰ章　遺跡の環境と調査の経緯 …… 1
　第１節　長原遺跡の立地と既往の調査 …… 1
　　１）長原遺跡の地理的環境と調査地 …… 1
　　２）既往の調査 …… 2
　第２節　調査の経過と概要 …… 8
　　１）NG08－２次調査 …… 8
　　２）NG08－３次調査 …… 8
　　３）NG08－４次調査 …… 9

第Ⅱ章　調査の結果 …… 11
　第１節　NG08－２次調査 …… 11
　　１）層序 …… 11
　　２）遺構と遺物 …… 16
　　ⅰ）古墳時代　ⅱ）飛鳥時代
　　ⅲ）平安時代　ⅳ）鎌倉～室町時代
　　ⅴ）江戸時代
　　３）各層出土の遺物 …… 27
　　４）小結 …… 30
　第２節　NG08－３次調査 …… 31
　　１）層序 …… 31
　　２）遺構と遺物 …… 34
　　ⅰ）縄文時代　ⅱ）弥生～古墳時代
　　ⅲ）飛鳥時代　ⅳ）奈良時代
　　ⅴ）平安時代以降
　　３）小結 …… 59
第３節　NG08－４次調査 …… 61
　　１）層序 …… 61
　　２）遺構と遺物 …… 65

ⅰ)縄文～弥生時代　ⅱ)古墳時代
ⅲ)平安時代以降
3)小結 ……75
第4節　樹種同定作業……77
1)分析の目的 ……77
2)木材樹種鑑定方法 ……77
ⅰ)原理　ⅱ)観察方法と手順
3)樹種の鑑定と記載 ……78
4)同定樹種と用材について ……79
5)小結 ……82

第Ⅲ章　まとめ …… 83

引用文献 …… 85

索引

英文目次

原色図版目次

1　出土遺物・遺構
　上：弥生時代の土器(NG08－３次調査)
　下：古墳時代前期の水田(NG08－４次調査)

図　版　目　次

1　NG08－２次調査　地層断面(一)
　上：北壁地層断面　第５層より上位部分(南西から)
　下：東壁地層断面　第５層より上位部分(北西から)
2　NG08－２次調査　地層断面(二)
　上：北壁地層断面　第５層より下位部分(南西から)
　下：東壁地層断面　第５層より下位部分(北西から)
3　NG08－２次調査　地層断面(三)
　上：西壁地層断面で確認された地震によるずれ(東から)
　下：第５層内で確認された地震による砂脈(東から)
4　NG08－２次調査　古墳時代の遺構
　上：自然流路NR501完掘状況(西から)
　下：SX501遺物出土状況(東から)
5　NG08－２次調査　飛鳥時代の遺構
　上：第4c 層下面の遺構検出状況(西から)
　下：第4c 層下面の遺構完掘状況(西から)
6　NG08－３次調査　地層断面・縄文時代の遺構
　上：南壁地層断面　第５層より下位部分(北から)
　下：第９層下面の検出状況(東から)
7　NG08－３次調査　弥生時代の遺構(一)
　上：SB701(西から)
　下：SB701遺物出土状況(北西から)
8　NG08－３次調査　弥生時代の遺構(二)
　上：SK702(北西から)
　下：SK704(南から)
9　NG08－３次調査　飛鳥時代の遺構
　上：第７層上面の水田検出状況(西から)
　下：第７層上面の水田検出状況(東から)
10　NG08－３次調査　奈良時代の遺構
　上：SD601(西から)
　下：NR601(北から)
11　NG08－３次調査　平安時代以降の遺構
　上：第4d 層上面の水田検出状況(東から)
　下：第4b 層上面の水田検出状況(東から)
12　NG08－４次調査　地層断面(一)
　上：南壁中央部地層断面　第１層～第５層(北から)
　下：南壁西部地層断面　第５層～第６層(北東から)
13　NG08－４次調査　地層断面(二)
　上：南壁西部西壁南部地層断面　第６層下部～第８層(北東から)
　下：南壁西部地層断面　第８層下部～第10層上部(北東から)
14　NG08－４次調査　縄文時代の遺構
　上：第10層上面の遺構検出状況(東から)
　下：倒木痕・木根痕検出状況(東から)
15　NG08－４次調査　古墳時代前期の遺構
　上：第８層上面の水田検出状況(東から)
　下：第８層上面の水田西半部検出状況(東から)
16　NG08－４次調査　古墳時代中期の遺構
　上：NR601(北西から)
　下：NR601断面(北から)
17　NG08－４次調査　平安時代以降の遺構
　上：第５層上面の遺構検出状況(東から)
　下：SD501周辺(南東から)
18　NG08－２次調査　出土遺物(一)
19　NG08－２次調査　出土遺物(二)
20　NG08－３次調査　出土遺物(一)
21　NG08－３次調査　出土遺物(二)
22　NG08－４次調査　出土遺物

挿　図　目　次

図１　長原遺跡の位置と周辺地形 …… 1
図２　周辺の遺跡と調査地 …… 2
図３　長原遺跡東北地区における既住の調査 …… 3
図４　NG08－２次調査区位置図 …… 8
図５　NG08－３次調査区位置図 …… 9
図６　NG08－４次調査区位置図 …… 10
図７　地層断面図 …… 12
図８　古墳時代の遺構平面・断面図 …… 17
図９　NR501出土遺物 …… 18
図10　SX501平面・断面図 …… 20
図11　SX501出土遺物 …… 21
図12　飛鳥時代の遺構平面・断面図 …… 22
図13　飛鳥～平安時代の遺構出土遺物 …… 23
図14　平安時代の遺構平面・断面図 …… 24
図15　鎌倉～室町時代の遺構平面図 …… 25
図16　江戸時代の遺構平面図 …… 26
図17　各層出土の遺物 …… 28
図18　木製品 …… 29
図19　地層断面図 …… 32・33
図20　第９層出土遺物 …… 34
図21　縄文時代の遺構平面図 …… 35
図22　弥生時代の遺構平面図 …… 36
図23　東半部弥生時代の遺構平面図 …… 37
図24　遺構断面図 …… 38
図25　小穴群断面図 …… 39
図26　SD702出土遺物 …… 40
図27　SB701平面図 …… 42
図28　SB701出土遺物 …… 43
図29　SK702出土遺物 …… 45
図30　SK703・704出土遺物 …… 46
図31　杭 …… 46
図32　第７層出土遺物（１） …… 48
図33　第７層出土遺物（２） …… 49
図34　飛鳥時代の遺構平面図 …… 51
図35　第６層出土遺物 …… 52
図36　奈良時代の遺構平面図 …… 53
図37　奈良時代の遺構断面図 …… 54
図38　NR601出土遺物 …… 55
図39　鎌倉時代の遺構平面図 …… 57
図40　室町時代の遺構平面図 …… 58
図41　第４層以上の出土遺物 …… 59
図42　地層断面図 …… 62・63
図43　縄文時代の遺構平面図（１） …… 66
図44　縄文時代の遺構断面図 …… 67
図45　縄文時代の遺構平面図（２） …… 68
図46　古墳時代前期の遺構平面図（１） …… 69
図47　古墳時代前期の遺構平面図（２） …… 69
図48　古墳時代中期の遺構平面図 …… 70
図49　出土遺物 …… 71
図50　第7b層出土木製品 …… 72
図51　平安時代以降の遺構平面図 …… 73
図52　平安時代以降の遺構断面図 …… 74
図53　SK201出土遺物 …… 75
図54　プレパラート作製の手順 …… 78

表　目　次

表１　長原遺跡東北地区における既往の調査一覧（１） …… 4
表２　長原遺跡東北地区における既往の調査一覧（２） …… 5
表３　本書で報告する発掘調査 …… 9
表４　NG08－２次調査層序表 …… 13
表５　長原遺跡東北地区の基本層序 …… 14
表６　長原遺跡の基本層序 …… 15
表７　NG08－３次調査層序表 …… 32
表８　NG08－４次調査層序表 …… 64
表９　試料と同定結果 …… 79

写　真　目　次

写真１　杭 …… 46
写真２　顕微鏡写真（１） …… 80
写真３　顕微鏡写真（２） …… 81

第Ⅰ章　遺跡の環境と調査の経緯

第１節　長原遺跡の立地と既往の調査

１）長原遺跡の地理的環境と調査地

長原遺跡は河内低地の南部および羽曳野丘陵から北に派生した瓜破台地の東北部にまたがって立地する（図１）。瓜破台地は西縁が急な傾斜で、この傾斜がそのまま沖積層の下へと潜り込むのに対し、台地の東縁は北東方向に緩やかに沖積層の下に埋没している。そのため、瓜破台地の東縁に位置する長原遺跡では、低位段丘の埋没深度は比較的浅くなっている。また、長原遺跡の北側に拡がる沖積平野（河内低地）には幾筋もの河川と自然堤防が見られる。これらの自然堤防の上にはさまざまな時代の多くの遺跡が立地している。

長原遺跡は大阪市平野区長吉長原・長吉長原東・長吉長原西・長吉出戸・長吉川辺・長吉六反に所在する、後期旧石器時代から江戸時代にかけての複合遺跡である。1973年に地下鉄谷町線延長工事に

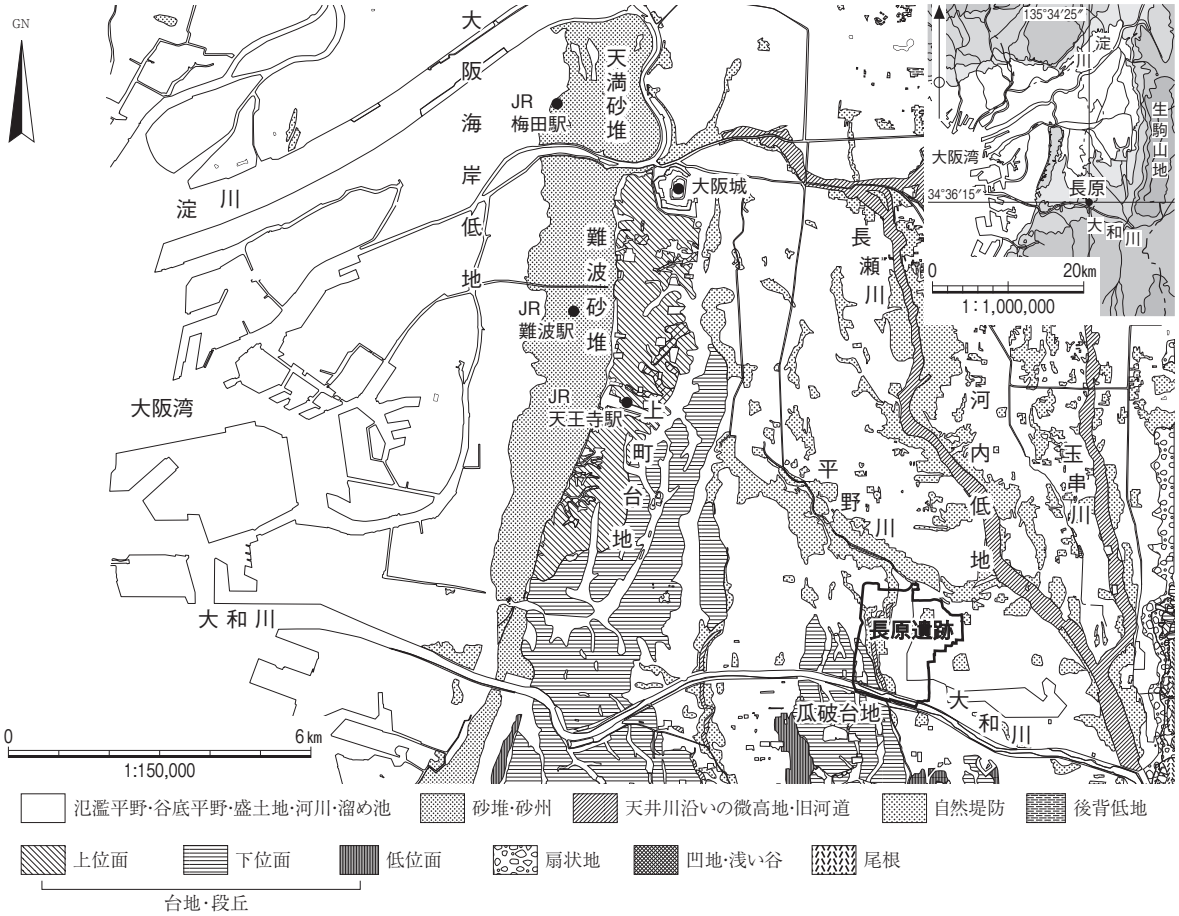


図１　長原遺跡の位置と周辺地形（土地条件図[建設省国土地理院1983] に基づき一部加筆）

伴う試掘調査で数基の古墳が発見されて以来、約40年近くにわたって発掘調査が継続して行われている。これらの調査成果の蓄積により遺跡の全体像の解明が進んでいることや、厚い沖積層の堆積により各時代の遺構面が良好に残存していることなどでも内外に知られている。調査の進展と同時に遺跡の拡がりが逐次確認され、現在では遺跡は東西約2.0km、南北約2.5kmの範囲におよぶ。このため、遺跡全体を８つの地区に区分し、それぞれ北・東北・東・東南・中央・南・西・西南地区と呼称している(図２)。

本書で報告するNG08－２～４次調査が行われた長吉六反１・２丁目および長吉出戸８丁目は、長原遺跡の東北地区に位置する(図２)。東北地区は長原遺跡の中でも低位段丘層以下が地中深くに埋没し、沖積層が厚く堆積する地域である。東北地区の北・東端は八尾市との市境となり、亀井・木の本・老原・太子堂などの遺跡と隣接する。

２)既往の調査

長原遺跡東北地区の本格的な調査は、1978年の飛行場幹線特殊マンホール建設および近畿自動車道

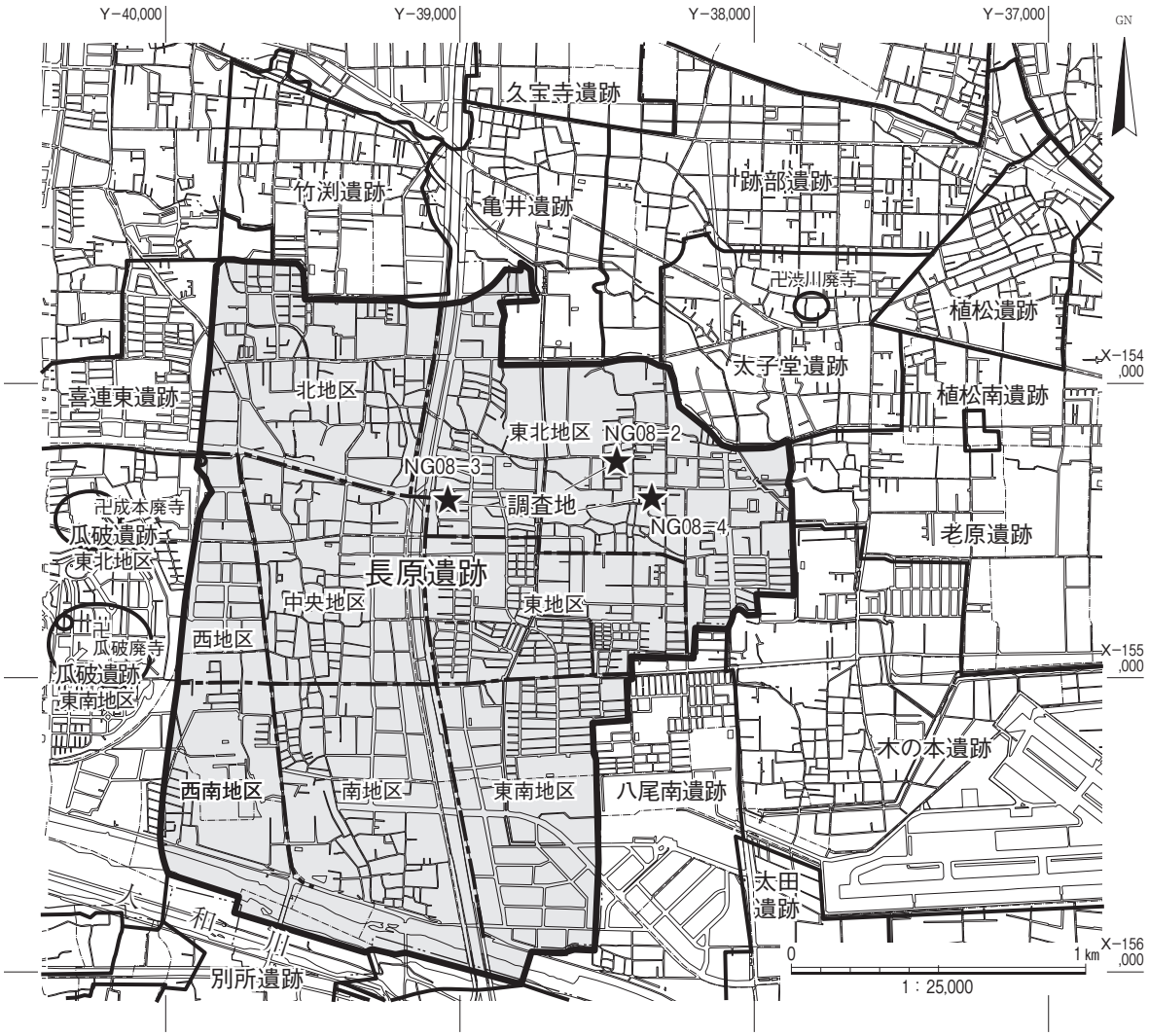
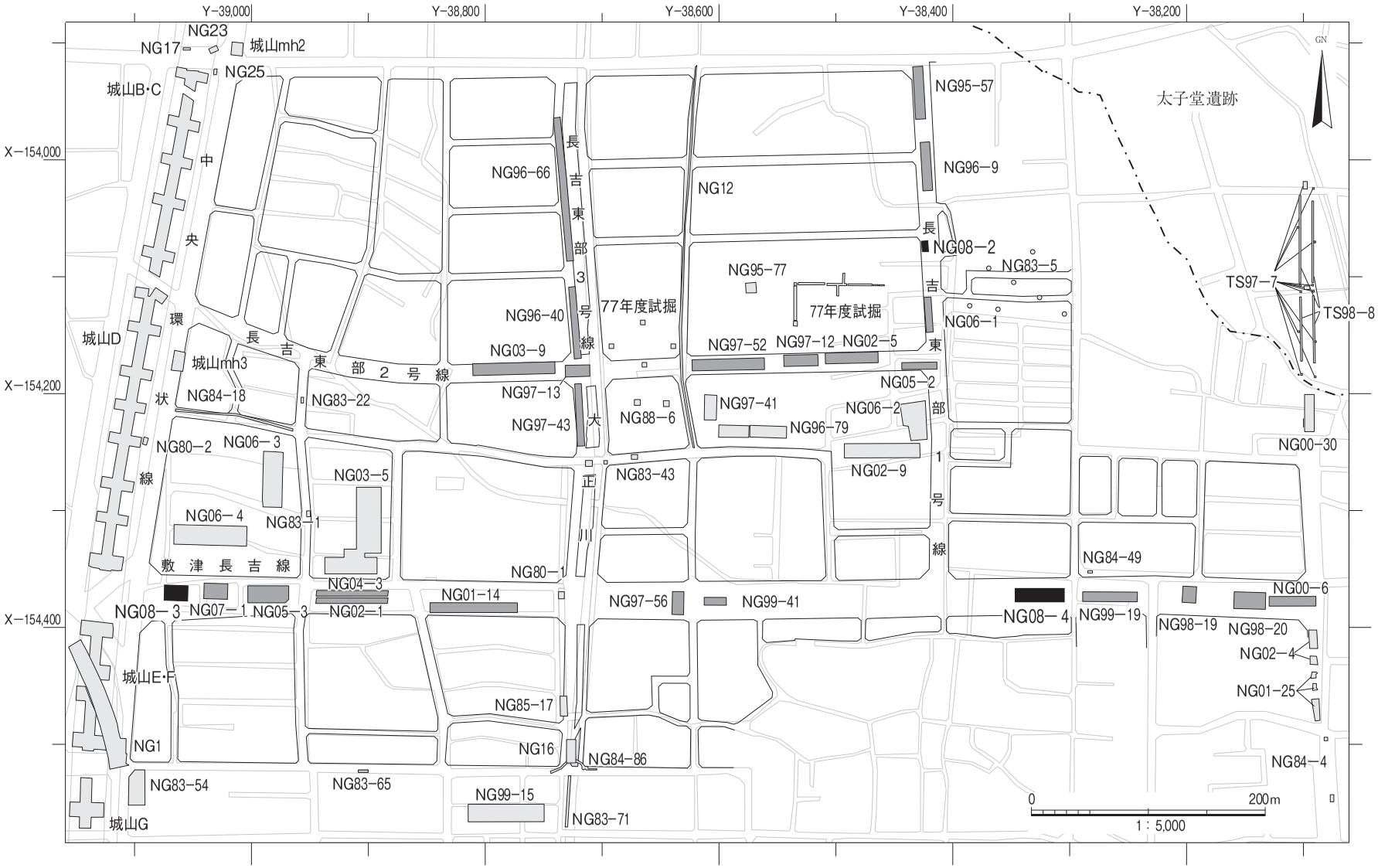


図２　周辺の遺跡と調査地



これまでの調査　長吉東部地区区画整理関係調査　今回報告する調査

図３　長原遺跡東北地区における既住の調査

表１　長原遺跡東北地区における既往の調査一覧（１）

調査次数等	お　も　な　内　容	文　献
城山 mh 2	弥生時代前～中期周溝墓状遺構、古墳	大阪文化財センター 1980
城山 mh 3	弥生時代中期遺物、古墳時代大溝、奈良時代遺物	大阪文化財センター 1980
城山 B·C 区	弥生時代中期方形周溝墓、古墳、飛鳥時代自然流路	大阪文化財センター 1986a
城山 D·E·F 区	弥生時代中・後期集落、古墳時代中期水田・土壙、飛鳥～平安時代溝、中世水田	大阪文化財センター 1986b
城山 G 区	弥生時代土壙群、飛鳥時代～中世水田	大阪文化財センター 1986c
NG 1	弥生時代中期溝・土壙墓、古墳時代中期溝、飛鳥時代大溝	大阪市文化財協会 1978
77 年度試掘	奈良時代溝	大阪市教育委員会·難波宮址顕彰会 1978
NG12	飛鳥時代杭列・流路・土器溜まり、平安時代土壙	大阪市文化財協会 1979a
NG16	弥生～古墳時代中期遺物、弥生時代溝、古墳時代前・中期溝・井戸	大阪市文化財協会 1979b
NG17	縄文時代晩期・弥生・古墳時代後期遺物	大阪市文化財協会 1979c
NG80－1	TP+7.2mで奈良時代溝、TP+6.9mで砂層（NG 8 層）	大阪市文化財協会 1981a
NG80－2	弥生・古墳時代遺物	大阪市文化財協会 1981b
NG23	弥生時代中期遺物、古墳	大阪市文化財協会 1980a
NG25	縄文時代晩期・弥生時代中期遺物	大阪市文化財協会 1980b
NG83－ 1	弥生時代中期住居、古墳時代中期住居	大阪市文化財協会 1984a
NG83－ 5	TP+8.0mで砂層	大阪市文化財協会 1984b
NG83－22	TP+7.6mで奈良時代包含層	大阪市文化財協会 1984c
NG83－43	TP+7.8mで砂層	大阪市文化財協会 1984d
NG83－54	TP+8.1mで砂層（NG 5 層か）	大阪市文化財協会1984e
NG83－63	弥生時代中期集落、弥生時代後期土器棺墓	大阪市文化財協会 1984f
NG83－65	弥生時代中期遺物、古墳時代中期土壙状遺構	大阪市文化財協会 1984g
NG84－ 4	古墳時代中期溝・土壙、飛鳥時代水田、古墳時代砂層なし	大阪市文化財協会 1985a
NG84－18	TP+8.2mで泥質土層	大阪市文化財協会 1985b
NG84－49	TP+7.7mで砂層	大阪市文化財協会 1985c
NG84－86	弥生時代後期～古墳時代中期遺物、庄内期井戸・建物、古墳時代中期土壙	大阪市文化財協会 1985d
NG85－17	縄文時代晩期遺物	大阪市文化財協会 1986
NG88－ 6	TP+7.8mで砂層（飛鳥時代初頭の須恵器が出土）、飛鳥時代包含層、奈良時代溝	大阪市文化財協会 1989
NG95－57	TP+8.2mで砂層（古墳時代後期中葉の須恵器が出土）、古墳時代後期柵、平安時代集落	大阪市文化財協会 1998a
NG95－77	TP+8.0mで砂層（古墳時代後期前葉の須恵器が出土）、古墳時代後期柵	大阪市文化財協会 1996b
NG96－ 9	弥生時代後期水田、TP+8.2mで砂層、飛鳥・平安時代集落	大阪市文化財協会 1999
NG96－40	TP+7.5～8.2mで砂層、飛鳥～平安時代溝	大阪市文化財協会 1999
NG96－66	弥生時代中期～庄内期遺物、TP+7.8mで砂層、古墳時代後期～奈良時代集落	大阪市文化財協会 1999

松原天理線建設工事に伴い、(財)大阪文化財センター（現(財)大阪府文化財センター)によって実施された調査が始まりで、城山遺跡として調査が行われた。これらとほぼ同じころ地下鉄谷町線延長工事や大阪市の下水管渠工事などに伴う調査を(財)大阪市文化財協会が行い、以後は当協会が長原遺跡の発掘調査を行ってきた。

当地区が長吉東部地区土地区画整理事業の対象地域となった1995年度以降は、年度ごとに発掘調査を継続して実施しており、1995年度から2007年度までの間、同事業に伴って実施された発掘調査は計23件を数える(図３・表１)。

初年度である1995年度には、都市計画道路長吉東部１号線予定地の北端部でNG95－57次調査を実施し、厚い洪水堆積層で埋没した古墳時代後期の敷葉工法によるとみられる土手状遺構や流路、飛鳥

表２　長原遺跡東北地区における既往の調査一覧（２）

調査次数等	お　も　な　内　容	文　　献
NG96－79	旧石器・縄文時代遺物、弥生時代後期～庄内式期遺構、飛鳥～平安時代遺構、TP+7.5mで砂層	大阪市文化財協会 1997
NG97－12	旧石器時代遺物集中部、縄文時代遺物、古墳中期時代木製品、飛鳥時代竈屋・掘立柱建物	大阪市文化財協会 2000a
NG97－13	古墳時代自然流路、平安時代溝	大阪市文化財協会 2000a
NG97－41	縄文時代晩期～弥生時代前期流路、弥生時代中期溝、古墳時代水田、奈良～平安時代遺構	大阪市文化財協会 1998b
NG97－43	弥生時代後期溝、古墳時代自然流路、飛鳥時代溝・土壙	大阪市文化財協会 2000a
NG97－52	旧石器・縄文時代遺物、古墳時代中期木製品、古墳時代後期土手状遺構、飛鳥時代遺構	大阪市文化財協会 2000a
NG97－56	縄文時代後期踏込み跡、平安時代土手状遺構	大阪市文化財協会 2000a
NG98－19	古墳時代中期土壇状遺構・土師器・須恵器・玉類・製塩土器	大阪市文化財協会 2001a
NG98－20	古墳時代中～後期流路、古墳時代中期土壇状遺構・竪穴住居、古代～中世耕地	大阪市文化財協会 2001a
TS97－ 7	平安時代後期井戸、土壙	八尾市文化財調査研究会 2000a
TS98－ 8	奈良～平安時代初期の小穴、中世井戸	八尾市文化財調査研究会 2000b
NG99－15	縄文時代石器集中部、弥生中～後期・古墳中期集落、飛鳥時代耕地	大阪市文化財協会 2002b
NG99－19	縄文時代後期土壙、弥生～古墳時代前期水田、平安時代～近世耕地	大阪市文化財協会 2002a
NG99－41	後期旧石器時代遺物、縄文時代早～前期住居址、古墳時代前期水田、平安時代流路・土手	大阪市文化財協会 2002a
NG00－6	古墳時代中期盛土遺構、古代溝、平安時代流路	大阪市文化財協会 2003a
NG00－30	奈良時代ピット、平安時代土壙・流路	大阪市文化財協会 2004a
NG01－14	古墳時代前期溝、古墳時代中期水田・溝群、飛鳥～奈良時代流路（墨画土器・獣骨出土）	大阪市文化財協会 2004b
NG01－25	中世水田	大阪市文化財協会 2004a
NG02－ 1	弥生時代中期集落、古墳時代畠状遺構、奈良時代流路	大阪市文化財協会 2005a
NG02－ 4	古墳時代盛土、中世水田	大阪市文化財協会 2004a
NG02－ 5	縄文時代中～後期土器、弥生時代前～中期溝・水田、古墳時代前期水田、古墳時代中期木製品	大阪市文化財協会 2005a
NG02－ 9	旧石器時代遺物、平安時代集落	大阪市文化財協会 2008a
NG03－ 5	弥生時代中期方形周溝墓、古墳時代中期ウマの埋葬、古墳時代後期溝群	大阪市文化財協会 2008b
NG03－ 9	弥生時代後期溝、古墳時代中・後期流路、平安時代集落	大阪市文化財協会 2006a
NG04－ 3	弥生時代土壙・溝、古墳時代溝、飛鳥時代溝、奈良時代流路、平安時代溝、中～近世水田・島畠	大阪市文化財協会 2007
NG05－ 2	流路、中世耕作地	大阪市文化財協会 2008c
NG05－ 3	古代流路、古墳時代溝、弥生時代盛土・溝	大阪市文化財協会 2008c
NG06－ 1	平安時代の耕作地、ヒトと偶蹄目の足跡、豊臣期の畠	大阪市文化財協会 2009a
NG06－ 2	飛鳥時代の流路、中世の耕作溝	大阪市文化財協会 2008a
NG06－ 3	弥生時代中～後期の溝、古墳時代中期の竪穴建物・総柱建物	大阪市文化財協会 2008b
NG06－ 4	弥生時代後期の竪穴建物、古墳時代中期竪穴建物・土壙・ピット	大阪市文化財協会 2008b
NG07－ 1	弥生時代の掘立柱建物・土壙、奈良時代の流路	大阪市文化財協会 2009a
NG07－ 3	縄文時代前半の尖頭器製作址、古代の水田	大阪市文化財協会 2009b

時代と平安時代の掘立柱建物などを検出した。

1996年度には、前年度調査地の南側で長さ約42m分を対象にNG96－９次調査を実施し、弥生時代後期から古墳時代初頭の水田、飛鳥時代の掘立柱建物などを検出した。また、当年度には大正川の西側に沿う長吉東部３号線予定地も調査の対象となり、大阪市建設局長吉東部土地区画整理事務所ならびに大阪市教育委員会文化財保護課の立会いのもと、２箇所の試掘調査を行った。その結果、1995年度の調査で検出した古墳時代後期の厚い洪水堆積層に相当する地層が確認されたことから、その下に存在する古墳時代以前の遺構面も調査することになり、現地表下４ｍまでの遺構・遺物が調査の対象となった。この協議の結果を受けて長吉東部２号線との交差点の北側に当る部分で行ったNG96－

40・66次の２箇所の調査では、弥生時代後期の水田、古墳時代後期～飛鳥時代の掘立柱建物、平安時代の遺構群が検出された。

1997年度には、長吉東部２号線予定地内のNG97－12・13・52次調査と、長吉東部３号線予定地内のNG97－43次調査、敷津長吉線予定地のNG97－56次調査の合計５箇所の調査を実施した。中でもNG02－５次調査地の西側に近接するNG97－12・52次調査地では、旧石器時代の石器製作址、縄文時代中期以前の流路、縄文時代中期～弥生時代前期の溝・土壙、弥生時代中期の水田、弥生時代後期～古墳時代前期の土壙・柱穴、古墳時代中～後期の土手状遺構、掘立柱建物を含む飛鳥時代および平安時代の遺構群などが検出され、多様な成果を得ることができた。このうち、特筆すべきは旧石器時代の石器製作址で、14,000点におよぶサヌカイト剥片とともに、約50点のナイフ形石器や削器などのサヌカイト製品が出土しており、後期旧石器時代の石器製作技法を検討する上で重要な資料として現在でも注目を集めている。

1998年度には、敷津長吉線予定地内のNG98－19・20次調査を実施し、古墳時代中期の盛土遺構とその周辺から、祭祀に伴うと考えられる滑石製勾玉・臼玉や、多量の土器が出土した。

1999年度には、敷津長吉線予定地内でNG99－19・41次調査を実施した。ここでは縄文時代早期の遺構群、縄文時代中期の住居状遺構、縄文時代後期の炉跡と土器集積、弥生～古墳時代の水田、古代～近世にかけての水田や鋤溝群などを検出した。

2000年度には、敷津長吉線予定地の東端でNG00－６次調査を実施した。東隣のNG98－20次調査地で確認された盛土遺構と一連の、古墳時代中期の盛土のほか、平安時代の流路が見つかった。また、遺構に伴うものではないが、重弧文軒平瓦をはじめとする古代の瓦や和同開珎などの銅銭が出土した。

2001年度に実施した敷津長吉線予定地内におけるNG01－14次調査では、古墳時代中期と平安時代後期の水田、古墳時代後期～奈良時代にかけての自然流路が見つかった。奈良時代の流路からは大量のウシ・ウマの骨とともに墨画土器・ミニチュア土器などの祭祀遺物が出土した。これらは当時の祭祀のようすを窺い知ることのできる好資料である。

2002年度には長吉出戸８丁目の敷津長吉線予定地におけるNG02－１次調査と、同長吉東部２号線予定地内のNG02－５次調査を行った。

NG02－１次調査では弥生時代中期の集落の一部を調査し、円形の竪穴建物を検出した。また、その上位では古墳時代の畠遺構や奈良時代の流路を検出した。NG02－５次調査では沖積層がかなり深くまで厚く堆積していたが、その沖積層の下部から縄文時代中～後期の土器が、また上部から古代～中世の遺物が出土した。

2003年度には長吉出戸７丁目の長吉東部２号線予定地内でNG03－９次調査を行った。ここでも古墳～平安時代の自然流路を検出し、流路の東岸で平安時代の集落の一部を検出した。しかし、その後は湿地性の堆積層が厚く堆積し、室町時代になって耕作地として利用されるまでここは水没していたことが判明した。

2004年度にはNG02－１次調査地の北に隣接するNG04－３次調査を行った。この調査ではNG02－１次調査で検出した弥生時代の集落や古墳時代の畠遺構の続きを検出した。中でも注目されるもの

は、飛鳥～奈良時代の地層から出土した「束十五」と記載された木簡の削り屑の出土があげられる。削り屑が出土したことで、この地で文字を書き記した木簡の表面を削り、再度利用していたことが判明したのである。ここで収穫された物（おそらくは稲などの農作物）の量を官吏が記し、荷札としたのであろう。

2005年度は、長吉東部２号線内でNG05－２・05－３次調査を行った。NG05－２次調査地では、自然流路と中世の耕作地を検出した。NG05－３次調査地では、弥生時代の盛土と溝、古墳時代の溝、古代の流路を検出した。

2006年度は、長吉東部２号線内でNG06－１次調査を行った。この調査地では、平安時代の耕作地およびそれ以前の地震痕跡が検出された。弥生～古墳時代の流路や湿地性の堆積物からは土器および古墳時代の舟形木製品が出土している。

2007年度は、中央環状線の東にある長吉敷津線の予定地内でNG07－１次調査を行った。この調査地では、弥生時代の掘立柱建物・土壙のほか、古墳時代の土壙、奈良時代の自然流路が確認され、奈良時代の流路からは多数の人面墨画土器が出土している。

以上が長吉東部地区土地区画整理事業に伴う調査の概要である。これらの調査については、それぞれ調査の次年度に整理作業を行い、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅰ～ ⅩⅢを刊行し、調査成果を公表している。

一方、長吉東部地区土地区画整理事業に伴う調査以外では、特筆すべき調査として、NG02－1・04－３次調査地の北で隣接して行ったNG03－５次調査およびこの西隣で行われたNG06－3・４次調査がある[大阪市文化財協会2008b]。これらの調査では弥生時代中期の墓域のほか、弥生時代中～後期の集落跡、その上位で古墳時代中期の集落跡や畠状遺構を検出した。また、その東の南北道路内のNG83－１次調査では、小規模な調査ながら弥生時代前期の小穴群、弥生時代中期の建物とみられる方形遺構、古墳時代中期の柱穴を含む小穴群などを確認した。

また、NG02－５次調査地の南西約100mで行われたNG96－79次調査では、後期旧石器時代の石器遺物や縄文時代中期後半の里木式土器が出土した。また、弥生時代後期～庄内式期の井戸・溝、飛鳥時代の井戸・溝・土壙、平安時代後期～鎌倉時代にかけての井戸・溝などが検出された。そのほか、NG97－41次調査では、縄文時代晩期～弥生時代前期の流路、弥生時代中期の溝、古墳時代前～中期の水田、奈良時代前後の井戸・溝、平安時代の小穴・溝・流路などが検出された。

NG06－１次調査地の南方で行われたNG02－９次調査では、約２万８千年前の平安神宮火山灰（AT）降灰層準よりも下位の地層から出土した後期旧石器時代の石器遺物が、注目すべき遺物としてあげられる。また、平安時代の掘立柱建物・畠・水田・小穴などが見つかっている。

（平田）

第２節　調査の経過と概要

１）NG08－２次調査

調査地は長吉六反１丁目に位置し、南北方向の都市計画道路である長吉東部１号線の予定地内にある。付近では北で行われたNG96－９次調査、南で行われたNG06－１次調査をはじめとして、数多くの調査が行われている（図４）。

今回の調査地は、既存の水道管および下水道工事との関係上、調査区の東南および西北部を窪ませる形で調査区を設定した。土留工事など調査前の準備工事は2008年８月23日に開始した。

９月８日より機械掘削を開始した。機械掘削は近世の作土層である後述の第２層までとし、これより下位は人力で掘削作業を行った。遺構・遺物の検出を行うとともに、記録および写真撮影作業を行い、10月７日には委託による基準点測量および水準測量を実施した。なお、第11層を検出した段階で、湧水が激しくなり、人力での掘削作業が難しくなったため、これ以下の地層は重機による掘削で断面観察を行った。

11月４日には現地での掘削作業をほぼ終了し、その後は埋戻し作業を行った。埋戻し作業および万能塀撤去作業などの諸作業を含め、11月28日には撤収を含む現地における作業すべてを完了した。

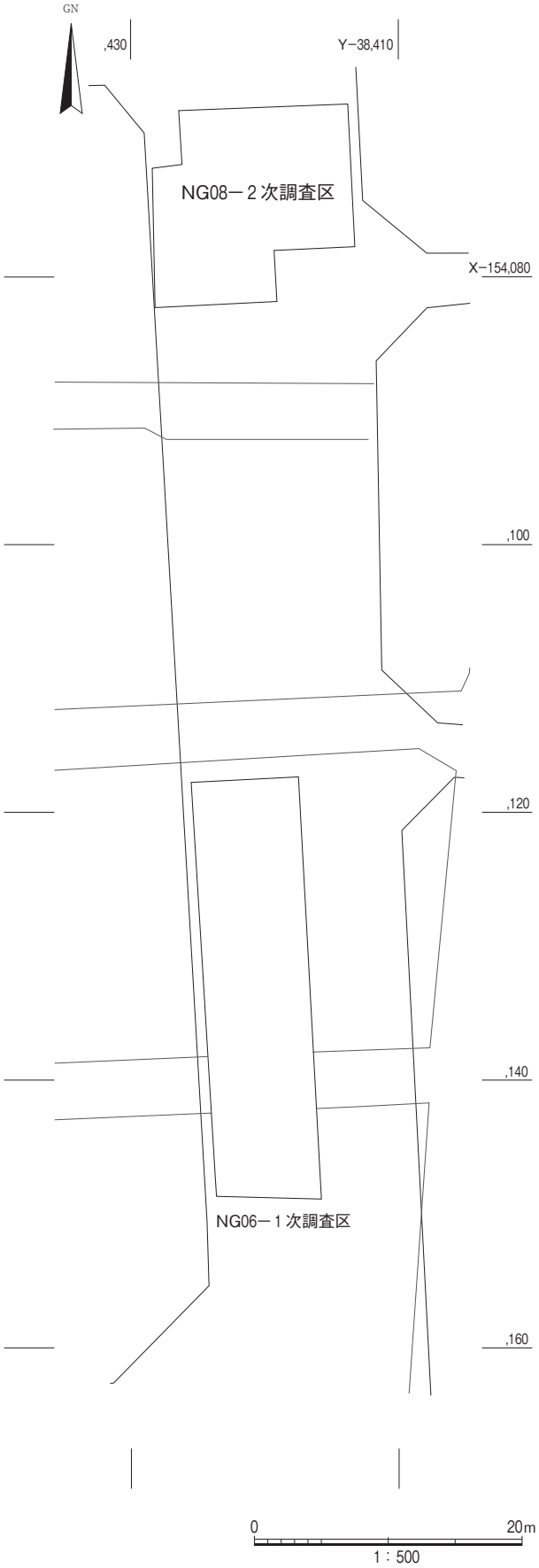


図４　NG08－２次調査区位置図

２）NG08－３次調査

調査地は長吉出戸８丁目の敷津長吉線予定地に位置する。調査地周辺ではこれまでに、地下鉄谷町線、近畿自動車道、土地区画整理

表３　本書で報告する発掘調査

調査次数	調査期間	面積(㎡)	調査担当者	おもな遺構
NG08－２	2008年８月23日～2008年11月28日	185	小田木富慈美	古墳：流路・地震痕跡、飛鳥：溝
NG08－３	2008年10月27日～2009年３月17日	250	黒田慶一	弥生後期：竪穴建物・土壙・溝、奈良：水田
NG08－４	2008年10月20日～2009年３月19日	470	平田洋司	古墳：水田・流路、平安：溝

事業、市営住宅建設などに伴って多くの調査が実施され、弥生時代中期～後期の建物や方形周溝墓が見つかっている。また、東には古代の流路が検出されたNG07－１次調査地がある(図５)。

土留工など現地における準備工は2008年10月27日より開始した。12月３日からは重機による掘削を開始し、後述の現代作土層である第１層まで除去し。以下は地層の状況により、人力と重機を併用して掘削を行った。適宜、遺構検出・掘削、記録・写真撮影などの諸作業を行いながら調査を進めた。また、後述の第4c 層除去後には土留支保工事を行うとともに12月15日には委託による基準点測量および水準測量を行った。

翌2009年２月26日には現地における記録作業を完了し、翌日から埋戻しを開始した。３月17日には撤収作業を含む現地におけるすべての作業を完了した。

３）NG08－４次調査

調査地は長吉六反１丁目の敷津長吉線予定地に位置する。当地は遺跡内でも低位段丘が深く埋没し、その上位に沖積層が厚く堆積している地域である。調査地の東側では、NG99－19次調査が行われており、古墳時代前期の水田のほか、縄文時代後期の土器が多数発見されている(図６)。

土留工などの準備作業は2008年10月20日から開始した。11月26日からは重機による掘削を開始した。重機による掘削は後述の第４層を除去した時点までとした。第４層下面での調査終了後は、第５

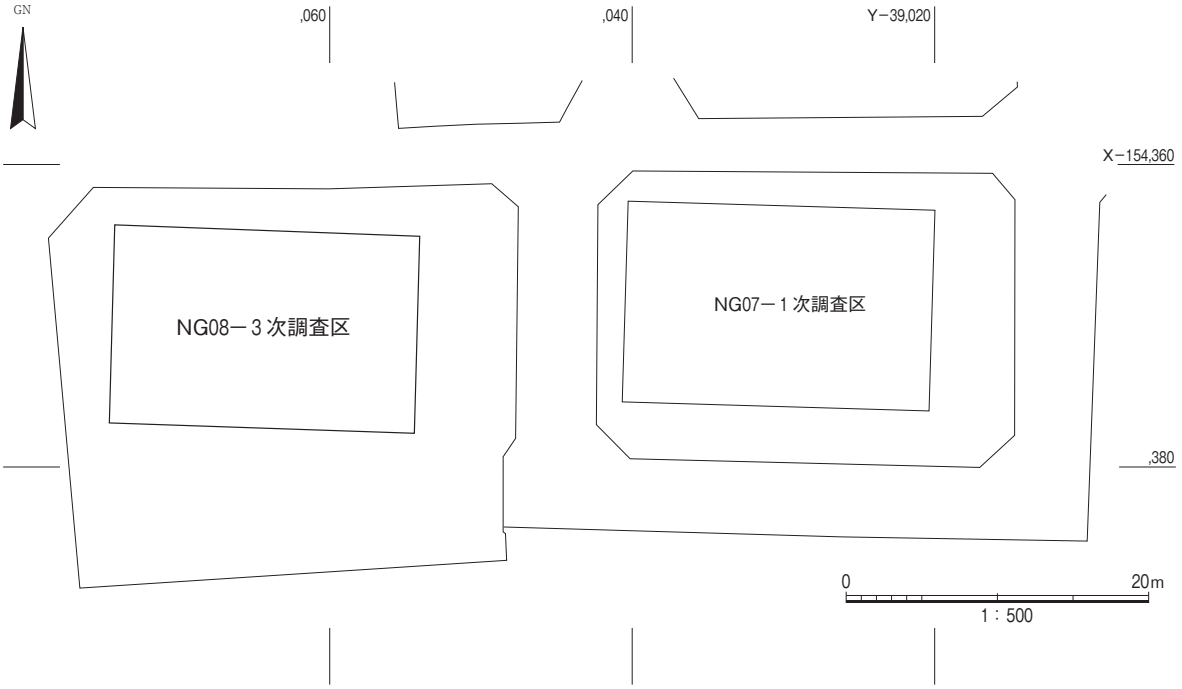


図５　NG08－３次調査区位置図

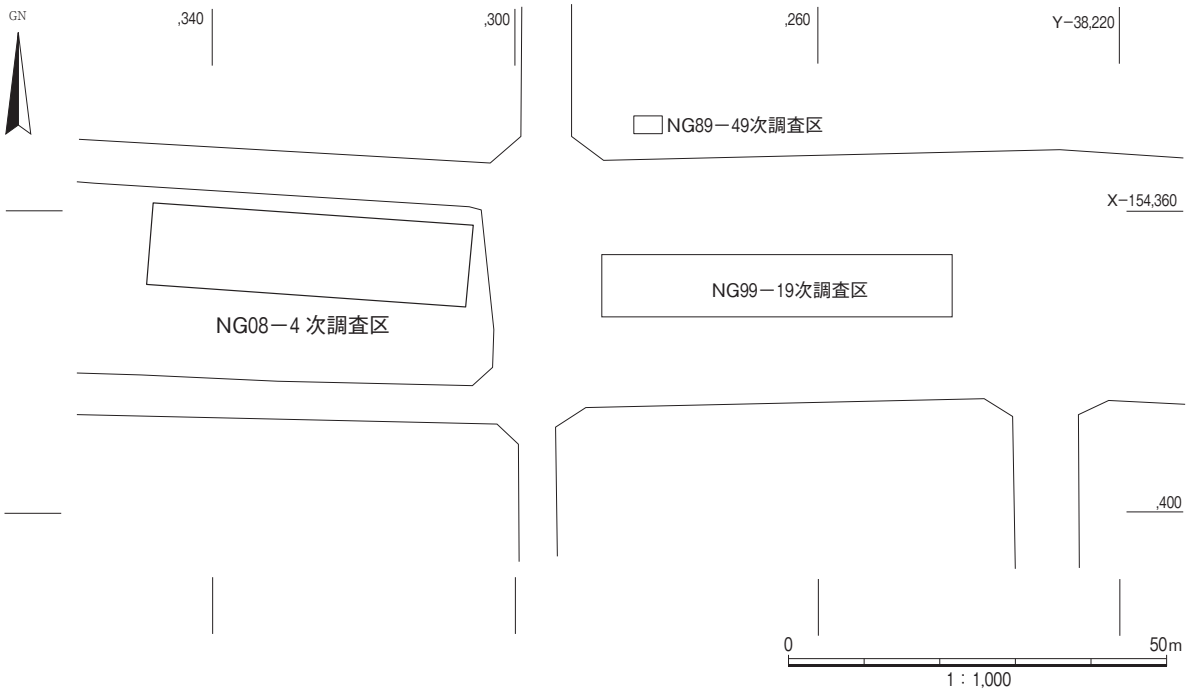


図６　NG08－４次調査区位置図

～７層が厚い水成層であったため、これらの地層の掘削に再び重機を用いた。この間には切梁工事も実施した。その他はすべて人力による掘削で進めた。途中、遺構検出作業、図面作成、写真撮影などを行い、また、12月11日には委託による基準点測量および水準測量を行った。翌2009年２月27日には調査に係わる作業を終了した。３月19日には埋戻し作業、撤収などの諸作業を済ませ、現地におけるすべての作業を完了した。

（平田）

第Ⅱ章　調査の結果

第１節　NG08－２次調査

１)層序

現代盛土および近～現代の作土を除去すると、近世以前の地層が良好な状態で確認された。なお、縄文時代の水成層である第11層を確認した段階で、湧水が激しくなった。また、第11層は周辺の調査知見により厚さ５ｍ以上になることが予想されたため、これより下位は一部のみを掘削して、現地表下5.5mまでの地層を確認した。以下で各層の特徴について述べる(図７、表４、図版１～３)。また長原遺跡東北地区の基本層序(表５)および長原遺跡の基本層序(表６)との対比をあわせて記す。

第０層：厚さ80㎝で、現代の整地層である。RK０層、NG０層に相当する。

第１層：層厚５～10㎝の暗灰黄色(2.5Y4/2)粗粒砂質シルト層で、現代の作土層である。RK１層、NG１層に相当する。

第２層：近世の作土層で、間に粗粒砂の薄層を挟んで第2a・2b層に細分される。第2a層は灰オリーブ色(7.5Y4/2)礫混り中粒砂質シルト層で、層厚は５～10㎝である。第2b層はさらに、第2bi・2bii層の２枚に細分される。第2bi層はオリーブ褐色(2.5Y4/4)礫混り細粒砂質シルト層で、層厚は10㎝である。第2bii層は暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質細粒砂層で、層厚は10～20㎝を測る。第2a・2ｂ層の下面では、耕作に伴う溝が確認されている。本層からは肥前磁器および中国製青花が出土している。第２層はRK２層、NG２層に相当する。

第３層：第3a・3ｂ層に細分される。第3a層は第3ai～3aiii層の３層に細分される。第3ai・3aii層は作土層で、鉄分の沈着が著しい。第3ai層はオリーブ褐色(2.5Y4/3)粘土質細粒砂層で、層厚は10㎝である。調査区の全域に分布する。第3aii層は黄褐色(2.5Y5/3)シルト質細粒砂層で、調査区の東半部にのみ分布し、南へ向って厚く堆積する。層厚は10～20㎝である。第3aiii層は黄褐色(2.5Y4/3)細粒～中粒砂からなる水成層で、調査区の東南部にのみ残存する。層厚は10㎝である。第3a層はRK３層、NG３層に相当する。第3b層はオリーブ褐色(2.5Y4/3)粘土質シルト～細粒砂層で、調査区の全域で確認された作土層である。下面では耕作に伴う溝が検出された。層厚は20～30㎝である。第3b層からの出土遺物は白磁・瓦器など平安時代後期のものが中心であるが、鎌倉時代のものも含む。第3b層はRK4A～4B層、NG4A～4Ｂ層に相当する。

第４層：第4a～4c層の３層に細分される。第4a層は暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土質シルト層で、層厚は20～30㎝である。本層は作土層で、酸化マンガンの斑紋が著しい。瓦器・土師器を含む。RK4B層、NG4B層に相当する。第4b層は暗褐色(10YR3/4)礫混り中粒～細粒砂質シルト層で、酸化鉄の斑紋の著しい作土層である。古代の土師器・須恵器のほか黒色土器を含む。RK4C～５層、NG4C～6A層

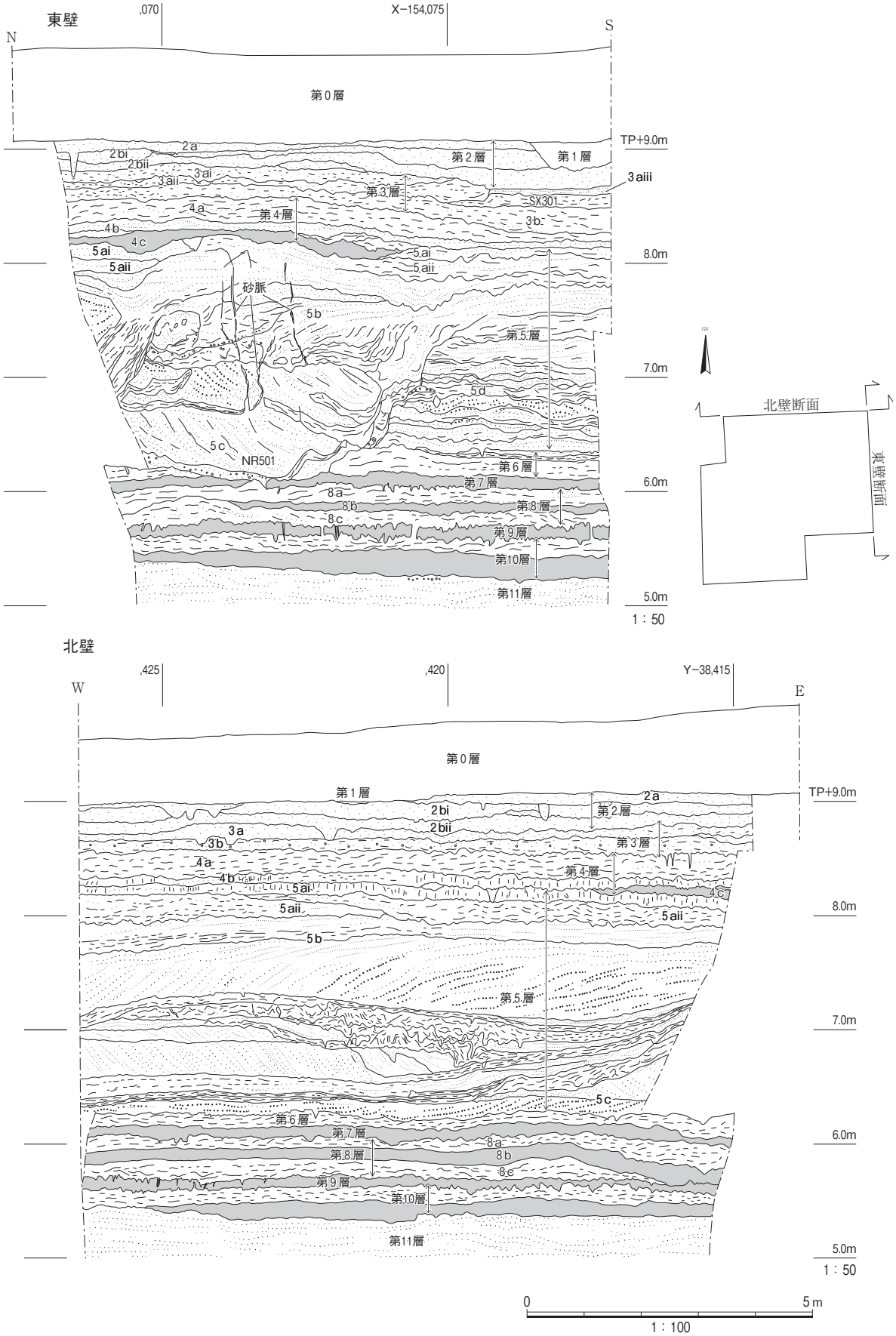

東壁
N
S
X−154,075
第0層
TP+9.0m
第1層
第2層
第3層
第4層
第5層
第6層
第7層
第8層
第9層
第10層
第11層
SX301
NR501
砂脈
8.0m
7.0m
6.0m
5.0m
1：50
北壁断面
東壁断面
北壁
W
E
Y−38,415
0
5m
1：100

図７　地層断面図

表４　NG08－２次調査層序表

層序		主たる岩相	層厚(cm)	地層の特徴	遺構	おもな遺物	RK層序	NG層序	時代
第０層		現代整地層	80				0	0	現代
第１層		暗灰黄色（2.5Y4/2）粗粒砂質シルト	5～10	作土層			1	1	
第２層	a	灰オリーブ色（7.5Y4/2）礫混り中粒砂質シルト	5～10	作土層	↓SD201		2	2	江戸
	bi	オリーブ褐色（2.5Y4/4）礫混り細粒砂質シルト	10	作土層		肥前磁器・青花	2	2	
	bii	暗灰黄色（2.5Y5/2）シルト質細粒砂	10～20	作土層	↓耕作溝		2	2	
第３層	ai	オリーブ褐色（2.5Y4/3）粘土質細粒砂	10～20	作土層			3	3	室町鎌倉
	aii	黄褐色（2.5Y5/3）シルト質細粒砂	10～20	作土層	↓SX301・耕作溝		3	3	
	aiii	黄褐色（2.5Y4/3）中粒～細粒砂	10	水成層			3	3	
	b	オリーブ褐色（2.5Y4/3）粘土質シルト～細粒砂	20～30	作土層	↓耕作溝	瓦器・白磁	4A～4B	4A～4B	
第４層	a	暗灰黄色（2.5Y5/2）粘土質シルト	20～30	作土層		土師器・瓦器	4B	4B	平安
	b	暗褐色（10YR3/4）礫混り中粒～細粒砂質シルト	5～10	作土層	↓SD403・404	土師器・須恵器・黒色土器	4C～5	4C～6A	
	c	灰黄褐色（10YR4/2）粗粒砂質粘土～シルト	5～20	古土壌	↓SD401・402	土師器・須恵器	6	6B	飛鳥
第５層	ai	褐色（7.5YR4/6）シルト	10～20	水成層			7A	7B	
	aii	灰オリーブ色（5Y4/2）粘土質シルト	10～20	水成層	←SX501	土師器・須恵器・木製品	7B	7B	古墳
	b	灰オリーブ色（5Y4/2）粗粒砂～シルト	20～120	水成層			7B	7B	
	c	灰オリーブ色（5Y4/2）粗粒砂～シルト	50	水成層	←NR501	土師器・須恵器・木製品	7B	7B	
	d	植物遺体を多く含むオリーブ黒色（5Y3/1）粘土と灰色（7.5Y5/1）細粒砂の互層	100	水成層			7B	7B	
第６層		暗緑灰色（10GY3/1）粘土	10～20	水成層			7B	7B	
第７層		暗オリーブ灰色（2.5Y3/1）粘土質シルト	10～20	古土壌			8A	7B	弥生
第８層	a	暗オリーブ灰色（2.5GY3/1）シルト質粘土	10				8～9	7B～8	
	b	暗緑灰色（10GY3/1）シルト質粘土	10				8～9	7B～8	
	c	黒色（2.5GY2/1）シルト質粘土	10	作土層?		弥生土器	8～9	7B～8	
第９層		黒色（10Y2/1）シルト質粘土	10～20	上部は擾乱			9	8	縄文
第10層		オリーブ黒色（7.5Y3/1）シルト質粘土～黒色（7.5Y2/1）粘土質シルト	20～40	下部は暗色化			10	9B～9C	
第11層		オリーブ黒色（10Y3/1）粗粒砂～礫	＞80	水成層			11	10・11	

凡例　←上面検出遺構　↓下面検出遺構

に相当する。第4c層は灰黄褐色(10YR4/2)粗粒砂質粘土～シルト層で、層厚は５～20cmである。本層は調査区の東半から南部にかけて分布し、溝や落込みの埋土となる。飛鳥時代の土師器・須恵器を多く含んでおり、RK６層、NG6B層に相当する。

第５層：層厚180～200cmの水成層で、数層に細分される。第5a層とした本層の最上部は、第5ai層とした層厚10～20cmの褐色(7.5YR4/6)シルト層と、第5aii層とした層厚10～20cmの灰オリーブ色(5Y4/2)粘土質シルト層に細分され、粒径の細かな堆積物で構成される。その下位には第5b層とした層厚20～120cmの灰オリーブ色(5Y4/2)粗粒砂～シルト層、第5c層とした灰オリーブ色(5Y4/2)粗粒砂～礫層が続く。第5c層は、層厚50cmで自然流路NR501の埋土である。調査区南半では第5c層の下位に第5d層とした植物遺体を多く含むオリーブ黒色(5Y3/1)粘土層や灰色(7.5Y5/1)細粒砂層など砂泥の互層が、層厚100cmにわたって堆積している。第5b層上面では、調査区の西で古墳時代中期の土師器や製塩土器を廃棄した落込みSX501が検出されたほか、第5b層から第5c層にかけて、地震による地すべりや砂脈が確認されている。また、調査区の北半部では、第5d層の上面で北東から南西へ向って流れる自然流路NR501が確認されている。出土遺物は、第5a層から古墳時代後期末～飛鳥時代の須恵器が出土しているほか、NR501からは弥生時代前期末～古墳時代中期の遺物が数多く出土している。なお、植物遺体を多く含む層からは、木製品や加工木が出土している。本層は出土遺物より、最上部の第5a層がRK7A層、NG7B層に相当し、これより下位の第5b～5d層はRK7B層、NG7B層に相当する。

第６層より下位ではほとんど遺物が出土しなかったため、以下では周辺の調査知見よりRK層序、NG層序との対比を行っている。

第６層：暗緑灰色(10GY3/1)粘土層で、層厚は10～20cmである。RK7B層、NG7B層に相当する。

第７層：暗オリーブ灰色(2.5Y3/1)粘土質シルトの暗色帯構成層で、層厚は10～20cmである。

表５　長原遺跡東北地区の基本層序（[大阪市文化財協会2003a]より）

	層序		層序概念図	主たる岩相		層厚(cm)	自然現象自然遺物ほか	おもな遺構・遺物	模式地	NG層序との対比	時代
沖積層上部層Ⅰ	RK0層			現代客土							近代・現代
	RK1層			現代作土		10−20				1	
	RK2層	i		オリーブ灰色細～中粒砂混り粘土質シルト		≦15	暗色帯	↓小溝群	NG96−66北部	2	江戸
		ii		灰～オリーブ灰色細粒砂混りシルト		≦15					
		iii		オリーブ灰色細粒砂混りシルト		≦15					
		iv		灰色粘土質シルト		≦10		↓小溝群・畝間　国産陶磁器(96−66次)			
	RK3層	i		灰オリーブ色粗粒砂混りシルト		≦20			NG95−57 NG96−9	3	室町～鎌倉
		ii		黄褐色粘土質シルト		≦10		↓島畠溝　中国製青磁(96−9次)			
		iii		灰オリーブ色粗粒砂混りシルト質細粒砂		5−15					
		iv		オリーブ色シルト質極細粒砂		≦20		↓小溝・水田(99−41次)　瓦器(C−Ⅲ～Ⅳ期：96−9次)			
	RK4A層			黄褐色シルト質極細粒砂～礫混り粗粒砂		15−20		↓自然流路　瓦器(C−Ⅲ期：97−52次)	NG96−79 NG97−12 NG97−52	4A	
	RK4B層	i		オリーブ褐色粘土質シルト		≦15		↓不整形落込み　瓦器(C−Ⅲ期：96−9次)	NG96−9	4B	
		ii		オリーブ褐色シルト		≦10		↓土器埋納遺構　瓦器(C−Ⅲ期：96−9次)			
		iii		黄褐～暗灰黄色シルト～中粒砂 ≦55cm	灰オリーブ色シルト～細粒砂	10		▽井戸 平安Ⅲ新～平安Ⅳ新　↓掘立柱建物　瓦器(C−Ⅱ期)平安Ⅳ期(96−9次)			
		iv			オリーブ褐色粘土質シルト	10		瓦器(C−Ⅱ期)平安Ⅳ期(96−9次)			
	RK4C層	i		オリーブ褐色中粒砂混りシルト		8		平安Ⅲ期(96−40次)	NG96−40	4C	平安
		ii		黄褐色中粒砂混りシルト		≦8		↓溝			
		iii		灰オリーブ色中粒砂混りシルト		6−10					
		iv		にぶい黄褐色中粒砂混りシルト		8−12		↓溝			
		v		暗灰黄褐色シルト		≦14		↓溝　平安Ⅲ期(96−40次)			
		vi		灰黄褐色細粒砂混りシルト		10		↓土器埋納遺構　平安Ⅱ～Ⅲ期(96−40次)			
		vii		暗灰黄色中～細粒砂混りシルト		5−20		↓溝　平安Ⅰ・Ⅱ期(96−40次)			
	RK5層			暗褐色～黒褐色シルト～細粒砂 ≦70cm	暗灰黄色シルト質細粒砂	≦15		↓鍬跡	NG96−66	5A・B～6A	奈良
	RK6A層				暗灰黄色細粒砂質シルト	10		▽溝・掘立柱建物 TK43～平城宮土器　↓溝・土壙　飛鳥IorⅡ(96−79次)	NG96−79	6B～7A	飛鳥
	RK6B層				灰色シルト	10		↓溝・土壙・井戸　飛鳥IorⅡ(96−79次)			
	RK6C層				暗灰色粘土質シルト	10		←溝(97−43次)　↓溝			
	RK7A層	i		オリーブ褐色シルト～細粒砂		≦40	植物遺体多	飛鳥Ⅱ(97−43次)	NG97−43	7B0	
		ii		灰色砂礫		≦70		TK209(97−43次)			
		iii		黄褐色細～粗粒砂		≦180		TK10新相(97−43次)	NG97−43	7Bi	古墳後期
		iv		暗オリーブ灰色粘土質シルト～明黄褐色砂礫		≦250		▽土手状遺構(95−57次)　TK10(95−57・97−52次など) ←堤防状盛土(98−20次)	NG95−57 NG96−66		
		v		黒色シルト～粘土質シルト		30		▽溝(00−6次)　▽水平断層(99−41次)　TK23・47(97−41次)	NG97−41		
		vi		灰黄色砂礫		≦210		TK23・47(96−66次など)	NG96−66		
		vii		灰オリーブ色中粒砂～砂礫		≦110		←踏込み←盛土(98−19・20,00−6次) 水田(00−6次)　TK216(98−20次)	NG97−43		
沖積層上部層Ⅱ	RK7B層	i		灰オリーブ色シルト		5−25	植物遺体を多く含む	曲物(97−12次)	NG96−79 NG97−12 NG97−41	7Bii	
		ii		オリーブ黒色粘土質シルト		7	植物遺体を多く含む	←水田(99−19・41次)　土師器(船橋O−I/Ⅱ；97−12次)	NG97−12		古墳前期
	RK8A層			暗緑灰色シルト		5−20		布留式土器(96−66次)	NG96−66	7Biii	
	RK8B層			緑灰色粘土質シルト		7		←水田(99−19次)　庄内～布留式土器(96−9、97−41・52次)	NG96−66		
	RK8C'層			暗灰色シルト		≦10		弥生Ⅴ様式(96−9次)	NG96−9		弥生後期
	RK8C層			暗緑灰色シルト		5−20		弥生Ⅴ様式(96−66次)	NG96−66		
	RK9A層			暗オリーブ灰色シルト～極細～粗粒砂混り粘土質シルト		≦20		←土壙・溝(97−43次)	NG97−41	8A	
	RK9B層			暗灰色シルト～シルト質粘土		≦18		弥生Ⅳ様式(96−66次)	NG96−66 NG96−79	8B	弥生中期
	RK9C層	i		暗オリーブ灰色砂礫～細粒砂混り粘土		≦30		←水田面・溝(97−52次)	NG97−12	8Ci	
		ii		オリーブ黒色シルト質粘土		20			NG97−52	8Cii'	
		iii		緑灰色シルト		≦3		←土壙・溝・踏込み(97−41次)	NG97−52	8Cii	
	RK10A層			オリーブ黒色シルト		5		▽水平断層　縄文長原式・弥生I様式(97−41次)	NG96−79	9A	弥生前期
	RK10B層	i		灰オリーブ色シルト		40			NG95−79	9B	縄文晩期
		ii		暗オリーブ色粘土質シルト		≦5					
		iii		暗オリーブ色シルト		≦25					
		iv		オリーブ黒色シルト		≦25					
		v		緑灰色シルト～灰色中粒砂		≦5		←土器集積・炉(99−19次) 踏込み(97−41・56、99−41次)			
	RK10C層	i		黒色シルト		10		←噴砂(99−19次)　北白川上層Ⅱ～Ⅲ(99−19次)	NG96−79	9Ci	縄文後期
		ii		緑灰色シルト		8		縄文土器			
		iii		黒色シルト		8		縄文土器(97−12次)		9Cii	
		iv		黒褐色シルト質極細粒砂		15				9Ciii	
	RK11層	i		灰色砂礫		≦250		北白川上層Ⅱ(99−19次)	NG96−79 NG97−12	10・11	
		ii		暗オリーブ灰色粘土		≦70					
沖積層上部層Ⅲ	RK12A層	i		灰～黒褐色シルト質粘土～粗粒砂混り砂質シルト	黒色シルト	5	化立石木	▽里木Ⅱ式(96−79次)　4740±140SI(Gak−14942)(97−52、98−20次)	NG96−79 NG97−41 NG97−52	12Ai	縄文中期
		ii			黒色シルト質細粒砂	10		4910±140SI(Gak−14942)(97−52、98−20次)		12Aii	
		iii			オリーブ黒色シルト質細～粗粒砂	12		(97−52、98−20次)			
	RK12B層	i			暗褐色細粒砂質シルト	15		(97−52、98−20次)		12B	
		ii			緑灰色シルト～灰色粗粒砂	30−120		(97−52、98−20次)			
		iii			灰黄色粘土質シルト	30−40		▽周溝・土壙・焼土 船元Ⅱ(99−41次)　(97−52、98−20次)			
	RK12C層	i			灰色中～細粒砂質シルト	12	生痕化石	(97−52、98−20次)		12C	
		ii			灰色極粗粒砂～黒褐色シルト	≦90	植物遺体	(97−52、98−20次)			
沖積層下部層	RK12D層	i	RK12／13層漸移帯		黒色中粒砂質シルト　灰色粘土質シルト	30	生痕化石	(97−52、98−20次)			
		ii			オリーブ黒色シルト質細粒砂	5		(97−52、98−20次)	NG97−52		
		iii			黄灰色シルト質極細粒砂	5	模大路火山灰(K−Ah)	▽サヌカイト製石器遺物(96−79次)　(97−52、98−20次)			縄文早期
		iv			オリーブ黒色極細粒砂質シルト	10	生痕化石	▽不整形土壙・焼土(99−41次) 押型・撚糸(99−41次) 石器製作址(97−52次)　7230±40BP(Beta−146531)(99−41次)		12D	縄文草創期
	RK13A層	i			灰オリーブ色シルト	10−20		▽サヌカイト製石器遺物(96−79次)　(97−52、98−20次)	NG96−79 NG97−12 NG97−52	13Ai	
		ii		灰オリーブ色火山灰質シルト		5−10	阪手火山灰			13Aii	
低位段丘構成層	RK13B層	i		灰色砂礫質粘土		10−20		石器製作址(97−12次)・ナイフ形石器(97−52・96−79次)	NG96−79	13B	
		ii		オリーブ灰色ガラス質火山灰		5	平安神宮火山灰(AT)		NG97−52		
	RK13C層			オリーブ灰色粘土質シルト		10			NG97−52	13C	後期旧石器
	RK14層			緑灰色砂礫混り粘土質シルト		20−40			NG97−12	14	
	RK15A層			緑灰色シルト～シルト質粘土		100−150			NG97−12・52	15	
	RK15B層			灰色砂礫		≧100		←ゾウ足跡化石			
中位段丘構成層	RK16A層			緑灰色シルト質極細～細粒砂		20−30			NG96−79	16A	
	RK16B層	i		暗灰黄色泥炭中粒砂質粘土		120			NG96−79	16B	中期旧石器
		ii		暗灰黄色泥炭中粒砂質粘土		10−20					
		iii		灰色火山灰極細粒砂質シルト		10	吾彦火山灰(Aso-4)				
		iv		緑灰色粘土層		40					

凡例
←は上面検出遺構
↓は下・基底面検出遺構
▽は地層内検出遺構

表６　長原遺跡の基本層序（[趙2003]より）

層序			層序概念図	岩相	層厚（cm）	自然現象自然遺物ほか	おもな遺構・遺物	C14 y.B.P	時代
沖積層（難波累層）	最上部	NG0層		現代盛土	－				近代・現代
		NG1層		現代作土	15～25				
		NG2層		含細礫灰褐～黄褐色シルト質砂	6～24	暗色帯	↓小溝群・畝間　青花・唐津・瀬戸美濃・備前など		近世
		NG3層		含細礫淡黄褐～灰色粘土質シルト	12～20		←地震 ↓小溝群・畝間・島畠　輸入陶磁器・瓦質土器・瓦器（Ⅳ－１～５）	（400）	室町
		NG4A層		暗灰褐色礫質砂～シルト　10～45　含細礫黄灰色中粒砂	8～15		瓦器（Ⅲ－１～Ⅳ－３）		
		NG4B層 i		褐灰色砂質シルト	av.20		瓦器黒色土器陶磁器須恵器土師器　←水田面 ↓小溝群・畝間　瓦器（Ⅱ～Ⅲ）		鎌倉
		ii		含細礫黄灰色中粒砂	av.5				
		iii		灰色砂質シルト	av.15		←水田面 ↓小溝群・畝間　瓦器（Ⅰ～Ⅱ）	（800）	平安
		NG4C層 i		明黄褐色砂質シルト	av.20				
		ii		にぶい黄褐色シルト質砂	av.20		▽掘立柱建物　←水田面　平安Ⅰ～Ⅲ期		
		NG5A層		灰色砂礫、シルト質細粒砂薄層を狭在	10～80		平城宮Ⅴ～		
		NG5B層		青灰色細粒～極細粒砂	2～8		←鍬跡 ←水田面		奈良
		NG6A層 i		暗青灰色砂・粘土質シルト	≦20	タニシ	平城宮Ⅲ	（1300）	
		ii up		暗緑灰色中粒～細粒砂	≦5		←ヒトと偶蹄類の足跡		
		ii lw		粘土質シルト薄層と極細粒砂薄層の互層	av.10		←水田面		飛鳥
		NG6B層 i		含砂・礫黒褐色～暗灰色シルト質粘土	≦15	タニシ	飛鳥Ⅲ～Ⅳ		
		ii		灰色粘土・シルト・細礫質粗粒砂	≦5	←乾痕	←水田面　飛鳥Ⅲ		
		NG7A層 i		含砂灰色粘土	av.10		←水田面		
		ii		含砂黒褐色シルト質粘土	av.15		←水田面 ↓掘立柱建物　飛鳥Ⅰ・TK209	（1400）	
	上部	NG7B層 o		明黄褐色砂礫～暗オリーブ灰色粘土質シルト	≦250		←土手　TK10		古墳後期
		i		黒褐色砂・礫質粘土・黒色シルト	≦35		長原古墳群　埴輪Ⅴ期・TK23･47～MT15	（1600）	古墳中期
		ii		褐色極粗粒砂・粘土質シルト互層	≦170		←水田面　埴輪Ⅱ期　TK216		古墳前期
		iii		暗褐色粘土質シルト	≦5		↓方形周溝墓・竪穴住居　布留式・庄内式・畿内第Ⅴ様式	（1700）	弥生後期
		NG8A層		青灰～黄灰色砂・礫～粘土	≦40		←方形周溝墓・溝	（2000）	
		NG8B層		暗褐色砂質シルト	av.10		畿内第Ⅲ～Ⅳ様式・凸基式石鏃		弥生中期
		NG8C層 i		にぶい黄褐色極粗粒砂～中粒砂	av.25		木葉形石鏃		
		ii		灰色シルト質粘土	av.10		←水田面・溝・ヒトの足跡　←石器製作址・畿内第Ⅱ様式・石斧		
		ii		黄褐色シルト質粘土	≦15	←乾痕	←自然流路の堤		弥生前期
		NG9A層		黒褐色砂・シルト質粘土	3～15		畿内第Ⅰ様式・長原式・石鏃		
		NG9B層 i		灰オリーブ～黒褐色砂礫	≦90				
		ii		暗灰黄色シルト質粘土、植物片多含	10～40		畿内Ⅰ様式・堅杵		
		iii		灰オリーブ色シルト質粘土	3～14		土偶 石棒		
		iv		暗灰オリーブ色シルト質粘土、植物片多含	8～50	アラカシ イヌガヤ	長原式・石斧の柄・弓	（2600）	縄文晩期
		v		灰オリーブ色シルト・砂	10～35		▽石器製作址 ▽土器棺墓 ▽竪穴住居・貯蔵穴		
		NG9C層 i		黒褐～褐灰色含シルト質粘土	2～8	←乾痕	←滋賀里Ⅳ式 凹基式石鏃	（3000）	
		ii		灰色シルト質粘土～砂礫	2～10				縄文後期
		iii up		オリーブ黒～灰色シルト・粗粒砂質粘土	7～25				
		iii lw		暗灰色シルト～粘土質粗粒砂	av. 5	火山灰層準（ＢＢ７？）	縄文		
		NG10層		緑灰～オリーブ灰色礫質砂・シルト	≦80	←地震	北白川上層Ⅱ～Ⅲ式		
		NG11層		灰色シルト質粘土	≦16	←乾痕			
		NG12A層 i		腐植質黒褐色礫質粘土～シルト	≦15		里木Ⅱ式・北白川Ｃ式・石鏃	←4740±140Sl（GaK-14942）	
		ii		オリーブ黒色シルト質砂、礫混り	≦20			←4900±140Sl（GaK-14941）	
		NG12B層 i		暗褐色細粒砂質シルト	av.20		←地震？		
		ii		暗黄灰色シルト～灰色礫混り砂	av.10	（火山灰の２次堆積あり）	←シカ・トリの足跡		縄文中期
		iii		黒灰色シルト～オリーブ黒色シルト質粘土	av.10		船元Ⅱ式		
		iv		黄灰色砂礫～灰色シルト質粘土	≦15		▽土壙　凹基式石鏃	←4900±100Cb（GaK-14941）	
	中部	NG12C層 i		黒褐色～オリーブ黒色シルト～粘土	≦25		▽石器製作址		
				黒褐色～灰色粗粒砂	5～10				
		ii		黒褐色シルト質粘土、植物片多含	av.10				
				灰色中～粗粒砂、礫混り	av.40		甲殻類の巣穴の化石		縄文前期
		iii		オリーブ黒色シルト	≦20				
				灰色砂、一部シルト質	≦30				
				黄灰色ガラス質火山灰	≦5	←横大路火山灰層（Ah）		←6300	
		NG12D層 i		オリーブ黒色極細粒砂質シルト	20～30		←大礫　押型文土器		縄文早期
		ii		灰色礫混り砂、シルト薄層を挟む	≦60		有茎尖頭器・細石刃		縄文草創期
	下部	NG13A層 i		灰色細粒シルト	≦5				
		ii		灰黄～灰白色細粒シルト（火山灰質）	av.7	←乾痕	▽石器製作址　削器・ナイフ形石器・剥片・石核	（15000）	
低位段丘構成層	最上部	NG13B層 i		黄褐～灰黄色シルト質粘土	≦5		剥片・石核		
		ii		黄灰色粗粒シルト質火山灰	≦5	←平安神宮火山灰層（AT）		←25000	
		NG13C層		暗灰黄～暗褐色シルト質粘土	av.12	↓乾痕			後期旧石器
	上部	NG14層 up		灰白～緑灰色シルト質砂～砂質粘土	20～80		剥片		
		lw		灰色砂礫～砂質シルト			▽石器製作址　掻器・ナイフ形石器・細部調整剥片石器		
	下部	NG15層 up		黄灰色～緑灰色粘土～砂礫	150～450				
		lw		シルト・砂礫		ヒメマツハダ ←ナウマンゾウの足跡			
中位段丘構成層	上部	NG16A層		暗灰～灰青色シルト・礫混り砂互層	≦150				
		NG16B層 i		暗褐色泥炭質粘土：沼沢地性層	≦20	←化石林、ナウマンゾウとオオツノジカの足跡化石 ←吾彦火山灰層層準（Ａｓｏ-4）		←87000	
		ii		灰色火山灰質砂質粘土～シルト：河成～沼沢地性層	≦25	←北花田火山灰層層準（ＫＴｚ）		←91000	
		iii		灰色砂礫：河成層	≦260	↓ゾウの足跡状の凹み			中期旧石器
		NG17A層		オリーブ灰色砂質粘土：古土壌	av.10				
		NG17B層 i		オリーブ灰色砂混り粘土質シルト：沼沢地性層	av.20				
		ii		緑灰色粗粒砂質シルト：河成～沼沢地性層	av.10	←ナウマンゾウ臼歯（ラメラ片）			
		iii		緑灰色極粗粒砂～細礫：河成層	av.10				
		NG18層		緑灰色砂質シルト～緑灰色砂礫	av.65				
		NG19層		暗緑灰色砂質粘土～緑灰色砂礫	av.50	←ゾウの足跡状の凹み			
				緑灰色砂混り粘土質シルト 上方細粒化 下部で粗粒砂～砂礫	ca.280				
		NG20層		オリーブ黒色泥炭～泥炭質粘土	ca.100				
		NG21層		暗緑灰色細粒砂質シルト	ca.40				
	中部	NG22層		含貝化石砂～粘土	ca.200			（12万年）	

←：上面検出遺構
↓：下面検出遺構
▽：地層内検出遺構
Cb; 炭　Sl;土壌

RK8A層、NG7B層に相当する。

第８層：暗オリーブ灰色(2.5GY3/1) ～暗緑灰色(10GY3/1)粘土層で、平均層厚は40cmである。第8a～8c層の３層に細分可能である。第8a層は暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)シルト質粘土層で、層厚は10cmであった。第8b層は暗緑灰色(10GY3/1)シルト質粘土層で、層厚は10cmであった。第8c層は黒色(2.5GY2/1)シルト質粘土層で、下面には凹凸が認められた。本層はRK８～９層、NG7B～８層に相当し、第8c層はその標高と岩相から、本調査地の北で行われたNG96－９次調査で確認された弥生時代前期の水田作土層である第8c'層に相当する[大阪市文化財協会1999]。ただし、本調査地では水田畦畔は確認できなかった。本層からは時期不明の弥生土器体部片が出土している。

第９層：黒色(10Y2/1)シルト質粘土層で、平均層厚は10～20cmである。上部は第8c層によって攪拌されている。RK９層、NG８層に相当する。

第10層：オリーブ黒色(7.5Y3/1)シルト質粘土～黒色(7.5Y2/1)粘土質シルト層で、層厚は20～40cmである。調査区の東半では２層に細分され、下部は暗色化している。本層はRK10層、NG9B～9C層に相当する。

第11層：オリーブ黒色(10Y3/1)粗粒砂～礫層で、層厚は80cm以上である。本層はRK11層、NG10・11層に相当する縄文時代の水成層である。NG96－９次調査では、本層に相当する第11層の厚さは500cm以上になることが確認されている。

２)遺構と遺物

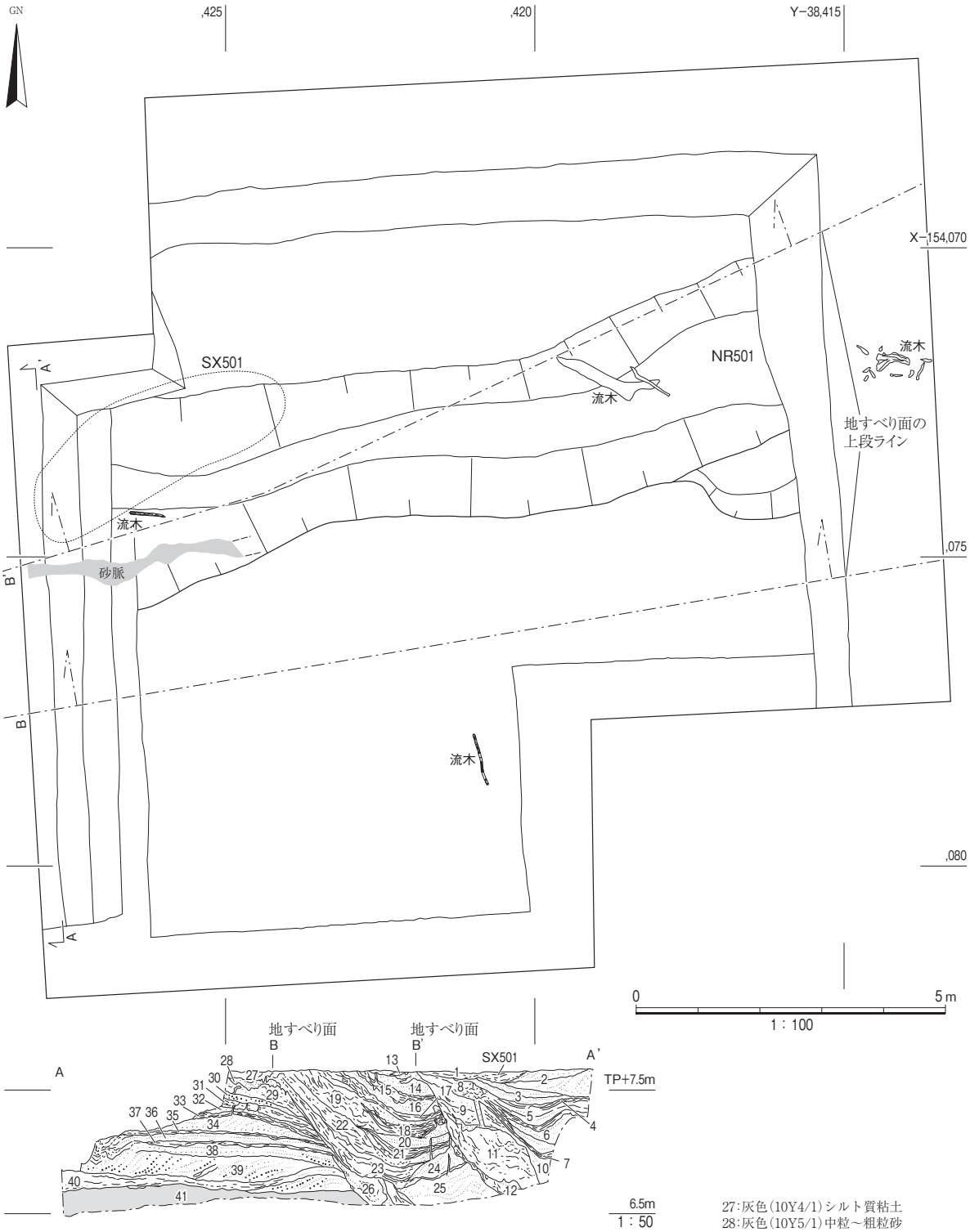
ｉ)古墳時代

第5d層上面で自然流路NR501、第5b層上面で落込みSX501が検出された。

NR501(図８、図版４)　調査区の北半で確認された。幅7.5m以上、深さ1.2m以上で、北東から南西に向って流れている。埋土は第5c層とした水成層であるが、流路の肩部は地震の影響を受けており、確認できなかった。最下部は粒径の粗い砂礫で、下位の第６層を若干削り込んでいる。図８には第６層上面で確認された流路最下部の状況を示している。

最下層からは弥生時代前期～古墳時代中期の土器が多く出土している(図９、図版18)。このほか、木製品や流木が流路内およびこの周辺の第５層内で確認された(図18、図版18)。これらの遺物は、近隣に存在した集落遺構から流れ込んだものであろう。

１～16は弥生土器および庄内式期と考えられる古式土師器である。１～３は甕の体部上半から口縁部である。１・２はいずれも口縁部と体部との境に数条のヘラ描沈線を巡らせ、胎土には砂粒を多量に含んでいる。１の口縁端部外面にはキザミメを施している。２は口縁端部を欠失する。３は口縁部が短く、「く」字状に屈曲する。体部の調整は、外面が磨滅のため不明で、内面はヘラミガキである。４・５は鉢である。４は口縁部および体部上半外面に櫛描簾状文を施し、体部内面にはヘラミガキを施す。５は無文で、内外面をヘラミガキで調整している。６・７は高杯の脚部と思われる。６はゆるやかに外反する脚部の外面にヘラミガキを施す。７は脚部が屈曲して外反し、円形のスカシ孔を４方向に穿つ。８はミニチュアの高杯である。内外面は粗いハケメ調整で、粘土紐の接合痕跡が残る。９は高杯



1：オリーブ黒色(10Y3/1)シルト質粘土(SX501埋土)
2：灰オリーブ色(5Y5.5/2)中粒～細粒砂
3：にぶい黄色(2.5Y6/4)中粒砂
4：オリーブ黒色(10Y3/2)粘土
5：黒色(7.5Y2/1)中粒～粗粒砂
6：灰色(10Y4/1)中粒～粗粒砂
7：オリーブ黒色(10Y3/1)粘土～シルト
8：オリーブ黒色(10Y3/1)シルト～極細粒砂(ラミナが乱れる)
9：オリーブ黒色(10Y3/1)粘土～シルト(ラミナが乱れる)
10：灰色(10Y4/1)中粒～粗粒砂
11：オリーブ黒色(7.5Y3/1)粘土～シルト(ラミナが乱れる)
12：オリーブ黒色(5Y3/1)シルト～極細粒砂(ラミナが乱れる)
13：オリーブ黒色(10Y3/1)粗粒砂
14：暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)中粒砂
15：オリーブ黒色(10Y3/1)シルト～粘土
16：灰色(10Y4/1)中粒～粗粒砂
17：灰色(7.5Y5/1)シルト～極細粒砂
19：オリーブ黒色(10Y3/1)粘土～シルト(ラミナが乱れる)
18：オリーブ黒色(7.5Y3/2)粘土～シルト
20：灰色(10Y4/1)中粒～細粒砂
21：オリーブ黒色(5Y3/1)粘土
22：灰色(10Y4/1)シルト～粘土
23：灰色(10Y4/1)シルト～粘土
24：灰色(5Y6/1)細粒砂
25：オリーブ色(10Y3/1)粗粒砂～礫
26：オリーブ黒色(10Y3/1)粗粒砂
27：灰色(10Y4/1)シルト質粘土
28：灰色(10Y5/1)中粒～粗粒砂
29：オリーブ黒色(10Y3/1)細粒砂質シルト
30：黒色(7.5Y2/1)中粒～粗粒砂
31：オリーブ黒色(10Y3/1)シルト
32：灰色(10Y6/1)極細粒砂
33：オリーブ黒色(10Y3/1)シルト～粘土
34：にぶい黄色(2.5Y6/3)粗粒～中粒砂
35：灰色(10Y4/1)シルト～粘土
36：灰オリーブ色(5Y6/2)中粒砂
37：灰色(10Y4/1)粘土質シルト
38：灰色(7.5Y5.5/1)粗粒砂
39：灰色(7.5Y5/1)粗粒砂～礫
40：灰色(10Y4/1)極細粒砂～シルト
41：オリーブ黒色(7.5Y3/1)シルト質粘土
(第6層)

図8　古墳時代の遺構平面・断面図

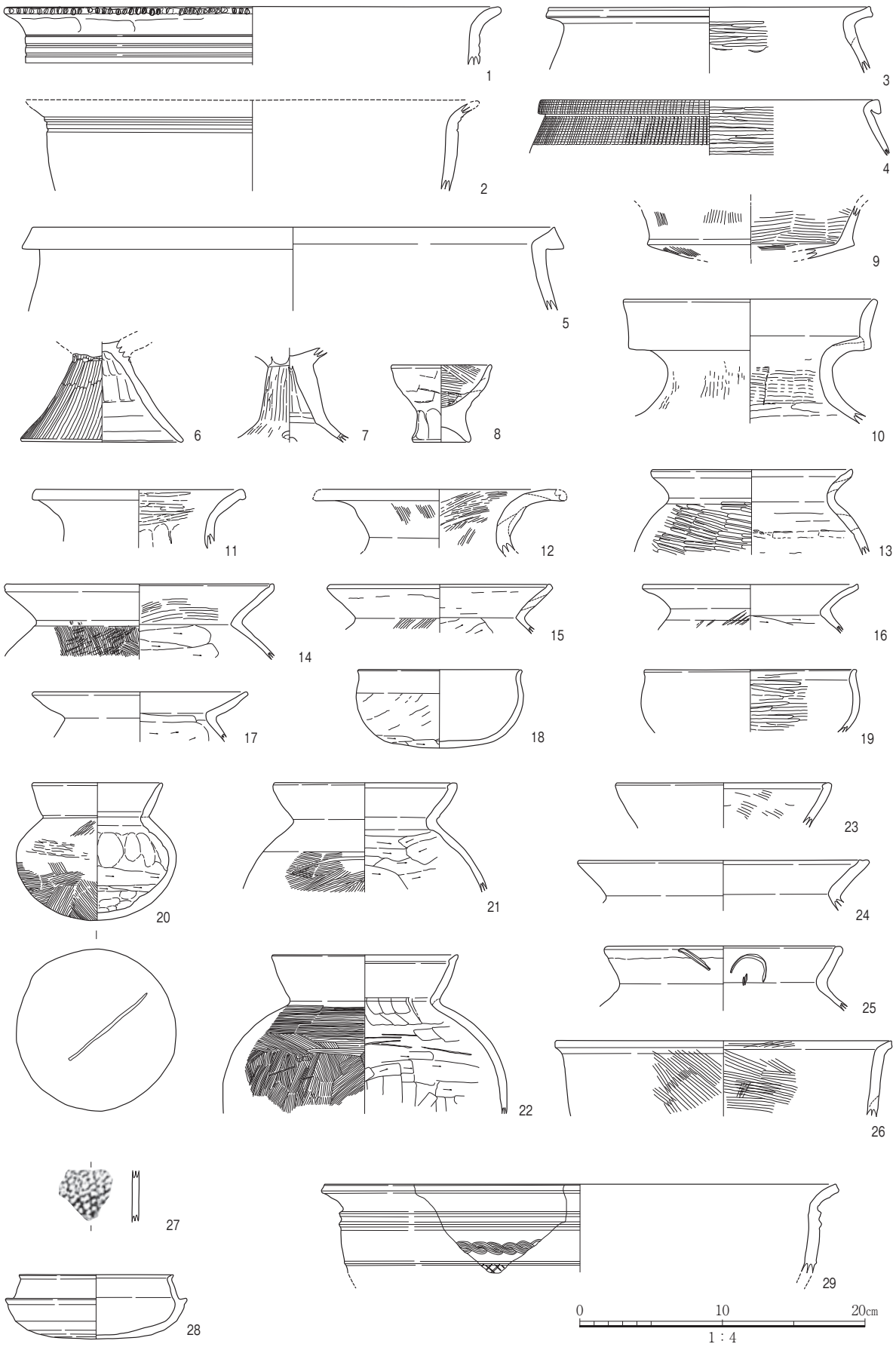


図９　NR501出土遺物

の杯部下半ないしは二重口縁壺の頸部であろう。10は二重口縁壺の頸部から口縁部である。口縁部はやや外反し、小さく開く。11・12は無文の広口壺の口縁部である。12の外面は二次的に被熱し、剥落している。13～17は甕である。13の口縁部は緩やかに外反し、端部を内湾気味に収める。外面には右下がりの粗いタタキメが認められ、胎土には長石・雲母を多く含んでいる。14～16は口縁端部をつまんで明確な面を持たせるものである。体部外面の調整はハケメないしはタタキメののちハケメで、内面はすべてヘラケズリである。口縁部内面にはハケメ調整を施している。これらのうち１・２は弥生時代前期、３～５は弥生時代中期後半、７・８・10～12は弥生時代後期後半、６・９・13～16は弥生時代後期末の庄内式期のものであろう。なお、３～７、11・15は角閃石を多く含むいわゆる生駒西麓産の胎土である。

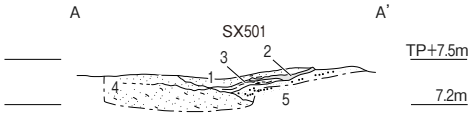
17～26は土師器である。17は甕で、口縁部が「く」字状に屈曲し、端部を緩くつまんでいる。体部外面の調整は磨滅のため不明で、内面はヘラケズリする。18･19は椀である。18は底部をヘラケズリし、胎土に砂粒を多量に含んでいる。19は胎土に砂粒を少量含み、口縁部の内外面はナデで仕上げ、体部の内面は丁寧なヘラミガキを施している。20は小型の壺で、底部外面にはヘラ描きの直線が描かれている。21～25は甕である。21～24はいずれも口縁端部内面を肥厚させるものである。21・22の体部外面の調整はハケメ、内面はヘラケズリ調整である。21の肩部にはヘラ描きの直線が描かれている。25は口縁部が直線的に立ちあがり、端部をつまんで丸く収める。外面にはヘラ描きによって記号状の文様が描かれている。26は甑の口縁部である。以上は、17が古墳時代前期初頭に遡るもので、20～25が古墳時代中期前半、18・19・26が古墳時代中期後半のものであろう。

27は韓式系土器と思われる体部の破片で、格子状のタタキメが認められる。軟質である。28は須恵器杯身である。口縁部の立ち上がりは高く、端部を外反させる。TK23型式であろう。29はTG232型式とみられる初期須恵器で器台の受部である。27～29は古墳時代中期中葉に属する。

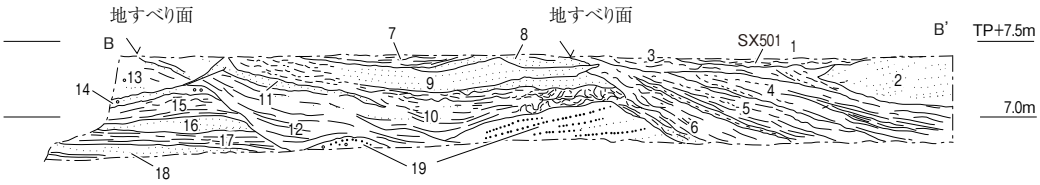
99・100は最下層から出土した木製品である(図18、図版18)。99は弓状の木製品で、一方の端部にキザミメを入れて加工している。もう一方の端部は欠失している。100は羽子板状の木製品で、２箇所に円孔を有する。これらはいずれも二次的に被熱しており、一部が炭化している。樹種は99がヒノキ属、100がモミ属に同定された。

SX501(図10、図版４)　調査区の西北部において第5b層上面で確認された。平面が不整形な溝状を呈し、東西4.3m以上、南北1.5m、深さ0.1mの浅い落込みである。埋土は灰色のシルト質粘土ないしは粘土質の極細粒砂で、一部に炭を多く含む。底面に人為的に掘削した痕跡が認められないことから、本来は、第5b層堆積後に生じた自然の凹みであった可能性がある。本遺構からは、ほぼ完形に復元される古墳時代中期の土師器甕１個体のほか、土師器椀・製塩土器が出土している。なお、付近で確認された古墳時代の遺構では滑石製品を伴う例が多いことから、周辺の土壌を持ち帰り洗浄したが、炭や土器片以外は含まれていなかった。完形の土器が多いことから、別の場所で使用した土器類を炭とともに廃棄したのであろう。

SX501からは30～52が出土した(図11、巻首図版、図版18・19)。30～36は土師器椀である。これらはいずれも口縁部をナデによって屈曲させ、直立気味に仕上げるものである。30・35・36は口縁部



1：灰色（10Y4/1）極細粒砂～シルト質粘土
2：黒色（10Y2/1）炭
3：灰色（10Y4/1）極細粒砂～シルト質粘土
4：オリーブ黒色（10Y3/1）極細粒砂
5：灰色（10Y6/1）粗粒砂～礫



1：灰色（10Y4/1）極細粒砂～シルト質粘土
2：暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）粗粒砂～小礫
3：オリーブ黒色（10Y3/1）シルト質粘土
4：オリーブ黒色（7.5Y2/2）極細粒砂～シルト
5：オリーブ黒色（10Y3/1）シルト質粘土
6：暗オリーブ灰色（2.5GY3/1）粘土質シルト
7：暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）シルト質粘土
8：オリーブ灰色（2.5GY5/1）粗粒砂（噴砂）
9：暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）粗粒砂
10：オリーブ黒色（7.5Y3/1）シルト～粘土
11：オリーブ黒色（10Y3/2）中粒～細粒砂
12：オリーブ黒色（10Y3/1）粘土
12：オリーブ黒色（10Y3/1）粘土
14：灰色（10Y4/1）粗粒砂
15：暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）シルト
16：灰色（10Y5.5/1）中粒砂
17：オリーブ黒色（10Y3/1）粘土
18：暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）中粒～細粒砂
19：オリーブ灰色（2.5GY6/1）粗粒砂～小礫

図10　SX501平面・断面図

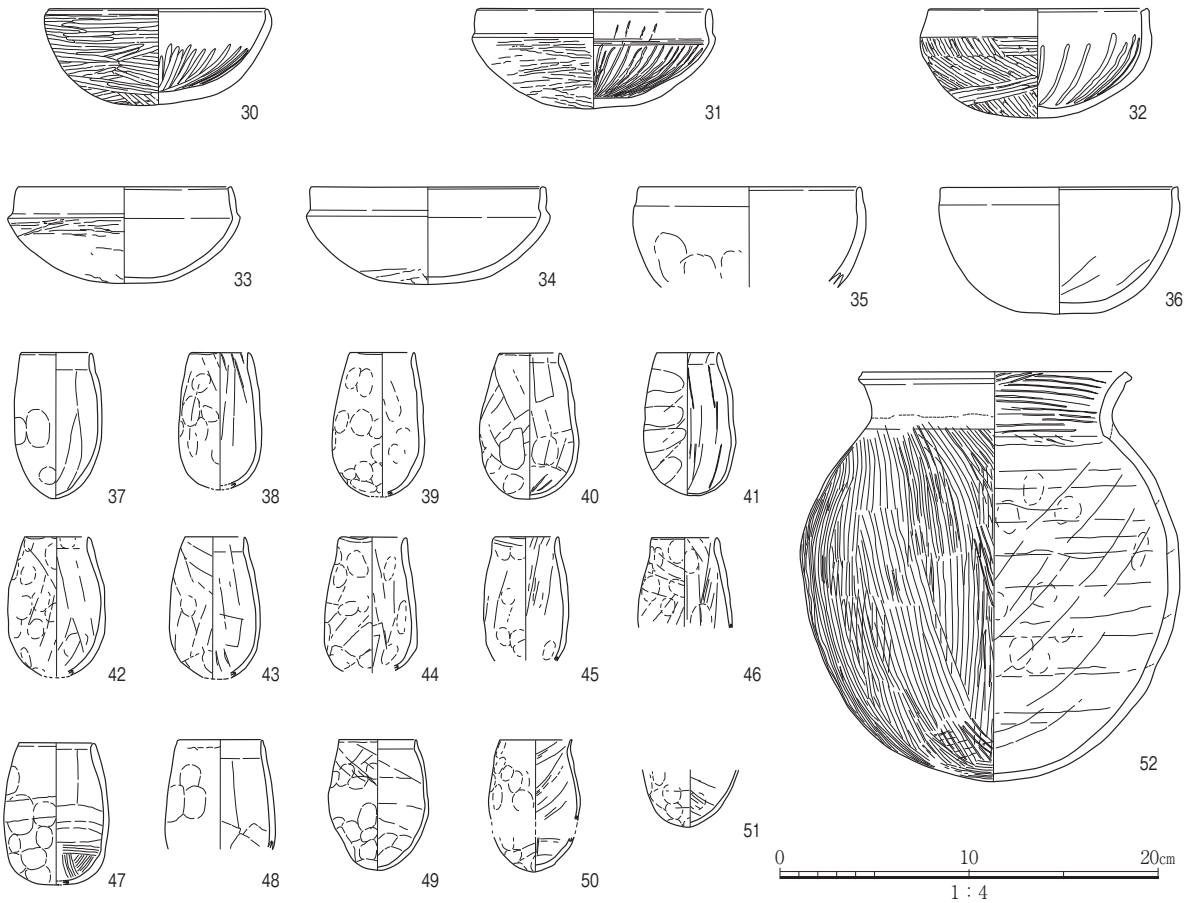
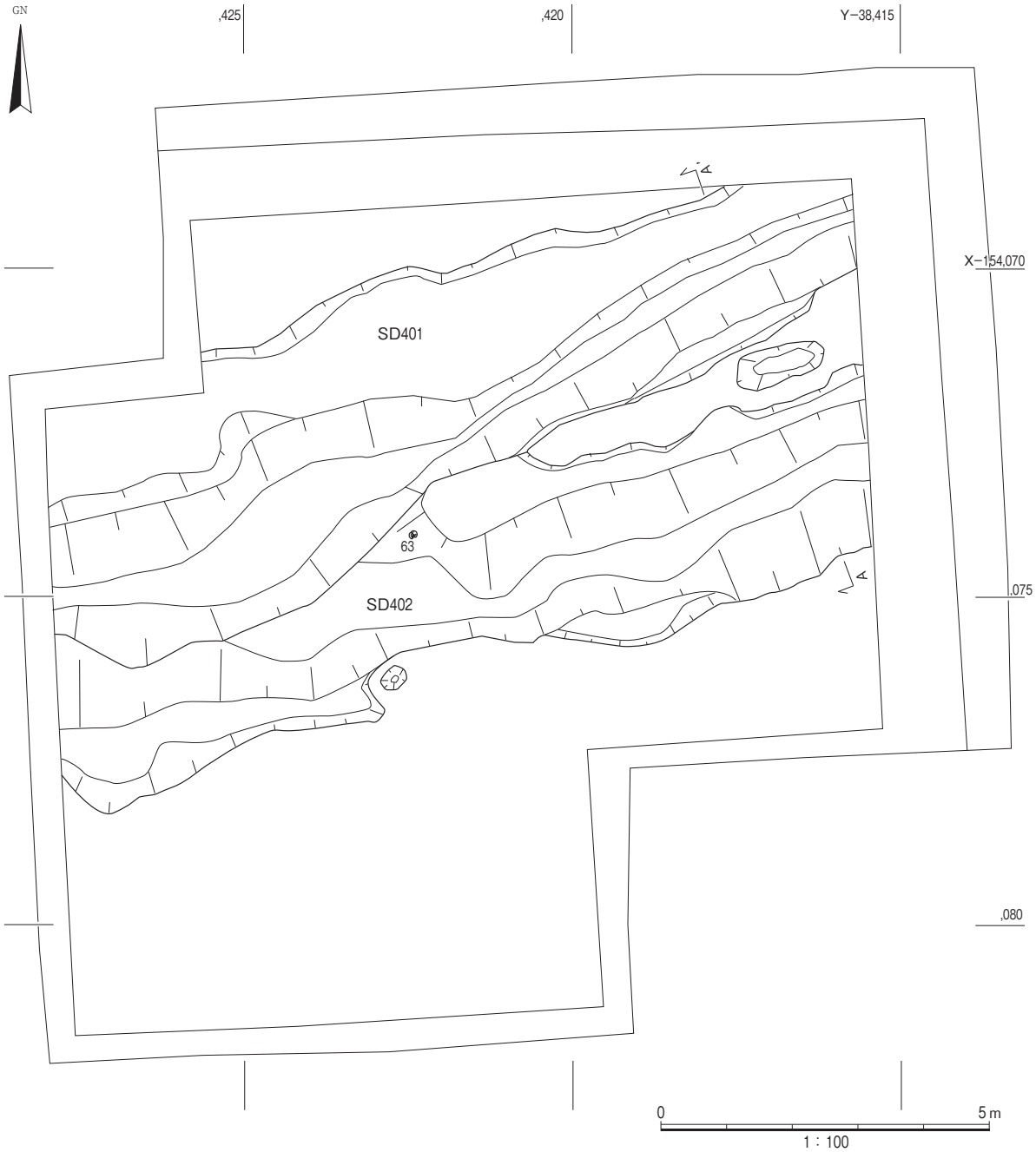


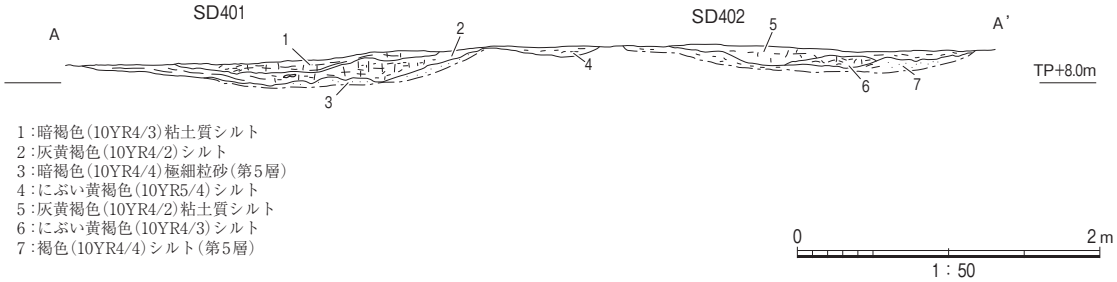
図11　SX501出土遺物

の屈曲が弱く立上がりが短いものである。これ以外は、体部と口縁部の境の稜線が明瞭で、口縁部が長いものである。30～32は体部外面に丁寧なヘラミガキを施し、内面に粗い放射状暗文を施している。30の外面のヘラミガキは口縁部にもおよぶ。33～36は、内面に暗文が認められないものである。このうち、33は外面の多くが被熱のため剥落しているが、上部にはヘラミガキが認められる。35・36は深い椀形を呈し、外面には煤が付着する。

37～51は製塩土器である。これらは色調と胎土から、橙～黄橙色を呈し、胎土に砂粒を比較的多く含む37～48と、灰～灰白色を呈し、精良な胎土をもつ49～51の２種に大別される。37～48はいずれも縦長で下膨れの体部をもち、口縁部は細くすぼまっている。口径は3.5cm前後と小ぶりな37～46と、４cmを超えるやや大ぶりな47・48とがある。いずれも口縁端部は軽く外方に開き、多くは内面に稜線をもつ。調整は内面が板ナデにより、外面はユビオサエで仕上げている。なお、40の外面には粘土を貼り足した痕跡が確認される。なお、これらはいずれも口縁部内面や体部外面の一部が白く変色している。49～51は前者よりも体部の最大径が上方にあり、器壁が薄い。49・50の口縁部の外反は明瞭である。体部の内面はユビオサエおよびナデによって仕上げられている。体部外面はナデによって仕上げるが、ユビオサエの痕が顕著に残る。51は底部のみが残存しており、外面は黒く変色している。

52は土師器甕である。口縁部は緩やかに外反し、端部は外方につまんで面を取っている。体部はやや長胴気味の球形である。体部の外面および口縁部の内面は粗いハケメで調整している。体部の内面





1：暗褐色（10YR4/3）粘土質シルト
2：灰黄褐色（10YR4/2）シルト
3：暗褐色（10YR4/4）極細粒砂（第5層）
4：にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト
5：灰黄褐色（10YR4/2）粘土質シルト
6：にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト
7：褐色（10YR4/4）シルト（第5層）

図12　飛鳥時代の遺構平面・断面図

はユビオサエおよび板ナデによって調整しており、粘土紐接合痕跡が明瞭に残る。外面には煤が付着する。

以上、SX501出土土器は、須恵器出現後の古墳時代中期後葉に位置づけられよう。

なお、SX501の直下では地震による地層のずれや砂脈が観察されている(図８・10、図版４)。地層のずれは、断面の観察では２箇所で南から北に向って、垂直方向で数十cmにわたって滑り落ちる状況で認められた。一方、砂脈は第５層下部の粗粒砂が第５層の上部まで貫入したものである。また、SX501出土遺物を断面で見ると、ずれの生じた断面の堆積状況に類似した状況で分布していた。このため、SX501自体が地震の影響を受けており、本来の位置をとどめていない可能性がある。

ⅱ)飛鳥時代

第4c層下面では、調査区の北半で北東～南西方向の溝SD401・402を検出した(図12、図版５)。両者は西で繋がっている。SD401は幅2.3～4.0m、深さは0.2～0.4mで、南側が一段深くなっている。SD402は幅2.5～3.0m、深さは0.2mであった。いずれの溝も埋土は第4c層の暗褐～灰黄褐色の粘土質シルトで、底は北東から南西に向って低くなる。水の流れた痕跡は確認されなかった。これらは人為的に掘削されたものとみられ、調査区の北で行われたNG96－９次調査[大阪市文化財協会1999]などで確認されている飛鳥時代の集落に関連するものであろう。

SD401・402からは土師器・須恵器が多数出土している。53～58はSD401、59～64はSD402からそれぞれ出土した(図13、図版18)。53～55は土師器杯である。53の外面にはヘラミガキを施し、内面には放射状暗文が認められる。54・55は口縁端部を外方へ軽くつまんでおり、いずれも内面の調整は磨滅のため不明である。56は土師器甕である。57は須恵器杯蓋で、宝珠形のつまみをもつものであろう。58は須恵器杯身である。59・60は土師器杯である。61は土師器皿で高台を有する。62・63は須恵器杯蓋である。62は器壁が薄く、返りの端部は下方へ突出する。64は須恵器甕の口縁部である。これらの出土遺物は飛鳥Ⅲ～Ⅳに属し、７世紀後半～末のものであろう。

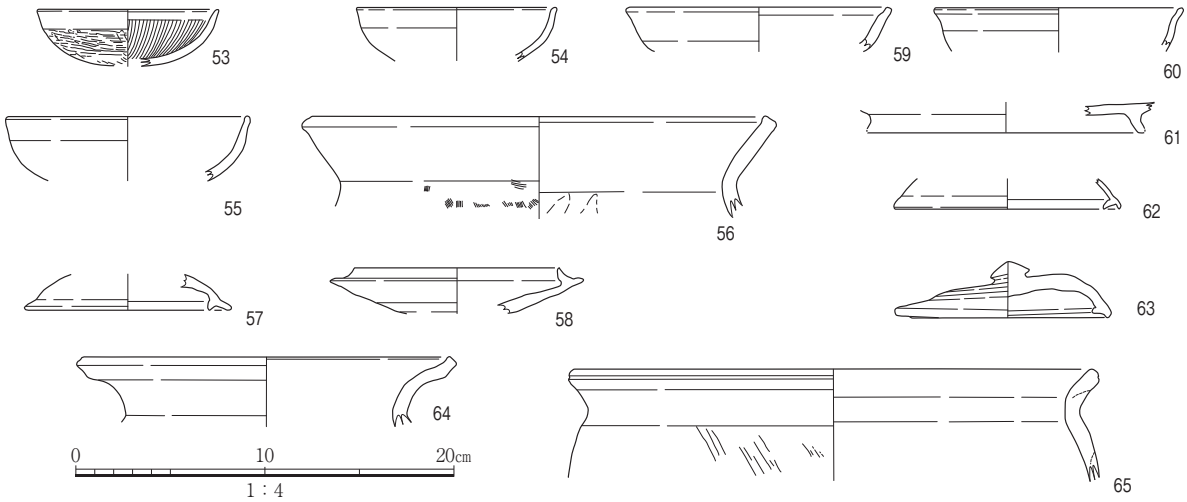


図13　飛鳥～平安時代の遺構出土遺物
SD401(53～58)、SD402(59～64)、SD403(65)

ⅲ)平安時代

第4b層下面では調査区の南半で、ほぼ正東西方向の溝SD403・404が検出されたほか、第4a層下面では調査区の北半で、西で北へ振れる東西方向の溝、および南北方向の溝群を確認した(図14)。SD403・404はいずれも幅0.2m、深さ0.1mの浅い溝で、埋土は暗褐色の粘土質シルトであった。SD403からは土師器甕が出土している(図13)。65は口径30cm以上の甕で、口縁部は短く外反し、粘土紐の接合痕跡が認められる。体部外面の調整はハケである。9～10世紀のものであろう。このほかに、

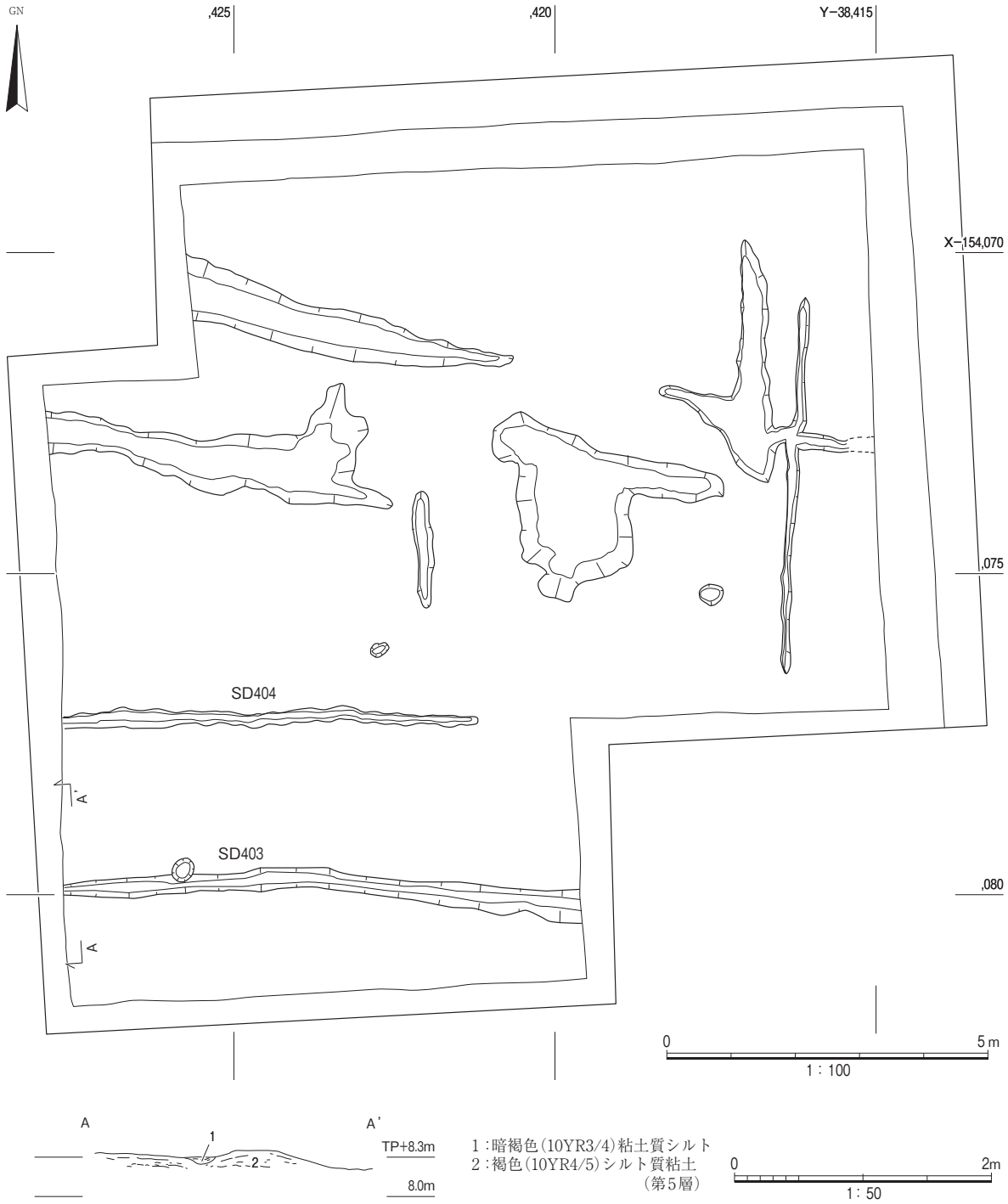


図14　平安時代の遺構平面・断面図

顕著な遺構は認められなかった。ただし、平安時代後半の遺物は比較的出土量が多く、北隣で行われたNG96－９次調査では当該期の集落が確認されていること[大阪市文化財協会1999]から、居住地が近くに存在することを示す資料と考えられる。

iv)鎌倉～室町時代

第3a層下面では、東西方向の溝状の浅い落込みSX301が検出された(図15)。このほか、SX301の北で、耕作に伴うとみられる溝群が確認された。SX301は西で北へ振れる東西方向の溝状の落込みで、幅6.5～7.5m、深さ0.2mを測る。埋土は上層が灰オリーブ色中粒砂の水成層で、下層が灰色シルトで

図15　鎌倉～室町時代の遺構平面図

あった。耕作に伴う遺構の可能性がある。この北では東西方向の溝を数条確認した。これらはいずれも幅0.2～0.3m、深さ0.1m程度で、耕作に係わる溝の可能性が高い。この段階の地形は北で高く、南で低くなっている。

ｖ)江戸時代

第2a層下面で南北方向の溝SD201が検出された(図16)。SD201は幅1.4m、深さ0.1mで、中央部分が一段深く掘削されている。方位は北で西へ振れる。なお、第2a層下面よりも上位では、東が高く西で0.1m低い段差をもった地形となっている。

図16　江戸時代の遺構平面図

３）各層出土の遺物

今回の調査では、各層より弥生時代～近世の遺物が出土している。以下でこれらの出土遺物について述べる（図17・18、図版18）。

66～71・101・102は第5a層より出土した。66は弥生時代後期末、庄内式期の甕である。体部外面はタタキののちハケを施している。67は土師器甕である。口縁部は外反する。68～71は須恵器である。68～70は杯身で、68・69は底部をヘラケズリ調整する。70の底部はヘラ切り後不調整で、「×」のヘラ記号が認められる。71は甕の口縁部である。これらの須恵器はTK209型式に属し、古墳時代後期末のものである。70はなかでも最も新しいものであろう。

101・102は第5a層から出土した木製品である（図18、図版18）。101は舟形木製品と思われるが、加工が両端部に施されるのみであり、中央での断面は長方形を呈する。樹種はコウヤマキと同定された。102は１箇所に方形の孔が開けられるほか、厚い方の長辺に加工痕が認められる。何かの部材とみられる。樹種はヒノキ属の可能性があると同定された。

72～89は第4b層から出土した。72～79は土師器である。72は杯で、内面の色調は黒色である。口縁部は内湾して端部を肥厚させる。73～75は皿である。73の内面には放射状暗文が認められ、口縁端部を内側へ屈曲させている。76は椀である。口縁部をナデによって内側へ屈曲させ、体部下半はユビオサエのみによって仕上げている。77は高杯である。杯部は段をもつ形態で、この部分で欠損している。杯部内面にはヘラミガキの痕跡が残るが、暗文は確認できない。脚部内面にはシボリメが認められる。78・79は甕である。いずれも口縁部を外反させ、端部を外方につまんで仕上げるものである。これらのうち72・77は飛鳥時代、73～75・78・79は奈良時代、76は平安時代Ⅱ期古段階に属し、９世紀ごろのものであろう。80は円筒埴輪である。タガは断面がM字形で低く、外面の調整はタテハケのみで、内面の調整はユビオサエとナデである。窖窯による酸化炎焼成である。川西編年Ⅴ期に属する［川西宏幸1978］。81～86は須恵器である。81・82は杯である。83は円面硯で、方形のスカシ孔を３方向に穿つ。84・85はそれぞれ壺の底部と口縁部で、いずれも灰白色を呈し、焼成があまい。同一個体の可能性がある。86は甕の口縁部である。これらの須恵器は81・86が飛鳥時代、ほかは奈良時代のものであろう。87は内黒の黒色土器椀である。底部内面には密なヘラミガキを施す。平安時代Ⅱ期に属し、10世紀前半のものであろう。88・89は平瓦である。88は酸化焔焼成で、内面には布目圧痕、外面には平行の粗いタタキメが認められる。89は還元焔焼成で、内面に布目圧痕が見られる。外面の調整は磨滅のため不明である。

90～93は第4a層から出土した。90は瓦器椀で、内面に斜格子状のヘラミガキを施す。高台は断面三角形である。瓦器編年のⅡ－１期に属し、12世紀前葉のものであろう［尾上実ほか1995］。91～93は土師器皿である。91は口縁端部を丸く収めるものである。92・93はいわゆる「て」の字状口縁を有するもので、器壁が厚く、口縁端部は丸みを帯びており、屈曲があまい。これらは平安時代Ⅳ期で、11世紀末～12世紀前半のものであろう。

94～98は第4a ～3b層から出土した。94・95は土師器皿である。94は口縁部をわずかに屈曲させる

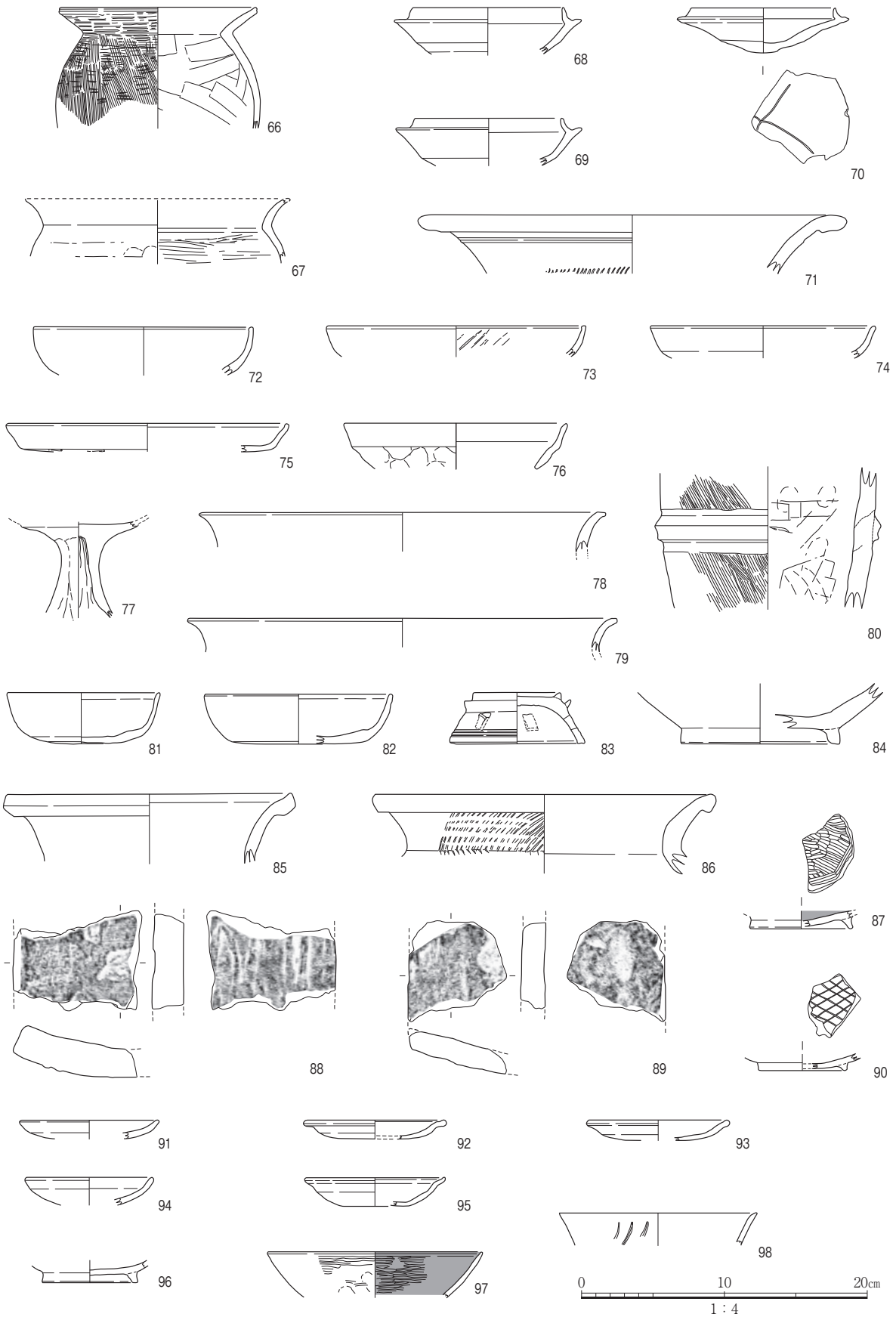


図17　各層出土の遺物

第5a層(66～71)、第4b層(72～89)、第4a層(90～93)、第4a ～3b層(94～98)

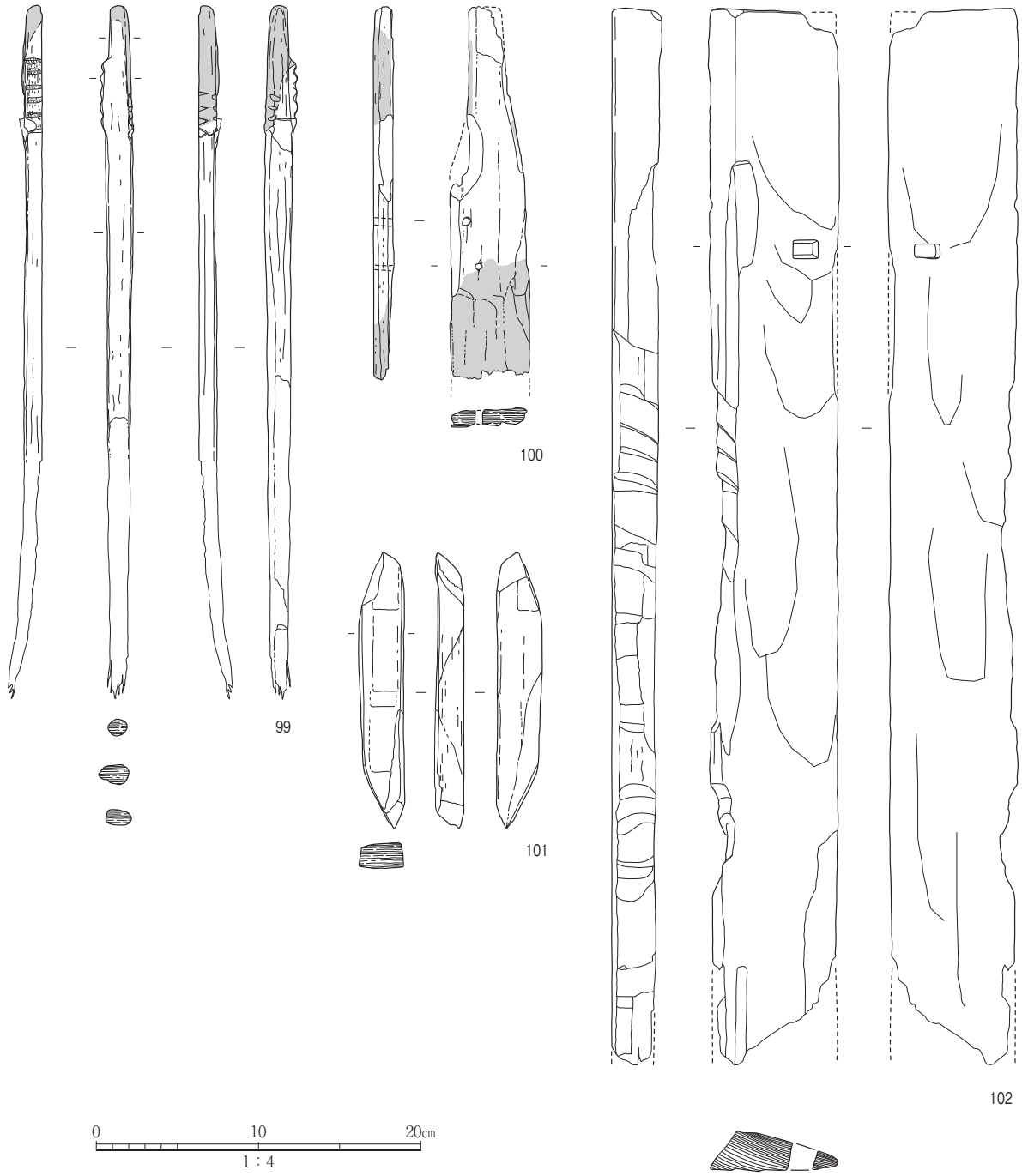


図18　木製品

NR501(99・100)、第5a層(101・102)

形態をもつ。95はいわゆる「て」の字状口縁で、器高は2.0cmを測る。96は土師器椀の底部で、底径が6.9cmを測る。胎土には砂粒を多く含んでいる。これらは平安時代Ⅳ期中～新段階で、12世紀前半～中葉に属するものであろう。97は内黒の黒色土器椀である。口縁端部内面には１条の沈線が巡る。内面のヘラミガキは密で、外面では口縁部の周辺に横方向のヘラミガキを施す。平安時代Ⅲ期に属し、11世紀のものであろう。98は白磁碗である。口縁部が外反し、体部外面には櫛目文が見られる。横田賢二郎・森田勉氏による分類のⅤ類に属し、12世紀後半のものであろう[横田・森田1978]。

４）小結

今回の調査では、古墳時代の自然流路・落込み、地震痕跡のほか、飛鳥時代の集落に伴う溝、中～近世の耕作に関わる溝などの成果が得られた。出土遺物は弥生～古墳時代および飛鳥時代を中心に比較的多い。

古墳時代以前は自然流路や厚い水成層が示すように調査地は不安定な環境であったと考えられる。その中においてSX501から出土した古墳時代中期後葉とみられる土師器甕・椀および製塩土器の良好な一括資料は長原遺跡の古墳時代中期における土師器の共伴関係を検討するうえで貴重な資料といえよう。

また、平安時代以降は各時期において耕作溝が検出されていることから、調査地周辺は耕作域として利用されていたと考えられる。

（小田木）

第２節　NG08－３次調査

１)層序

現地表下約4.5m（TP+6.0m)までの地層を観察した。観察した地層は沖積層(難波累層)および低位段丘構成層に相当する。以下に各層の層相やその特徴を記す(図19・表７・図版６)。

第０層：現代盛土層および攪乱層で、層厚は70～180㎝である。RK０層、NG０層に対比される。

第１層：黒褐色(2.5Y3/1) シルト質細粒砂からなる現代の作土層で、層厚は10～25㎝である。RK１層、NG１層に対比される。

第２層：暗オリーブ灰色(2.5GY4/1) 粗粒砂質シルトからなる作土層で、層厚は約10㎝である。RK２層、NG２層に対比される。

第３層：第3a・3b層に区分される。第3a層は灰色(10Y5/1)ないし緑灰色(10G5/1)細粒砂～細礫からなる河川の氾濫堆積層で、層厚は最大40㎝、平均約10㎝である。第3b層は上部が青灰色(5B6/1)シルト質細粒砂からなり、下部が緑灰色(10GY5/1)シルト質粗粒砂～粗粒砂質シルトからなる作土層で、層厚は10～30㎝である。RK３層、NG３層に対比される。

第４層：第4a～4e層に区分される。第4a層はオリーブ灰色(2.5GY6/1)ないし緑灰色(10GY5/1)細粒～粗粒砂からなる河川の氾濫堆積層で、層厚は10㎝以下である。RK4A層、NG4A層に対比される。第4b層は上部がオリーブ灰色(2.5GY5/1)シルト、下部が暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)粘土質シルトからなる作土層で、上・下部を合わせた層厚は20～50㎝である。上面にて畦畔が検出され、本層からは土師器・瓦器片が出土した。RK4B層、NG4B層に対比される。第4c層は暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)ないし灰色(10Y4/1)細粒砂からなる河川の氾濫堆積層で、層厚は10㎝以下である。本層から土師器・瓦器片が出土した。RK4B層、NG4B層に対比される。第4d層はオリーブ灰色(2.5GY5/1)粘土質シルトからなる作土層で、層厚は10～30㎝である。上面にて畦畔が検出された。RK4B層、NG4B層に対比される。第4e層は暗オリーブ灰色(5GY4/1)粘土質シルトからなり、やや暗色化する。層厚は10～30㎝である。RK4C層、NG4C層に対比される。

第５層：上部は暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)粘土質シルト、下部は灰色(10Y4/1)ないしオリーブ黒色(10Y3/1)細粒砂～細礫からなる河成層である。本層の多くは重機による掘削を行ったため、十分観察できなかった箇所もあるが、層厚は上部が30～80㎝で、下部は20㎝を確認した。第５層下部は下位層を侵食し、第７層の偽礫を含む。NR601・602の埋土である。弥生土器・土師器・須恵器片を含む。東隣のNG07－１次調査地で確認されている流路NR1101の氾濫堆積層に相当すると考えられる。RK4C～５層、NG4C～6A層に対比される。

第６層：灰色(10Y4/1)ないしオリーブ黒色(10Y3/1)粘土質シルトからなる水成層である。層厚は20㎝以下である。遺物は出土しなかった。RK５～６層、NG7A層に対比されよう。

第７層：黒色(7.5Y2/1)ないしオリーブ黒色(7.5Y2/2)粘土質シルトからなる。上面には畦畔が検出され、層中からは建物跡・土壙などの遺構が検出されたことから、上部は作土層であり、下部はい

表７　NG08－３次調査層序表

層序		主たる岩相	層厚(cm)	地層の特徴	遺構	おもな遺物	RK層序	NG層序	時代
第０層		現代整地層	70～180				0	0	現代
第１層		黒褐色（2.5Y3/1）シルト質細粒砂	10～25	作土層			1	1	
第２層		暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）粗粒砂質シルト	10	作土層			2	2	江戸
第３層	a	灰色(10Y5/1)ないし緑灰色(10G5/1)細粒砂～細礫	10～40	水成層			3	3	室町
	b	上部：青灰色（5B6/1）シルト質細粒砂 下部：緑灰色（10GY5/1）シルト質粗粒砂～粗粒砂質シルト	10～30	作土層	▽SX301・SK301		3	3	
第４層	a	オリーブ灰色（2.5G6/1）ないし緑灰色（10GY5/1）細粒～粗粒砂	≦10	水成層	←SR401		4A	4A	鎌倉
	b	上部：オリーブ灰色（2.5G5/1）シルト 下部：暗オリーブ灰色（2.5G4/1）粘土質シルト	20～50	作土層		土師器・瓦器	4B	4B	
	c	暗オリーブ灰色(2.5G4/1)ないし灰色(10Y4/1)細粒砂	≦10	水成層	←畦畔	土師器・瓦器	4B	4B	
	d	オリーブ灰色（2.5GY5/1）粘土質シルト	10～30	作土層			4B	4B	
	e	暗オリーブ灰色（5GY4/1）粘土質シルト	10～30	やや暗色化			4C	4C	平安
第５層		上部：暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）粘土質シルト 下部：灰色（10Y4/1）ないしオリーブ黒色（10Y3/1）細粒砂～細礫	30～80 ＞20	水成層	←NR601・SD601	土師器・須恵器	4C～5	4C～6A	奈良
第６層		灰色(10Y4/1)ないしオリーブ黒(10Y3/1)粘土質シルト	≦20	水成層	←SR701～704		5～6	7A	飛鳥
第７層		黒色（7.5Y2/1）ないしオリーブ黒色（7.5Y2/2）粘土質シルト	10～30	上部：作土層 下部：古土壌	▽SB701・SD701・SK701・SP701	弥生土器・土師器・須恵器	6B～7A 7A～9B	6B～7A 7B～8B	古墳 弥生
第８層	a	暗オリーブ灰色（5GY3/1）ないし灰色（10Y4/1）粘土質シルト	20～30	水成層 水平断層			10A	9A	
	b	暗緑灰色（10GY3/1）ないしオリーブ黒色（10Y3/2）粘土質シルト～シルト	50～60	水成層 水平断層			10A～11	9A～11	縄文
第９層		黒褐色（7.5YR3/1）ないしオリーブ黒色（5Y3/1）粘土質シルト～シルト質砂	5～10	暗色帯	↓SX901	石匙	12～13	12～13	
第10層		黄褐色粗粒砂質シルト	＞30	段丘構成層			13	13	旧石器

凡例　←上面検出遺構　↓下面検出遺構　▽地層内検出遺構

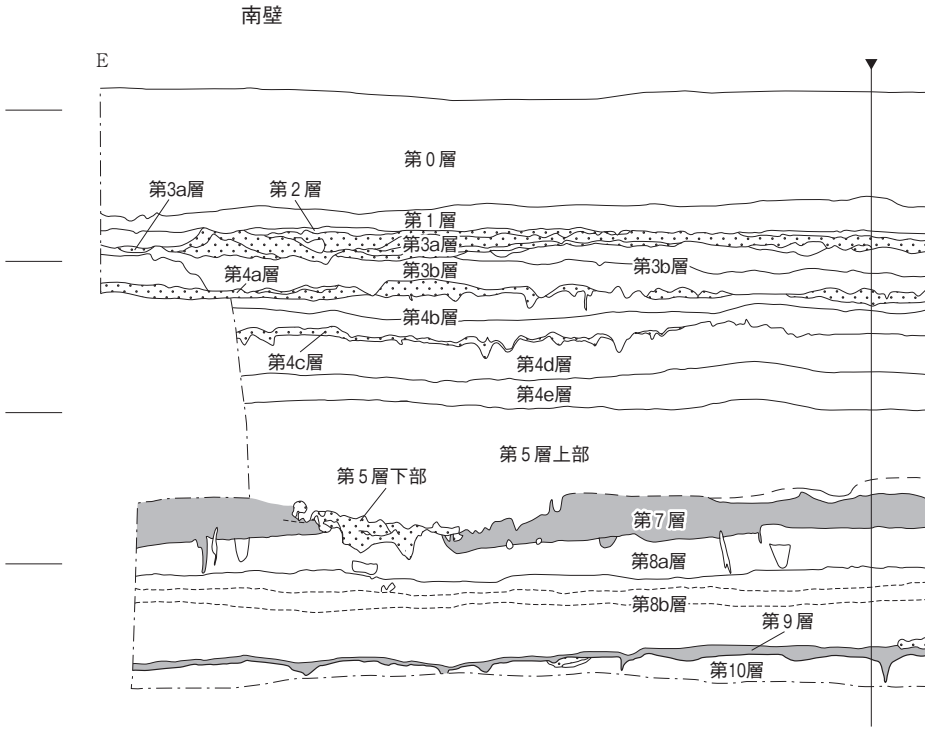
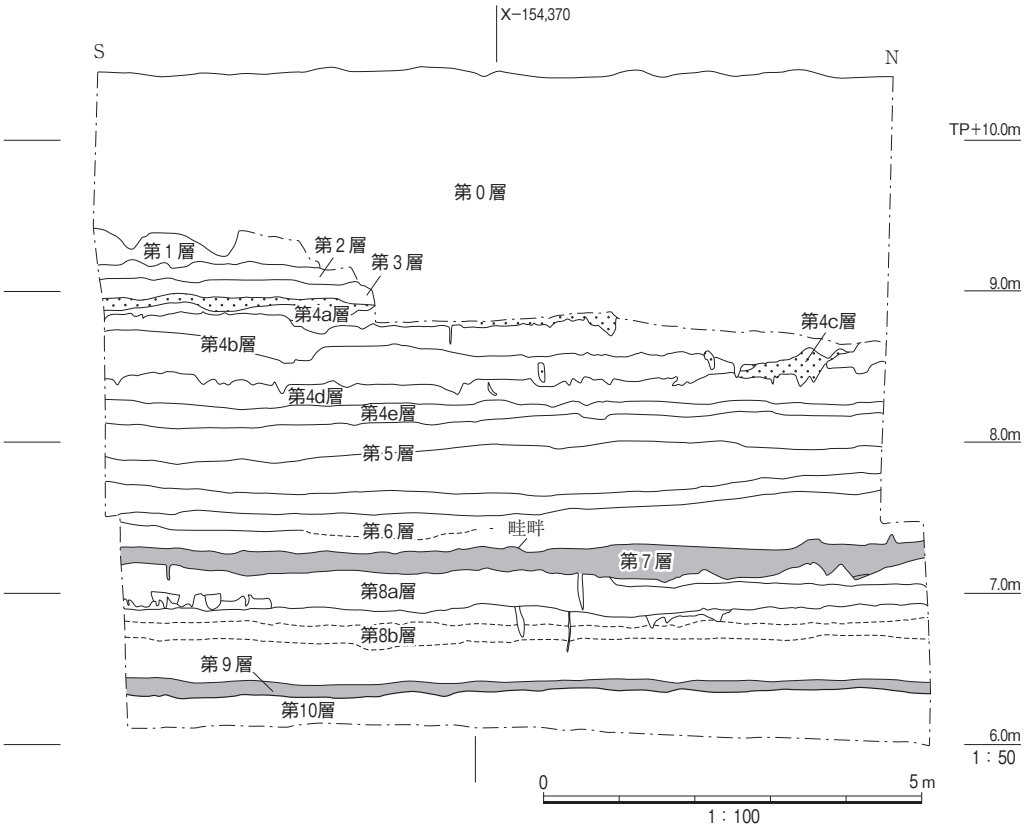
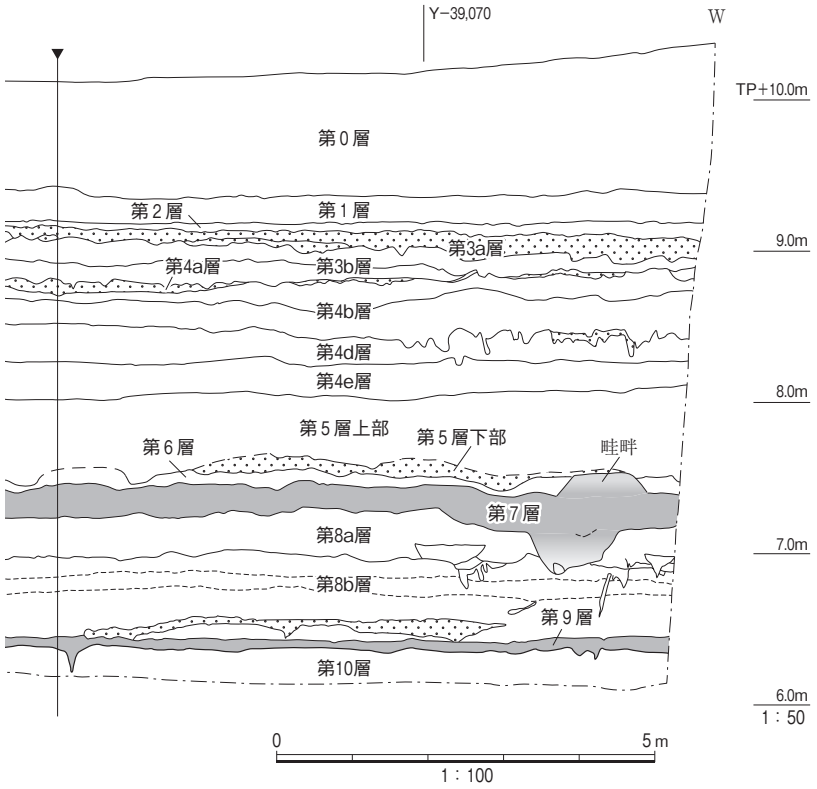


図19　地層断面図

西壁


X−154,370
S
N
TP+10.0m
第0層
第1層
第2層
第3層
9.0m
第4a層
第4c層
第4b層
第4d層
第4e層
8.0m
第5層
第6層
畦畔
第7層
7.0m
第8a層
第8b層
第9層
第10層
6.0m
1：50
0
5m
1：100


Y−39,070
W
TP+10.0m
第0層
第2層
第1層
9.0m
第3a層
第4a層
第3b層
第4b層
第4d層
第4e層
8.0m
第5層上部
第5層下部
第6層
畦畔
第7層
第8a層
7.0m
第8b層
第9層
第10層
6.0m
1：50
0
5m
1：100

わゆる遺物包含層と考えられるが、区分はできなかった。層厚は10～30cmである。本層からは弥生土器・土師器・須恵器が出土した。上部は周辺の調査成果からRK6B ～7A層、NG6B ～7A層に、下部はRK7A ～9B層、NG7B層～NG8B層に対比される。

第８層：第8a・8b層に区分した。第8a層は暗オリーブ灰色(5GY3/1)ないし灰色(10Y4/1)粘土質シルトからなる水成層で、層厚は20～30cmである。層中には地震による水平断層が見られた。遺物は出土しなかった。第8b層は暗緑灰色(10GY3/1)ないしオリーブ黒色(10Y3/2)粘土質シルト～シルトからなる水成層で、層厚は50～60cmである。下部には層厚15cm以下の砂層が挟在する。中部付近には酸化鉄集積帯(図19の破線で挟まれた部分)があり、この酸化鉄集積帯には水平断層が認められ、連続して追いかけられた。遺物は出土しなかった。RK10A ～11層、NG9A ～11層に対比しうる。

第９層：黒褐色(7.5YR3/1)ないしオリーブ黒色(5Y3/1)粘土質シルト～シルト質砂からなる暗色帯構成層で、層厚５～10cmである。縄文時代の縦型石匙が出土した。RK12～13層、NG12～13層に対比される。

第10層：黄褐色粗粒砂質シルトからなる低位段丘構成層(地山層)で、層厚は30cm以上である。RK13層以下、NG13層以下に対比される。

(平田)

２)遺構と遺物

ⅰ)縄文時代以前の遺構と遺物(図20・21、図版６)

第10層において旧石器時代遺物の検出作業を行ったが検出されなかった。

第９層内で、西部にてSX901を検出した。

SX901　最大長3.5m、深さ0.05mの不整形な窪みで、第９層を埋土とする。平面形からは木根痕と推定される。サヌカイト製チップが１点出土した。

第９層からはサヌカイト製の石匙103が出土した。最大長6.5cm、最大幅3.5cm、最大厚1.1cmの縦型石匙である。把手および刃部に細部調整剥離を施しているが、主要剥離面や裏面に素材剥片の剥離面が、裏面には礫面が残る。形態や細部調整の範囲、出土層位の年代観などからみて、縄文時代前期に属するものであろう。

ⅱ)弥生～古墳時代の遺構と遺物(図22～33、原色図版、図版７・８、20・21)

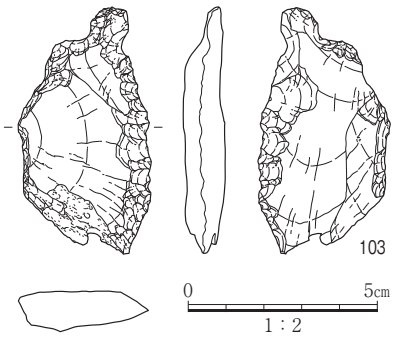


図20　第９層出土遺物

厚い水成層である第８層堆積後の第７層段階の遺構である。竪穴建物SB701、溝SD701～705、土壙SK701～704をはじめ、小穴SP701～721などの弥生時代中期後葉～後期中葉にかけての遺構を検出した。

検出作業は第７層上面から順次行ったが、遺構には第７層を少し下げた時点で輪郭が確認できたものから、第７層除去後に初めて輪郭が確認できたもの、また、地震による水平ずれのため、第８層の上部まで下げた段階で検出できたものなど検出面はさまざ

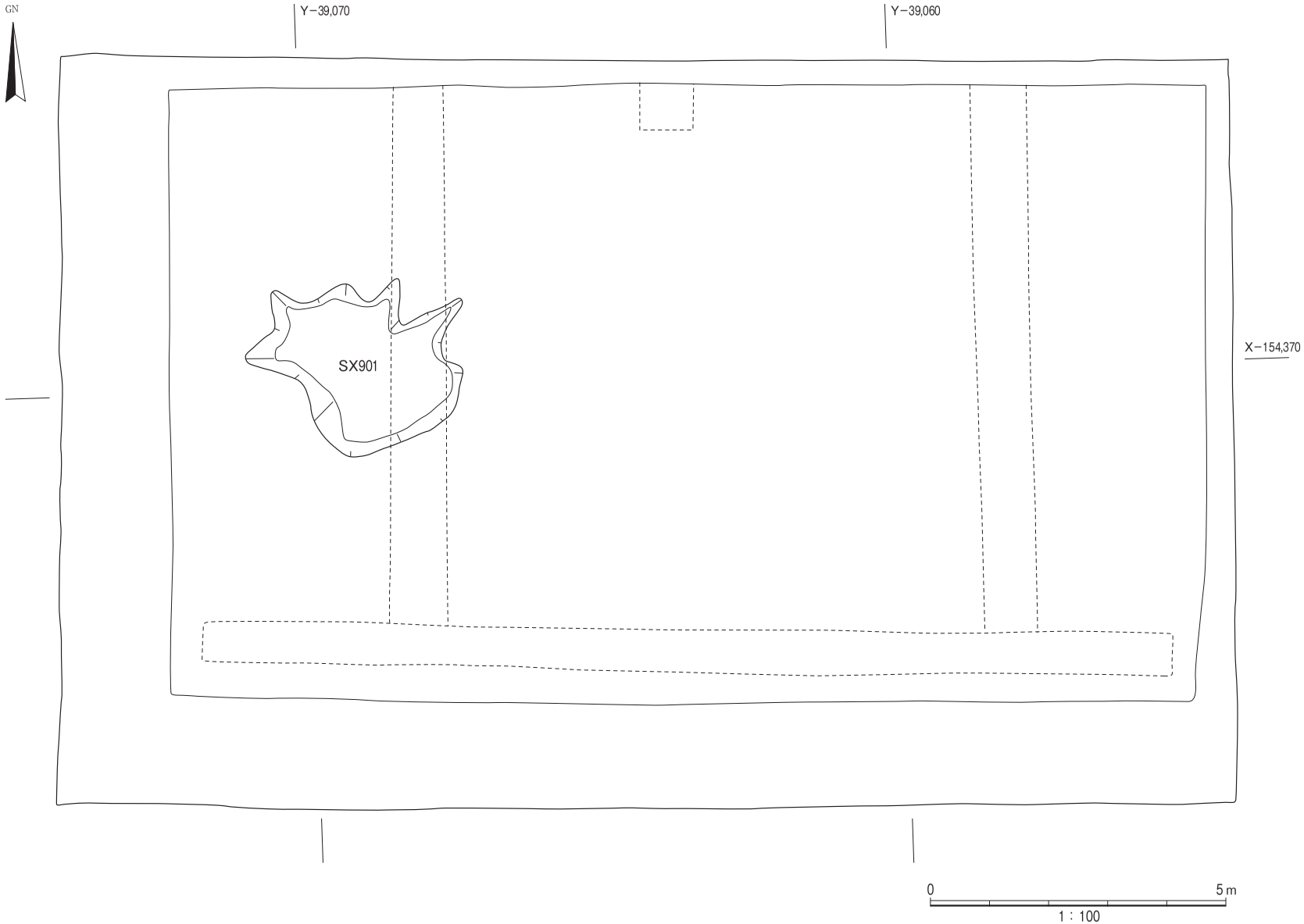


図21　縄文時代の遺構平面図

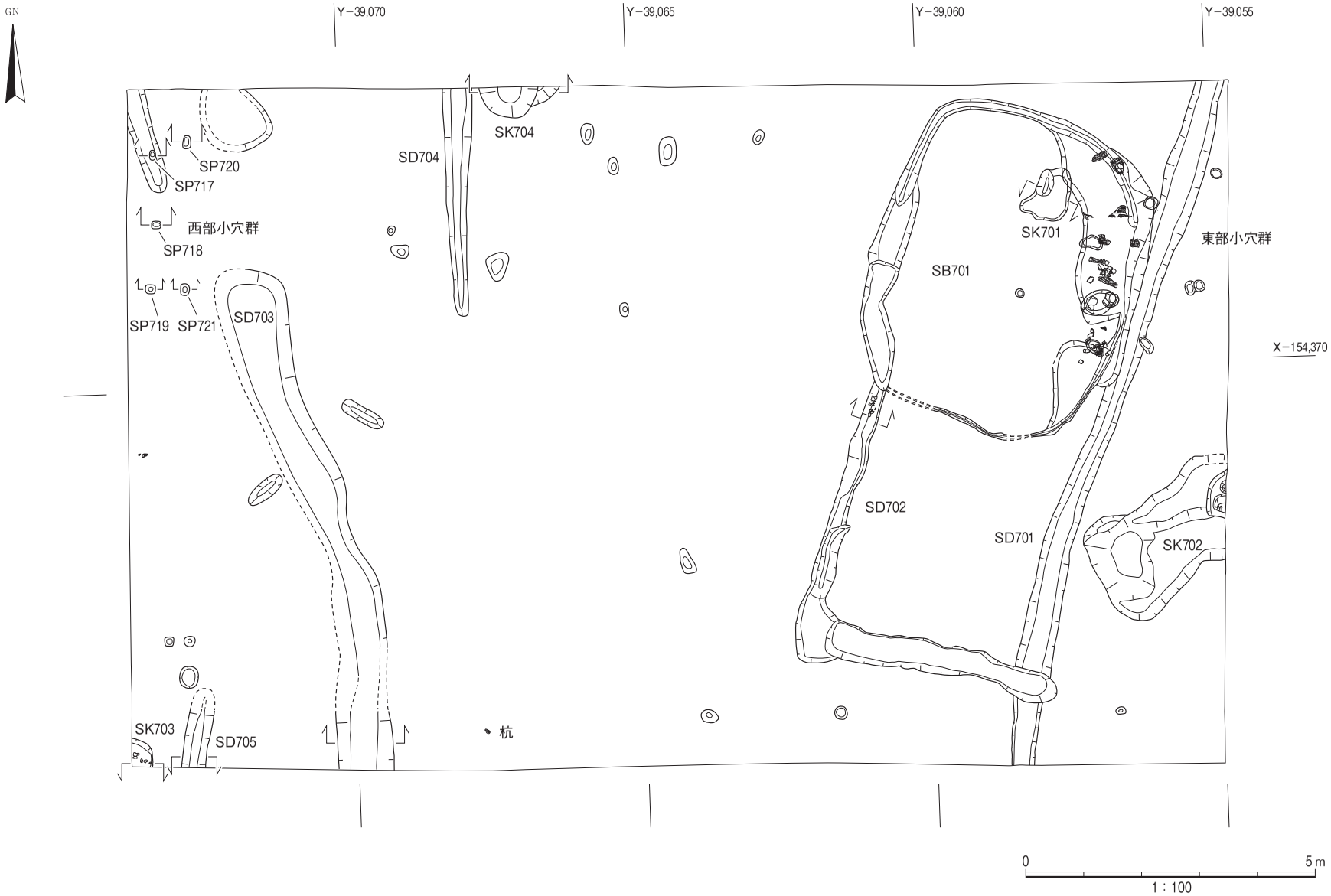


図22　弥生時代の遺構平面図

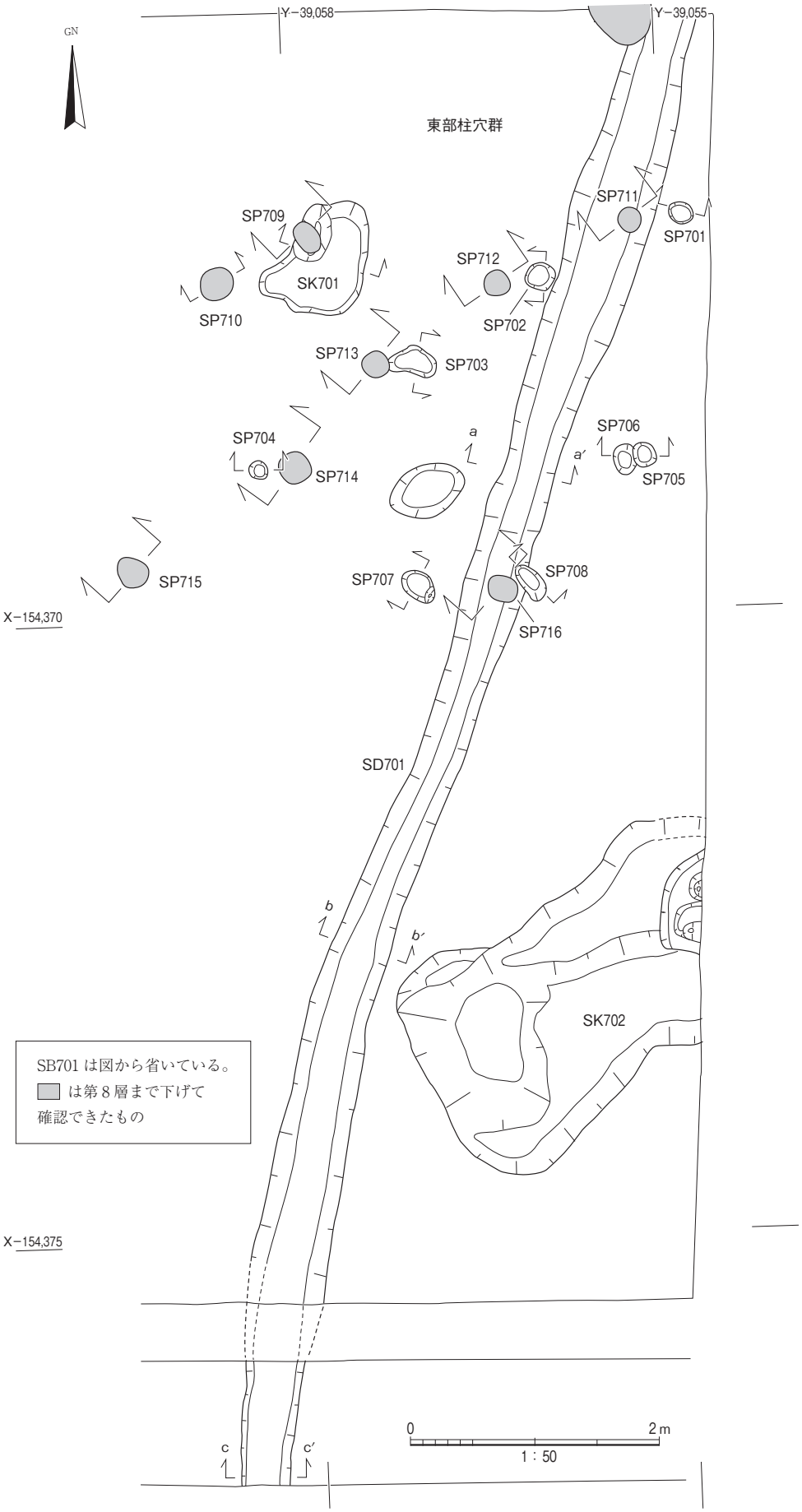


図23　東半部弥生時代の遺構平面図

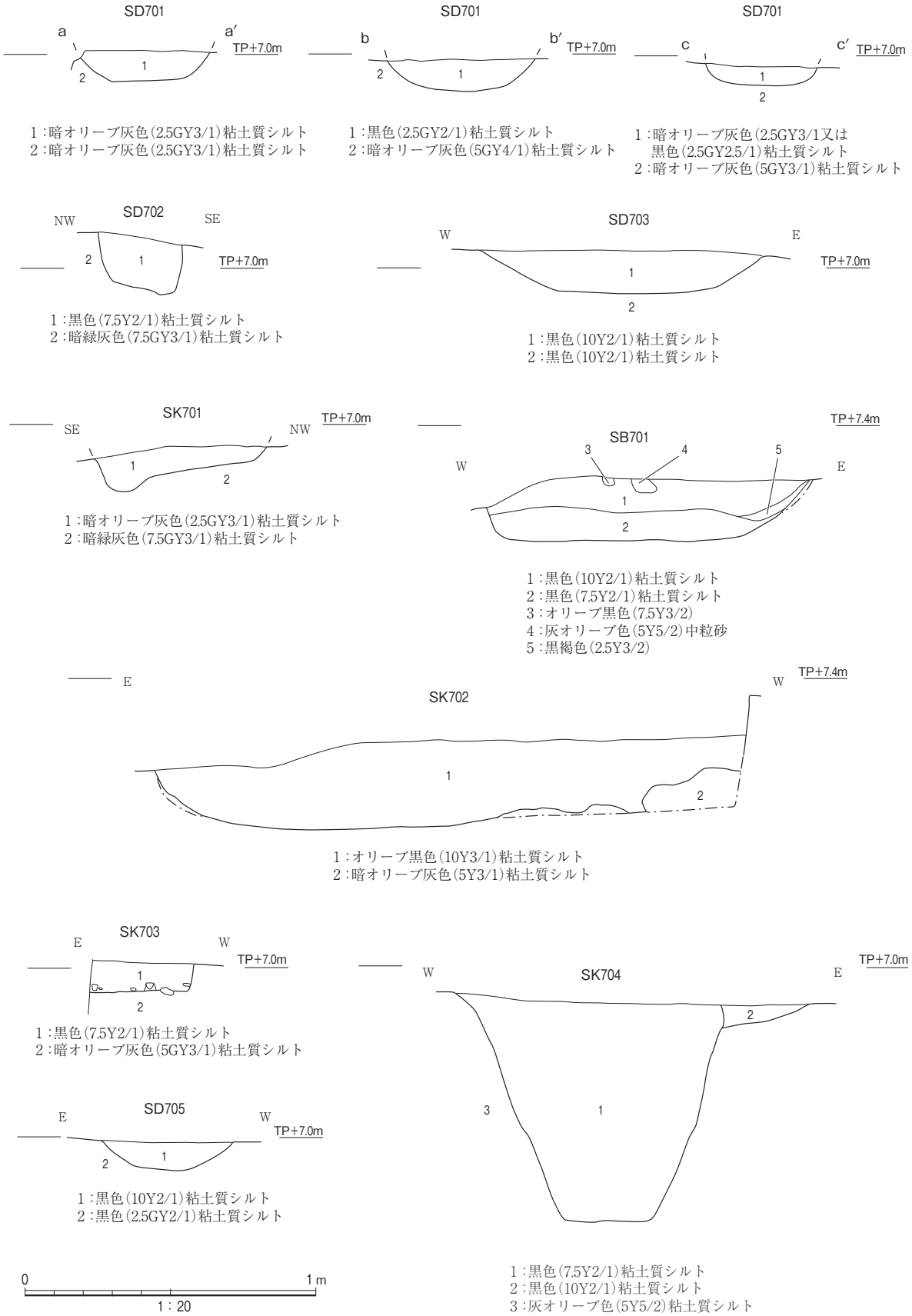
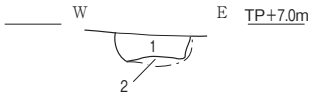

SD701
a
a′
TP+7.0m
1
2
1：暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)粘土質シルト
2：暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)粘土質シルト
SD701
b
b′
TP+7.0m
2
1
1：黒色(2.5GY2/1)粘土質シルト
2：暗オリーブ灰色(5GY4/1)粘土質シルト
SD701
c
c′
TP+7.0m
1
2
1：暗オリーブ灰色(2.5GY3/1又は
黒色(2.5GY2.5/1)粘土質シルト
2：暗オリーブ灰色(5GY3/1)粘土質シルト
SD702
NW
SE
2
1
TP+7.0m
1：黒色(7.5Y2/1)粘土質シルト
2：暗緑灰色(7.5GY3/1)粘土質シルト
SD703
W
E
TP+7.0m
1
2
1：黒色(10Y2/1)粘土質シルト
2：黒色(10Y2/1)粘土質シルト
SK701
SE
NW
TP+7.0m
1
2
1：暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)粘土質シルト
2：暗緑灰色(7.5GY3/1)粘土質シルト
TP+7.4m
SB701
3
4
5
W
E
1
2
1：黒色(10Y2/1)粘土質シルト
2：黒色(7.5Y2/1)粘土質シルト
3：オリーブ黒色(7.5Y3/2)
4：灰オリーブ色(5Y5/2)中粒砂
5：黒褐色(2.5Y3/2)
E
W
TP+7.4m
SK702
1
2
1：オリーブ黒色(10Y3/1)粘土質シルト
2：暗オリーブ灰色(5Y3/1)粘土質シルト
SK703
E
W
TP+7.0m
1
2
1：黒色(7.5Y2/1)粘土質シルト
2：暗オリーブ灰色(5GY3/1)粘土質シルト
SD705
E
W
TP+7.0m
2
1
1：黒色(10Y2/1)粘土質シルト
2：黒色(2.5GY2/1)粘土質シルト
W
SK704
E
TP+7.0m
2
3
1
1：黒色(7.5Y2/1)粘土質シルト
2：黒色(10Y2/1)粘土質シルト
3：灰オリーブ色(5Y5/2)粘土質シルト
0
1 m
1：20

図24　遺構断面図

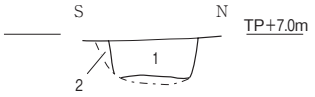
東部柱穴群

SP701



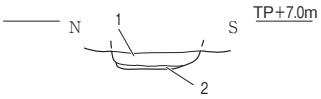
1:黒色(10Y2/1)粘土質シルト
2:暗緑灰色(10GY3/1)粘土質シルト

SP702



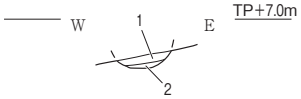
1:暗オリーブ灰色(5GY3/1)粘土質シルト
2:オリーブ黒色(10Y3/1)粘土質シルト

SP703



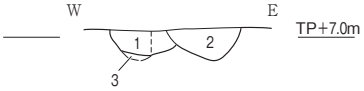
1:黒色(2.5GY2/1)粘土質シルト
2:暗オリーブ灰色(5GY4/1)粘土質シルト

SP704



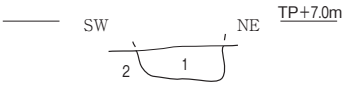
1:黒色(2.5GY2/1)粘土質シルト
2:暗緑灰色(7.5GY3/1)粘土質シルト

SP706　SP705



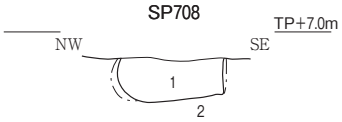
1:黒色(2.5GY2/1)粘土質シルト
2:オリーブ黒色(10Y3/1)粘土質シルト
3:暗オリーブ灰色(5GY3/1)粘土質シルト

SP707



1:オリーブ黒色(10Y3/1)粘土質シルト
2:暗緑灰色(7.5GY3/1)粘土質シルト

SP708

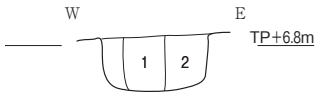


1:オリーブ黒色(10Y3/1)粘土質シルト
2:暗緑灰色(10GY3/1)粘土質シルト

SP709

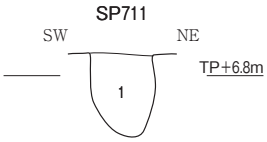
1 :オリーブ黒色(7.5Y2/2)粘土質シルト

SP710



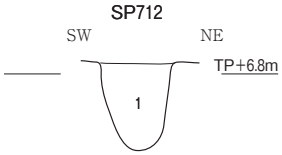
1 :黒色(5Y2/1)粘土質シルト
2 :オリーブ黒色(7.5Y3/1)粘土質シルト

SP711



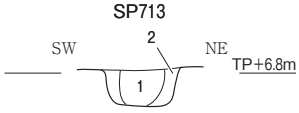
1 :オリーブ黒色(5Y3/1)粘土質シルト

SP712



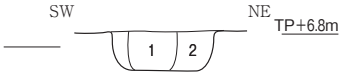
1 :オリーブ黒色(7.5Y3/1)粘土質シルト

SP713



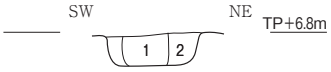
1 :黒色(7.5Y2/1)粘土質シルト
2 :オリーブ黒色(10Y3/1)粘土質シルト

SP714



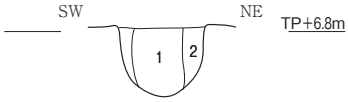
1 :黒色(7.5Y2/1)粘土質シルト
2 :オリーブ黒色(7.5Y2/2)粘土質シルト

SP715

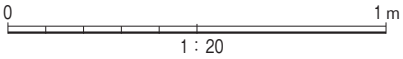


1 :オリーブ黒色(5Y3/1)粘土質シルト
2 :オリーブ黒色(5Y3/1)粘土質シルト

SP716

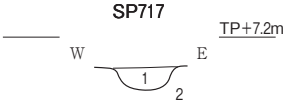


1 :黒色(5Y2/1)粘土質シルト
2 :黒色(5Y2/1)粘土質シルト



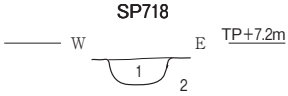
西部柱穴群

SP717



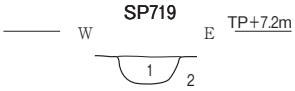
1 :黒色(7.5Y2/1)粘土質シルト
2 :オリーブ黒色(7.5Y3/1)粘土質シルト

SP718



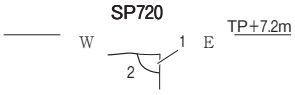
1 :黒色(7.5Y2/1)粘土質シルト
2 :黒色(7.5Y2/1)粘土質シルト

SP719



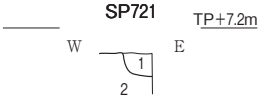
1 :黒色(7.5Y2/1)粘土質シルト
2 :黒色(7.5Y2/1)粘土質シルト

SP720



1 :黒色(5Y2/1)粘土質シルト
2 :黒色(7.5Y2/1)粘土質シルト

SP721



1 :黒色(5Y2/1)粘土質シルト
2 :オリーブ黒色(5Y2/2)粘土質シルト

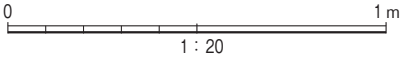


図25　小穴群断面図

まであった。しかし、出土遺物からは調査時の検出順序と遺構本来の時期の新旧が必ずしも対応しなかった。この原因は単純に遺構埋土が判別容易なものと困難であったものとの違いと考えられる。このため、これらの遺構は第７層中の遺構として一括して記すこととする。なお、上記の理由により多くの遺構が本来の規模より小さくなっていることを断わっておく。

以下、弥生時代中期後葉の遺構から順を追って報告する。弥生時代中期後葉の遺構埋土は長原遺跡南部の標準層序のNG8B層に、後期中葉の遺構埋土はNG7B層に相当するものである。

SD701（図22～24）　調査区の東部で検出した東北東方向に流れる幅0.4～0.7m、深さ0.2m前後で、断面の形状が皿状の溝である。溝内には水成層の暗オリーブ灰色（2.5GY3/1）～黒色（2.5GY2/1）粘土質シルトが堆積していた。遺物は弥生土器細片が出土したのみであるが、溝の北部を弥生時代後期の竪穴建物SB701に、南部を弥生時代中期後葉の溝SD702に掘り込まれていることからからみて弥生時代中期後葉以前の遺構と判断した。排水溝の可能性がある。

SD702（図22・24・26・27）　SB701の南に位置する幅0.3～0.6m、深さ0.2～0.3mの断面U字形の溝である。一旦直線的に南に延びた後、東にほぼ直角に曲がることから竪穴建物の周壁溝の可能性もあるが、明らかにしえなかった。なお、溝が南北から東西方向に曲がる屈折部は一部土壙状に深くなっていたが、埋土には変化は見られなかった。溝内には水漬の黒色（10Y2/1）粘土質シルトが堆積しており、溝の北部から弥生土器の壺や甕の破片が出土した。

104・110・111は壺である。104は口径約13cmの壺で、口縁部は緩やかに外反して開く。器面の調整は外面がタテハケ、内面は板ナデである。110は口径約29cmの広口壺で、上下に拡張した口縁部の外端面に４条の擬凹線文を施した後、上下２個一対の円形浮文を貼りつけるほか、内面にも櫛描刺突

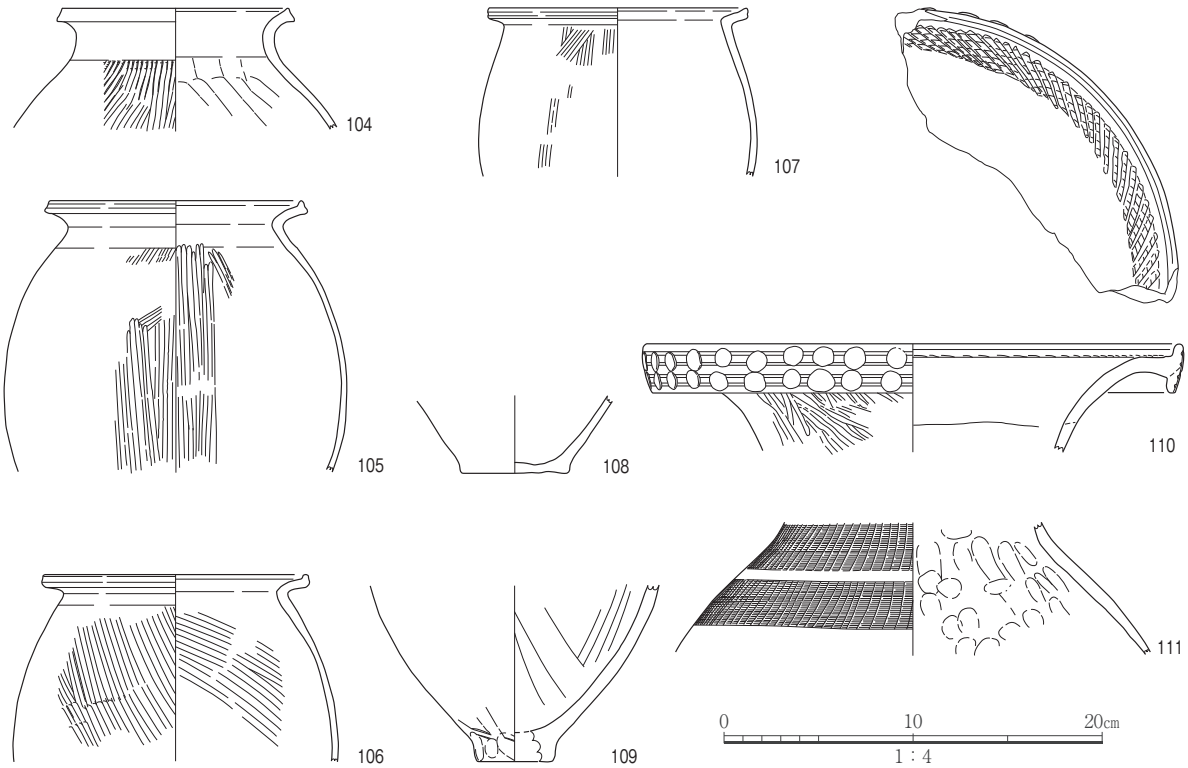


図26　SD702出土遺物

文を施している。111は壺の体部上半で、外面には櫛描簾状文を施している。

105～109は甕で、105～107は口縁部に強いヨコナデを加えて端部をつまみ上げている。105の調整は外面が右上がりのハケの後、ヘラミガキを施しており、内面は縦方向のヘラミガキである。106・107の調整は外面がタテハケで、内面は前者が左上がりのハケメ、後者はナデである。108・109は甕の底部で、器面が磨滅しており調整は明らかでない。以上の土器の時期は、甕の形態や壺の凹線文・円形浮文などからみて、弥生時代中期後葉に属するものである。

SD703(図22)　調査区の西部に位置する。側溝などによって大部分が失われているが、本来は幅約１ｍで断面が逆台形状を呈する深さ0.2mの南北方向の溝と考えられる。西北部ではこれの延長と推定される溝も確認された。溝内には水成層の黒色(10Y2/1)粘土質シルトが堆積していた。遺物は出土しなかったが、埋土のようすからみて上述したSD702と同様な時期・機能を有する溝と考えられる。

SK701(図22)　SD701および小穴群の西側に位置する平面形が不整形な南北0.9m、東西0.6～0.8m、深さ0.2m前後の土壙である。埋土は暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)粘土質シルトで、遺物は出土しなかった。切り合い関係から、後述のSB701や小穴群に先行する。

東部小穴群(図22・23・25)　調査区の東北部に分布する小穴群である。SP701～716が相当する。平面形は円形もしくは楕円形である。これらの小穴の埋土はオリーブ黒色(10Y3/1)～黒色(2.5GY2/1)粘土質シルトである。このうちSP701～708は検出面からの深さが0.1m未満のものが多く、明確な柱痕跡は見られない。また、TP＋6.8～6.9mの付近で底が水平になっているものが見られる。一方、SP709～716はTP＋6.8～6.9mの付近で輪郭が認識ができたものが多く、検出面からの深さが0.2m以上に及ぶものもある。東隣のNG07－１次調査では地震による水平ずれが確認されており、下位に対して上位が約0.3m北東にずれを起こしていた。これらのことを考慮するとSP701とSP711、SP702とSP712、SP703とSP713、SP708とSP716などは本来同一の遺構であったものが、水平ずれによって上下２分された可能性が高い。このうちSP711～715は柱間が1.2～1.5mで一列に並ぶことから柵の可能性がある。以上の小穴群の時期は遺物が出土しなかったものの、切合い関係ではSB701より古くSD701より新しい。弥生時代中期後葉以降、後期前葉以前といえる。NG07－１次調査で弥生時代中期後葉の掘立柱建物が検出されていることから同時期の可能性があろう。

西部小穴群(図22・25)　調査区の西北部に分布する小穴群である。SP717～721が相当する。形状は１辺0.15～0.25mの平面形が方形で、深さは検出面から0.15mであった。柱痕跡は確認できなかった。側溝で失われているため、東側への拡がりは不明であるが、東西２間、南北２間の掘立柱建物の可能性がある。柱間隔は南北方向で1.2m、東西方向で0.6mである。

出土遺物はないが、切合い関係ではSD703の延長と考えられる溝よりも後出する。

SB701(図22・24・27・28、原色図版、図版７・20・21)　調査区の中央部やや北寄りに位置する東西4.7m、南北5.5mで、平面形が隅丸方形を呈する竪穴建物とみられるものである。遺構の南部を一部攪乱されている以外はほぼ旧状を保っている。幅0.1～0.4mの周壁溝とみられる溝が巡っているが、東側には床面から周壁溝に向かって幅0.7～0.8m前後の浅い段があり、周壁溝も深く掘り込まれていた。段の底は平坦になっており、これに接するように完形品を含む弥生土器112～121が一括で出

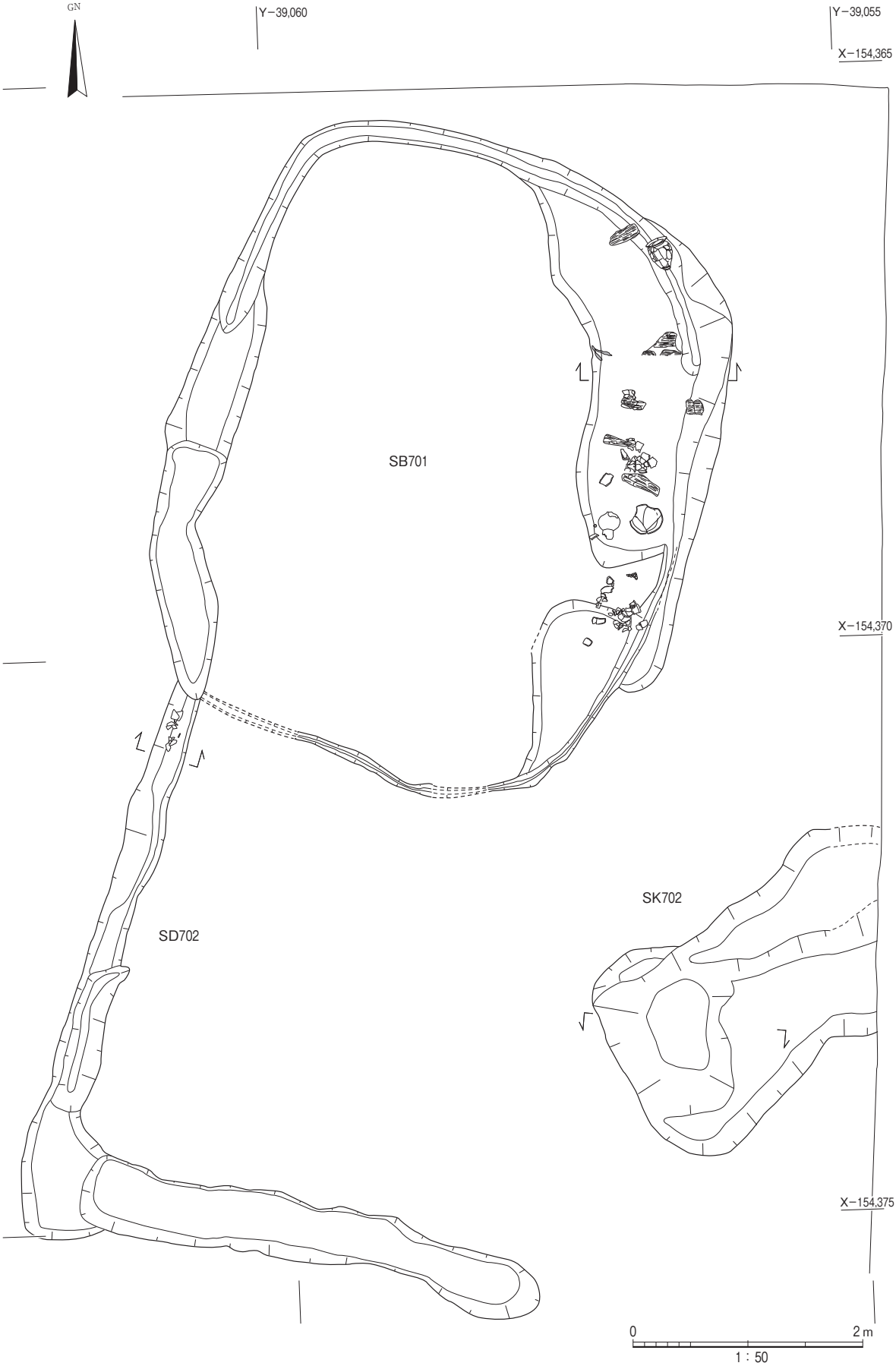


図27　SB701平面図

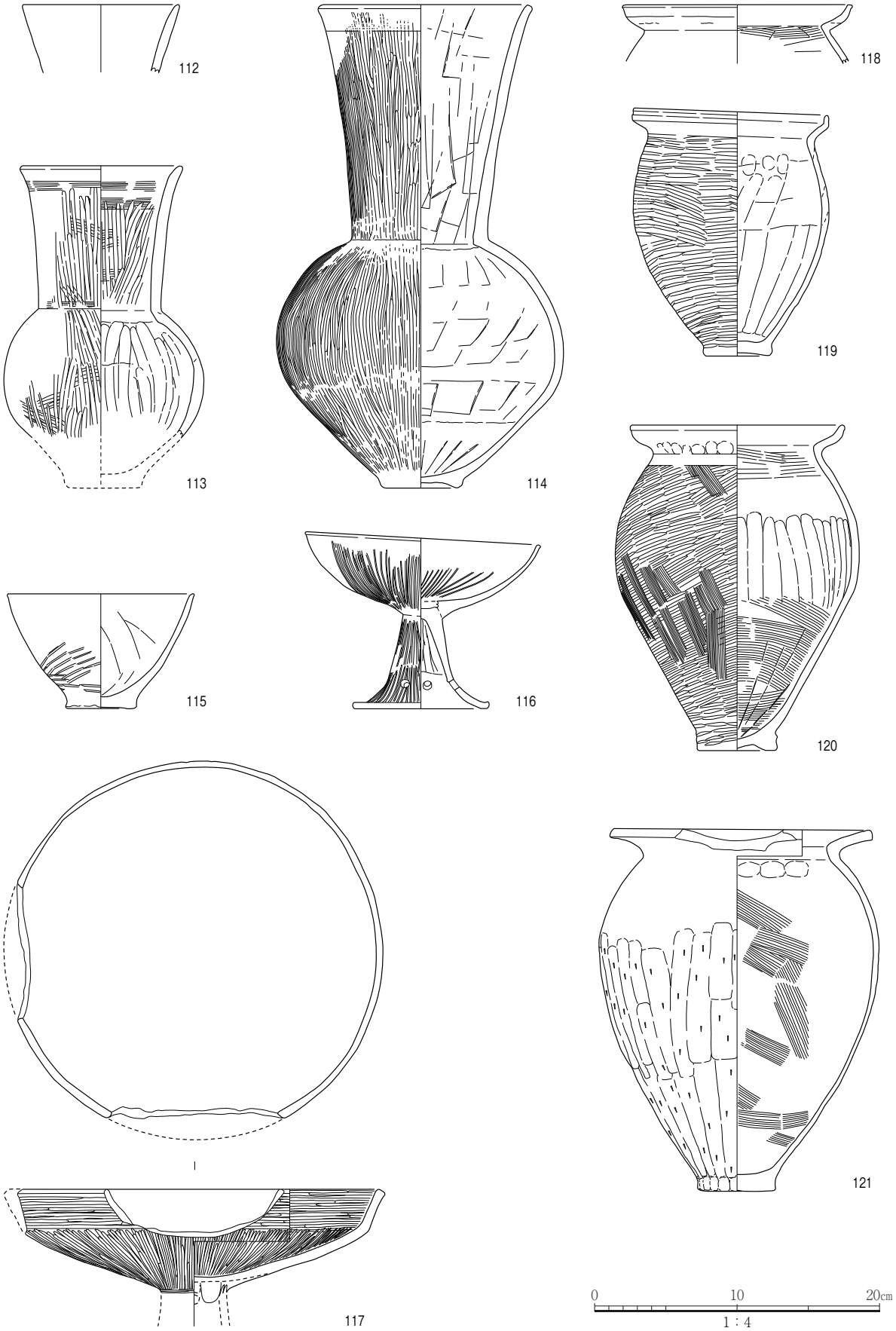


図28　SB701出土遺物

土した。床面は暗オリーブ灰(5GY3.5/1)粘土質シルト層を0.1～0.2m掘り下げて形成しているが、貼り床や間仕切りなどの付属施設は見られなかった。埋土は黒色(10Y2/1および7.5Y2/1)粘土質シルトで、有機物を部分的に含む。なお、建物の西南隅には周壁溝に取りつくようにSD702が南に直線的に延びるが、後者の時期は出土遺物からみて中期後葉に属することから、別の遺構と判断した。

112～114は長頸壺である。112は口頸部の中程以下を、113は底部を欠損している。器表面の調整は前者がナデ、後者は外面がハケの後、縦方向の細かいヘラミガキで、内面は体部が縦方向のナデ、頸部は横方向のハケの後、縦方向の細かいヘラミガキである。114は口径約10cm、器高約34cmで、口頸部は球形に近い体部から上方に向かってわずかに開きながら立つ。器体の調整は外面が縦方向の細かいヘラミガキで、内面は板ナデである。底部の内面にはクモの巣状のハケメが残る。

115は口径約13cm、器高約８cmの鉢である。口縁部は体部から外上方に直線的に開いており、器体の調整は外面が右上がりの平行タタキの後、横方向のナデ、内面は左上がりのナデである。

116・117は高杯である。116は口径約17cm、器高約12cmあり、杯部は緩やかに内湾しながら口縁部に至る。脚部は柱状部から短い裾が開く。器体外面の調整は細かい縦方向のヘラミガキで、柱状部の内面にはシボリメがある。117は脚部を欠損した大型の高杯で、口縁部の２箇所を打ち欠いている。口縁部の下端にはにぶい稜があり、これを境に上半を横方向、下半を縦方向の細かいヘラミガキで調整している。杯部と脚部の接合部には杯部の内面から円盤が充填されており、この裏面中央には刺突痕がある。

118～121は甕である。118は口径約17cmの甕で、口縁部は一旦外上方に開いてから立つ。頸部の内面は横方向のハケで調整している。119は口径13.5cm、器高約17cmの甕で、口縁部は一旦外反してから短く立つ。体部は３分割成形しており､外面の整形は平行タタキで､内面は縦方向のナデ調整である。120は口径15.5cm、器高約23cmの甕で、口縁部は一旦外反した後、わずかに開いて立つ。体部は３分割成形しており、最大径は体部上半にある。外面は平行タタキで整形した後、まばらな縦方向のハケで調整している。内面の調整は、左上がりのハケの後、縦方向のナデを加えている。頸部の外面にはユビオサエの痕がある。121は口径18.5cm、器高25cmの甕である。口縁部は水平に近く外反しており、端部は面をもつ。最大径は体部の上半にあり、調整は外面が縦方向のヘラケズリで、内面は左上がりのハケである。口縁部に打ち欠きがある。

以上の土器の所属時期であるが、長頸壺の体部が球形に近く、甕の口縁部に受け口を含むこと、体部の形態も無花果形を呈し、上半部に最大径があることなどからみて、弥生時代後期前葉に属するものであろう。

SK702(図22～24･27･29、図版８)　東部が調査範囲外のため、全体の形状や規模は明らかでないが、調査区の東南部に位置する東西３m以上、南北約1.6mの平面形がやや不整形な土壙である。深さ0.5mで、本遺構も地震による水平断層が認められ、西側の深い部分が南西方向にずれた位置で検出された。埋土はオリーブ黒色(10Y3/1)粘土質シルトで、弥生土器の破片が出土した。

122・123は小型の広口壺の口頸部片で、径は122は約15cm、123が約10cmある。内外面の器面調整は122はハケで、123がヘラミガキである。

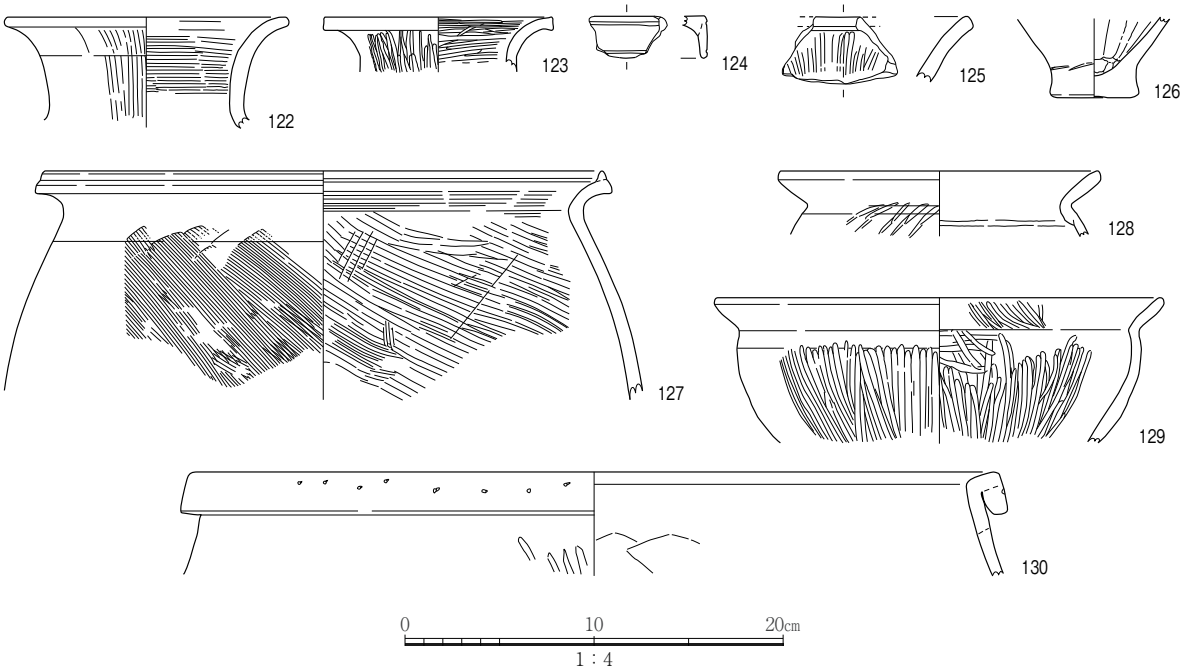


図29　SK702出土遺物

124・125は高杯の口縁部の細片である。124は垂下する口縁部をもつもので、外端面に２条の凹線が施されている。125は外反する口縁をもつもので、外面の調整は細かいヘラミガキである。

126～128・130は甕である。126は底部である。127は口径約30cmの甕で、緩やかに外反する口縁部の上端をつまみ上げている。体部外面の器面調整は内外面ともに左上がりのハケであるが、内面のハケメは粗い。128は口径約17cmの甕の口縁部片で、端部は丸い。体部の外面を平行タタキで整形している。130は口径約44cmの大型の甕で、口縁部を折り曲げて段状に成形している。口縁部の外端面には刺突文が巡る。体部の器面調整は外面がヘラミガキで、内面は左上がりの粗いナデである。色調は暗褐色を呈し、胎土中に角閃石粒を多く含むいわゆる生駒西麓産の土器である。

129は口径約24cmの鉢で、体部の内外面の調整は縦方向のヘラミガキである。

以上の土器の所属時期であるが、弥生時代中期後葉に属する124・127・130以外は、弥生時代後期前～中葉に属する。

SK703(図22・24・30)　調査区の西南隅に位置する土壙であるが、遺構の大半が調査範囲外であるため形状や規模は明らかでない。深さは検出面から約0.2mあり、埋土は黒色(7.5Y2/1)粘土質シルトで、底に接して弥生土器が出土した。

131・132は長頸壺である。131は口径約13cmで、口頸部は球形に近い体部からわずかに開きながら立つ。器面の調整は外面が縦方向のハケ、内面は左上がりの粗いナデおよびヨコナデである。体部内面の上半にはユビオサエが残る。133は高杯の脚部である。

134～136は甕である。134・135は口縁部の細片で、口縁端部にはキザミメが施されている。134の頸部には３条のヘラ描き沈線文が巡る。136は底部であり、器表面を細筋のタタキで整形している。内面は横方向のナデ調整である。

以上の土器の所属時期は弥生時代前期後葉に属する134･135以外は、後期中葉に属するものであり、

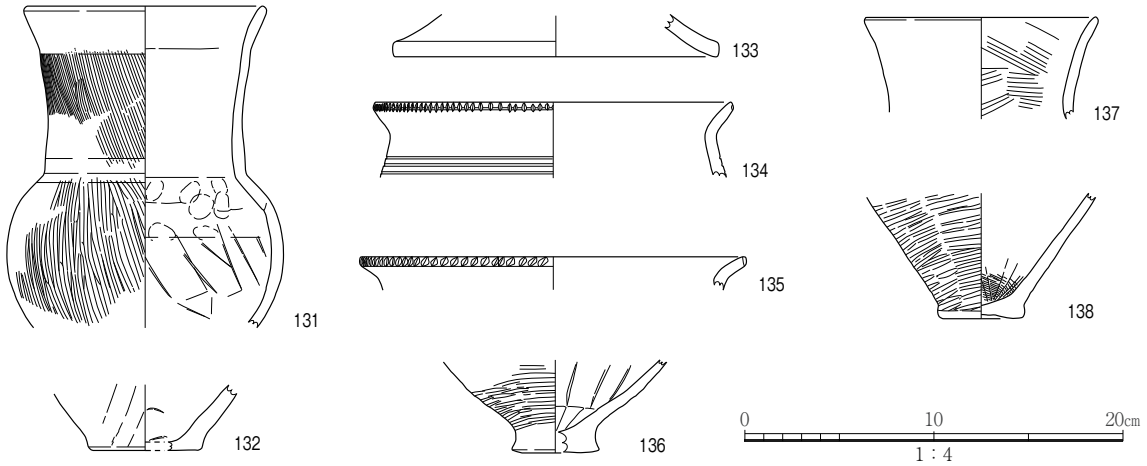


図30　SK703・704出土遺物
（SK703：131～136、SK704：137・138）

遺構の時期を示すものであろう。

SK704（図22・24・30、図版８）　調査区の北部に位置する土壙であるが、遺構の大半が調査範囲外であるため、全体の形状や規模は明らかでない。土壙の深さは検出面から0.8mあり、埋土は水漬の黒色（7.5Y2/1）粘土質シルトである。断面の形状や深さが湧水層まで達していることから素掘りの井戸の可能性がある。弥生土器が出土した。

137は口径12.5cmを測る長頸壺の口頸部片で、調整は外面がナデ、内面は左上がりのハケである。138は甕の底部で、裏面は浅く凹む。器体の外面を平行タタキで整形しており、内面下端にはクモの巣状のハケメを施している。

写真１　杭

図31　杭

以上の土器は、弥生時代後期中葉に属するものとみられ、遺構の時期も同様であると考えられる。

SD704（図22）　調査区の西北部に位置する幅0.2～0.5m、深さ0.1m前後の溝で、溝内には水成層の黒色（7.5Y2/1）粘土質シルトが堆積していた。遺物は出土しなかったが、埋土からみて弥生時代後期の遺構であろう。

SD705（図22・24）　調査区の西南部で検出した溝である。幅0.4m、深さ0.2mを確認したに過ぎないが、南壁の観察結果から、本来は幅１m程度、深さ0.5mの溝であった可能性がある。埋土は黒色（7.5Y2/1）粘土質シルトである。遺物は出土しなかったが弥生時代後期の遺構であろう。

杭（図22・31、写真１）　調査区南端部の第７層上面で検出した。位置的には第６層上面で検出した小穴列の延長上に当るが、深さが大きく異なっており、第７

層の遺構と判断した。杭139は長さ58.1㎝、最大径3.8㎝である。途中変形しており、地震の水平ずれの影響の可能性がある。樹皮が残る枝を材にしており、中程には脇枝を切り取った痕があるほか、尖端を加工している。材はイヌガヤである。

上記の遺構の含まれる第７層からは弥生土器140～183、土師器184～186、韓式系土器187、初期須恵器188・189のほか、土製品190、石器191・192などが出土した。

140～183は弥生土器で、140～154は壺である。140～149は壺の口頸部である。140は口径約13.5㎝で、口縁部は直立する頸部から大きく開く。頸部の下端に櫛描直線文、口縁部の内面に孤状の櫛描文を施している。頸部の調整は外面が縦方向のハケの後、同方向のナデ、内面も縦方向のナデである。141は口径約13.5㎝の直口壺の口頸部で、口縁部は直立する頸部から外上方に短く開く。頸部の内外面をハケで調整している。142～144は口径15～22㎝前後の広口壺で、口縁部を上下に肥厚している。145・146は口縁部を下方に拡張した壺で、145は外面を縦方向のヘラミガキで調整している。146には口縁部の外端面に３条の凹線文を施したのち円形浮文を貼付けている。147～149は口径22～34㎝前後の広口壺で、口縁部を下方に拡張している。147の口縁部外端面には３条の凹線文、口縁部内面に櫛描刺突文が見られる。148の口縁部の外端面には刺突文、149の口縁部の外端面にも２条のにぶい凹線文が施されている。148は褐色を呈し、胎土中に角閃石粒を含むいわゆる生駒西麓産の土器である。150は壺の頸部から体部の破片で、頸部の下端には突帯がある。151・152は壺の体部片で、前者はヘラ描きの直線文が、後者にはヘラ描きの絵画状の斜線が施されている。153・154は底部で、153は器体の外面を細筋のヘラミガキ、内面をハケで調整している。

155～157は弥生土器鉢である。155は口径約28㎝で、口縁部は体部から直立し、同端部は左右にわずかに肥厚する。器体の中程をにぶい突帯が巡る。156は段状口縁部の外面に櫛描刺突文を施す。無頸壺の可能性もある。157は底部で外面をヘラミガキで調整している。

158～162は弥生土器高杯である。158は口縁部を下方に拡張した杯部片で、外端面ににぶい凹線が巡る。159は柱状の脚部で、外面を縦位のヘラミガキで調整しており、杯部の内面にはクモの巣状のハケメが残る。色調は茶褐色を呈し、角閃石粒を含むいわゆる生駒西麓産の胎土である。160～162は脚裾部で、160は端部を上方に拡張している。160・162はスカシ孔を穿つ。

163～183は弥生土器甕である。163・164は頸部の外面にヘラ描直線文が施された甕の頸部片である。165は緩やかに外反する口縁部で、調整は内外面とも粗いハケである。口縁端部にキザミメを施す。166は口縁部が外上方に短く開いており、頸部の内外面をユビオサエで整える。167は底部を欠損した口径約９㎝の小型の甕で、口縁部は短く開く。体部の中程以下をヘラケズリで調整する。168は口径約13㎝、器高18㎝前後の甕で、口縁部は短く開く。体部の調整は外面がタテハケの後、縦方向のヘラミガキで、内面は右上がりのハケの後、同方向のナデである。底部外面および内面をユビオサエで整えている。169は口径約24㎝、器高15㎝前後の甕で、口縁部は受け口状を呈する。体部の調整は外面が左上がりのハケで、内面は右から左上がりの板ナデである。170～179は口縁部片である。170の口縁部は緩やかに外反する。171～175の口縁部は短く外反する。176～179は口縁端部を上方に肥厚させる。体部の外面は172・177はハケ調整、174～176・178・179はタタキで整形している。180～

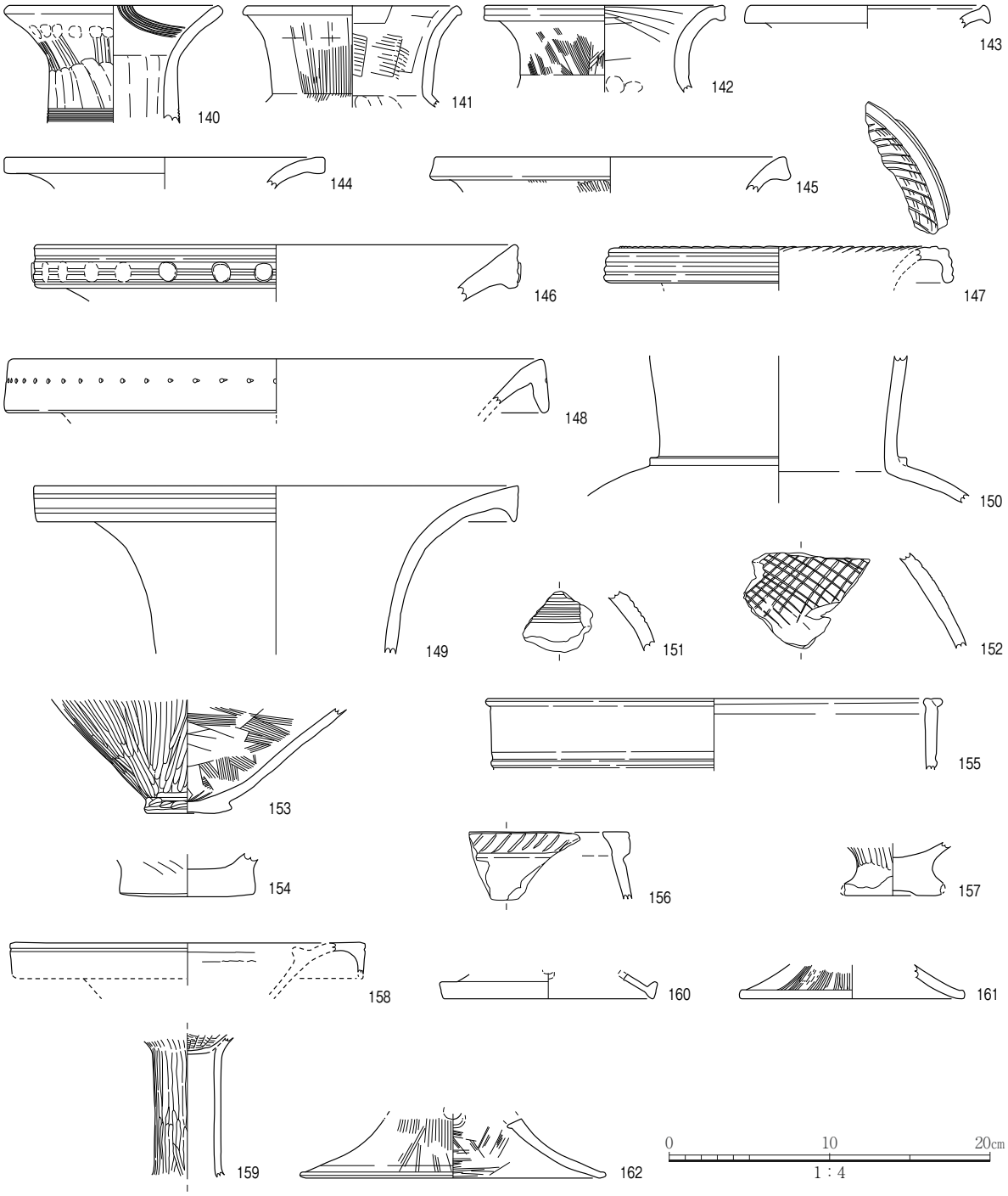


図32　第７層出土遺物(1)

183は底部である。180は内外面、181は内面がナデ調整である。182は細筋のタタキで外面を整形している。183は底部裏面が浅く凹む大型の甕の底部で、器体の外面を縦方向のハケの後、横方向のヘラミガキで調整している。

以上の弥生土器は、151・164・165・169が前期後葉、140・166・170が中期中葉、147～149・155・156・158～160・167・171～174・180・181・183は中期後葉、168・169・176～179は後期前葉、141～143・144～146・150・152は後期中葉、152・154・162・163は後期後葉に属するものと考えられる。

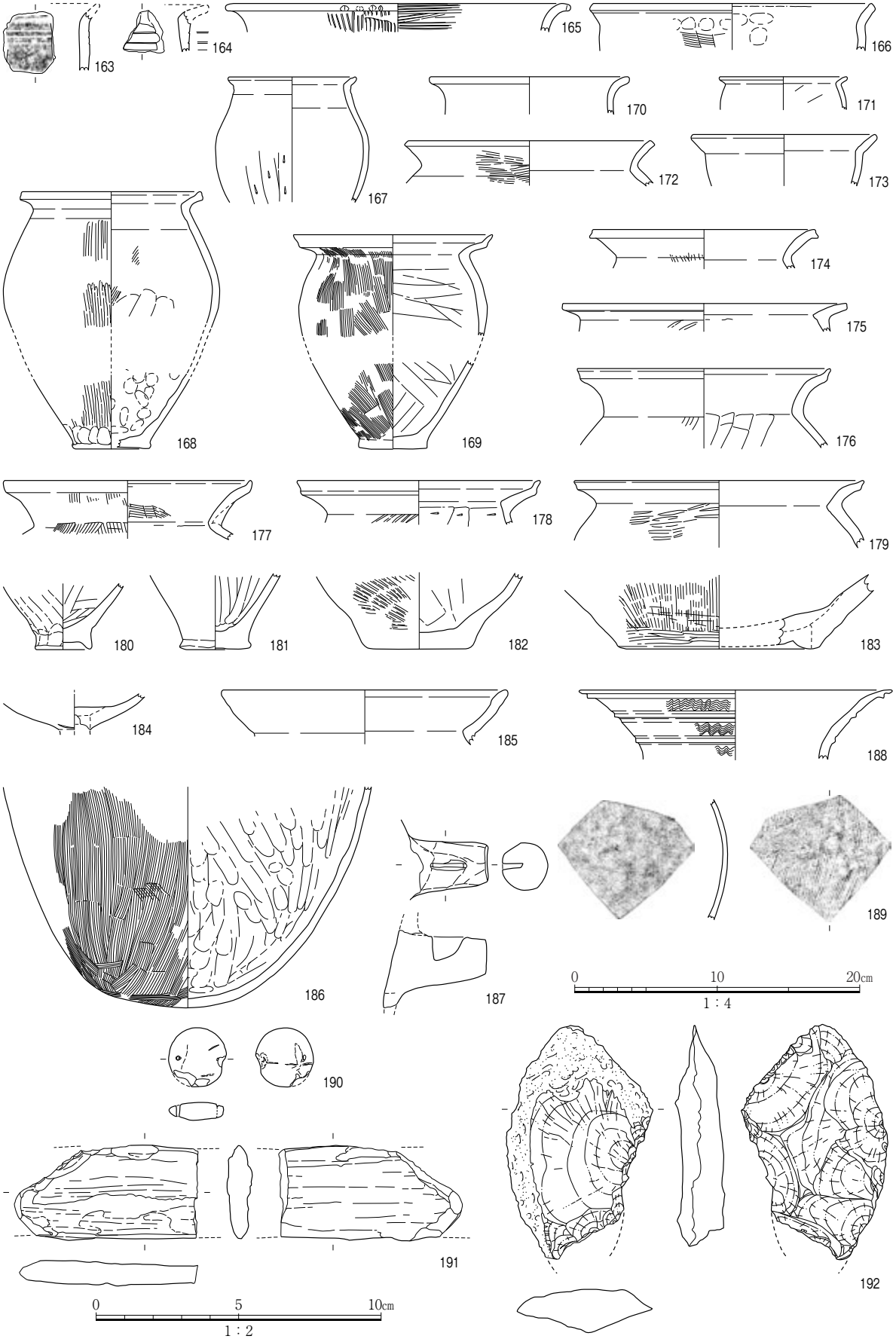


図33　第７層出土遺物(2)

184～186は土師器である。184は椀形高杯の杯部片、185は口縁端部がわずかに内傾する布留式の甕、186は外面をタテハケ、内面を粗い縦方向のナデで調整した長胴甕の体部から底部である。

187は韓式系土器甑か鍋の把手で、上面にスリットを入れている。軟質焼成である。

188・189は須恵器である。188は口径約22㎝の初期須恵器壺の口頸部である。口縁部の下端および頸部の突帯間に櫛描波状文を施す。TK73型式に属するものであろう。189は外面を細筋の平行タタキで整形し、内面の調整は丁寧なナデで、当て具痕は見られない。

190は土製品である。径約４㎝、最大厚６㎜を測る円盤状土製品で、両端に一対の孔を穿つ。

191は最大長6.8㎝、最大幅3.3㎝、最大厚8.5㎜の結晶片岩製の石庖丁未製品である。弥生時代中期に属するものである。192は最大長8.2㎝、最大幅5.1㎝、最大厚1.6㎝のサヌカイト製の尖頭器未製品とみられるものである。主要剥離面側の先端近くを細部調整している。基部が折れており、裏面には礫面が残る。弥生時代中期に属するものである。

以上のように包含層である第７層からは弥生時代前期～古墳時代中期の遺物が出土している。下位の第８層から遺物が出土しなかったこと、周辺の調査成果と合わせると弥生時代前期～古墳時代中期に形成された地層であるといえよう。

これまで見たように第７層の遺構としては弥生時代中期および弥生時代後期の竪穴建物跡・土壙・溝が検出された。周辺の調査においても同様の時期の集落域が確認されており、今回の調査地も集落域の一部であったと考えられる。

一方、古墳時代の遺構は確認することができず、遺物量も少ない。北のNG06－3・４次調査、北西のNG06－３次調査で住居跡など集落域が検出されているのに対し、東方のNG02－１・04－３次調査地では耕作域が検出され、東隣のNG07－１次調査でも遺構・遺物は希薄であった。今回の調査地は後者に類似し、集落域に近接した耕作域であった可能性が高い。

ⅲ)飛鳥時代(図34・35、図版９)

第７層上面では水田が検出された。水成層である第６層によって覆われていた。南南西から北北東方向の大畦畔SR701に直交して東にSR702・703、西にSR704が取り付く。調査区東半は後述の奈良時代の流路NR601で失われている。また、SR701を挟んでSR702の延長線上では畦畔は検出できなかったが、西壁において第７層の高まりがわずかながら認められることから、本来は存在した可能性がある。

SR701　南南西から北北東方向の大畦畔で、下幅1.6～2.4m、高さは0.10～0.15mある。

SR702　SR601の東に取り付く畦畔で、下幅0.5～0.7m、高さ0.03～0.10mある。

SR703　SR601の東に取り付く畦畔で、下幅0.4～0.5m、高さ0.03～0.05mある。

SR704　SR601の西に取り付く畦畔で、SR603の延長線上にある。下幅0.3～0.5m、高さ0.03～0.05mある。

水田の時期であるが、水田面を覆う第6a層からは後述のように弥生土器しか出土しておらず年代を決することはできない。作土層である第6b層以下からは古墳時代中期までの遺物が出土しており、また、後述の奈良時代の自然流路NR601よりも古いことから、古墳時代中期以降、奈良時代中葉以前と

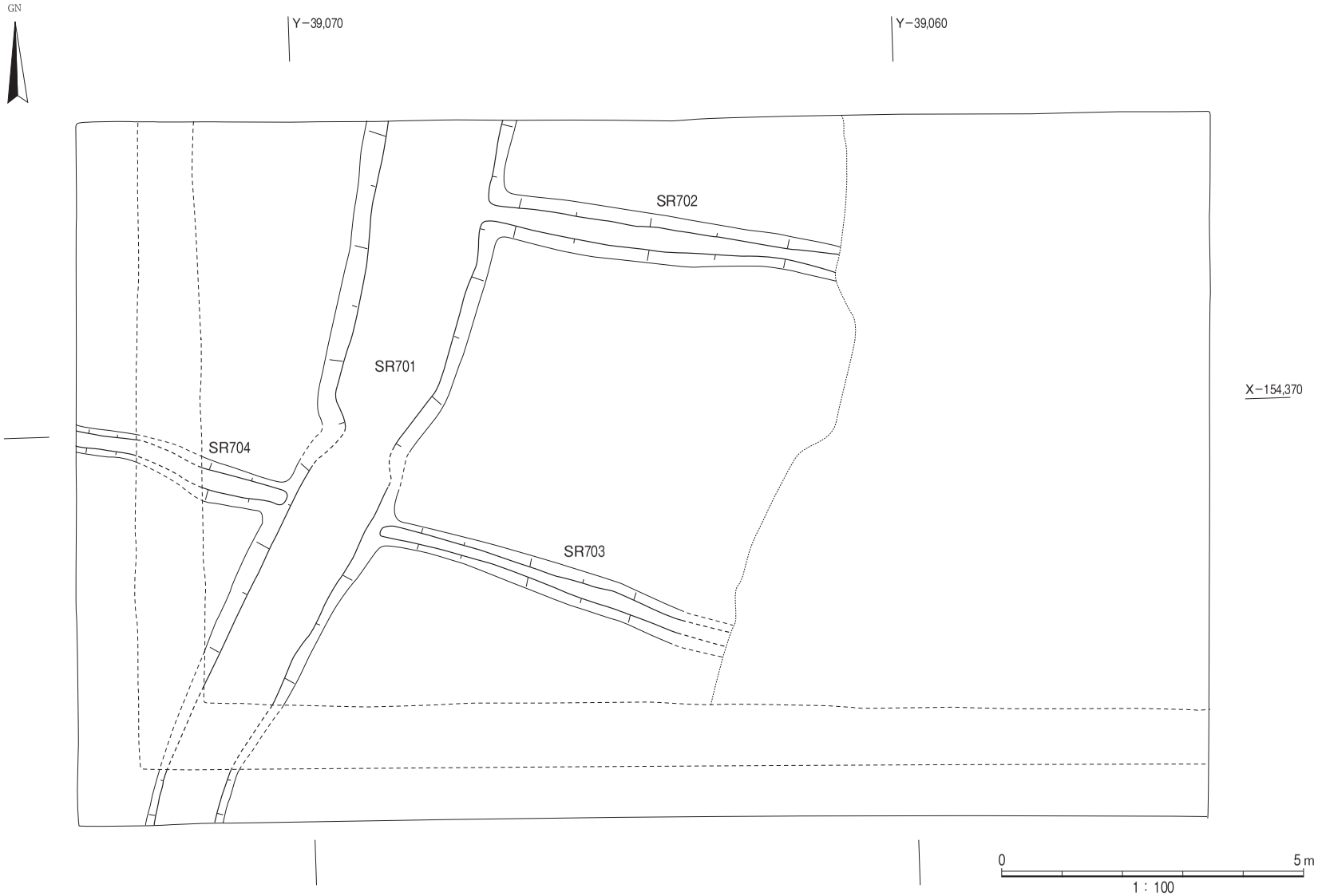


図34　飛鳥時代の遺構平面図

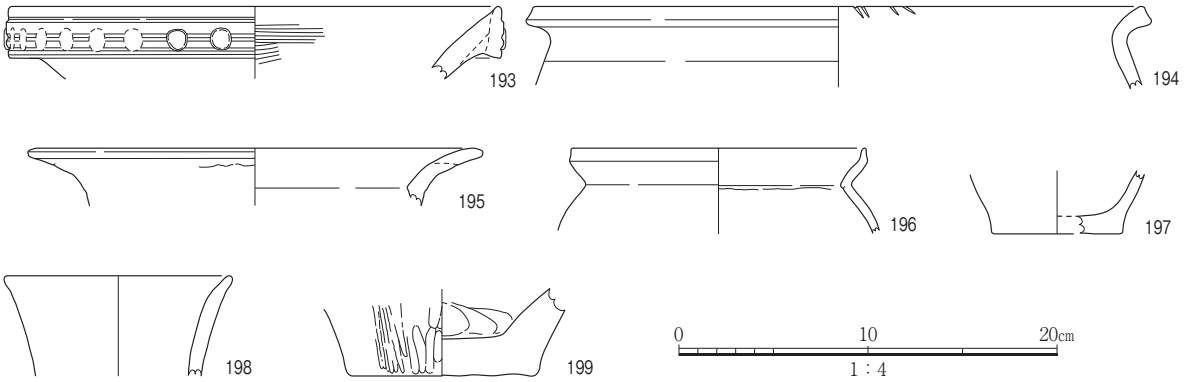


図35　第６層出土遺物

することができる。近隣では飛鳥時代および奈良時代の水田面が検出されているが、奈良時代の水田は概して畦畔が正方位にのったものが多いのに対し、飛鳥時代の水田は畦畔が振った方位であることが多いことから、今回検出した水田の時期はひとまず飛鳥時代としておきたい。

水田を覆う第６層からは弥生土器のみが出土した。参考までに記す。

193・198は弥生土器壺である。193は口径約26㎝の広口壺の口縁部片で、上下にわずかに肥厚させた口縁部の外端面に３条の凹線文を巡らせた後、円形浮文を密に貼りつけている。198は口径約12㎝の長頸壺の口径部片である。

194～197・199は弥生土器甕である。194は口径約33㎝の甕の口頸部片である。短く開く口縁部に強いヨコナデ調整を加えており、外端面が浅く凹む。口縁部の内面にはまばらなキザミメがある。195は口径約24㎝で、口縁部が大きく外方に開く。196は口径15.5㎝で、口縁部は一旦開いた後、短く立つ。197・199は底部で199には外面に縦方向のヘラミガキが加えられている。

これらの遺物の時期は194・197・199は弥生時代中期後葉、193・195・196・198は弥生時代後期後葉に位置づけられるが、地層の堆積年代を示すものではない。

ⅳ)奈良時代(図36～38、図版10・21)

第６層上面では第５層下部で埋没する自然流路のほか溝・小穴を検出した。なお、第4b層から検出面までは重機を使用して掘削をおこなったため、厳密には遺構の規模は記述した数値よりも大きくなる可能性がある。

SD601　西側に位置する幅0.3～0.5m、深さ約0.2mの断面U字形の東西方向の溝である。溝内には水成層の暗緑灰色(7.5GY4/1)粘土質シルトが堆積している。溝の時期は遺物が出土しなかったことから断定しがたいが、後述のNR602に先行することから奈良時代中葉以前と考えられる。

SP601　NR602に先行する径・深さともに約0.4mの小穴である。掘形の底は平坦になっており、埋土は暗緑灰色(7.5GY4/1)粘土質シルトおよび緑灰色(7.5GY5/1)粘土であった。柱痕跡は確認されなかったが、掘形の形状からみて柱穴と考えられる。奈良時代中葉以前であろう。

小穴列　SP601の東に位置する。径0.1～0.2mの小穴が、５基一列に並ぶ。SP601と関係する遺構かもしれない。

NR601　調査区の東半で検出された流路で、幅は東西7.8m以上で、深さは検出面から0.6mある。

図36　奈良時代の遺構平面図

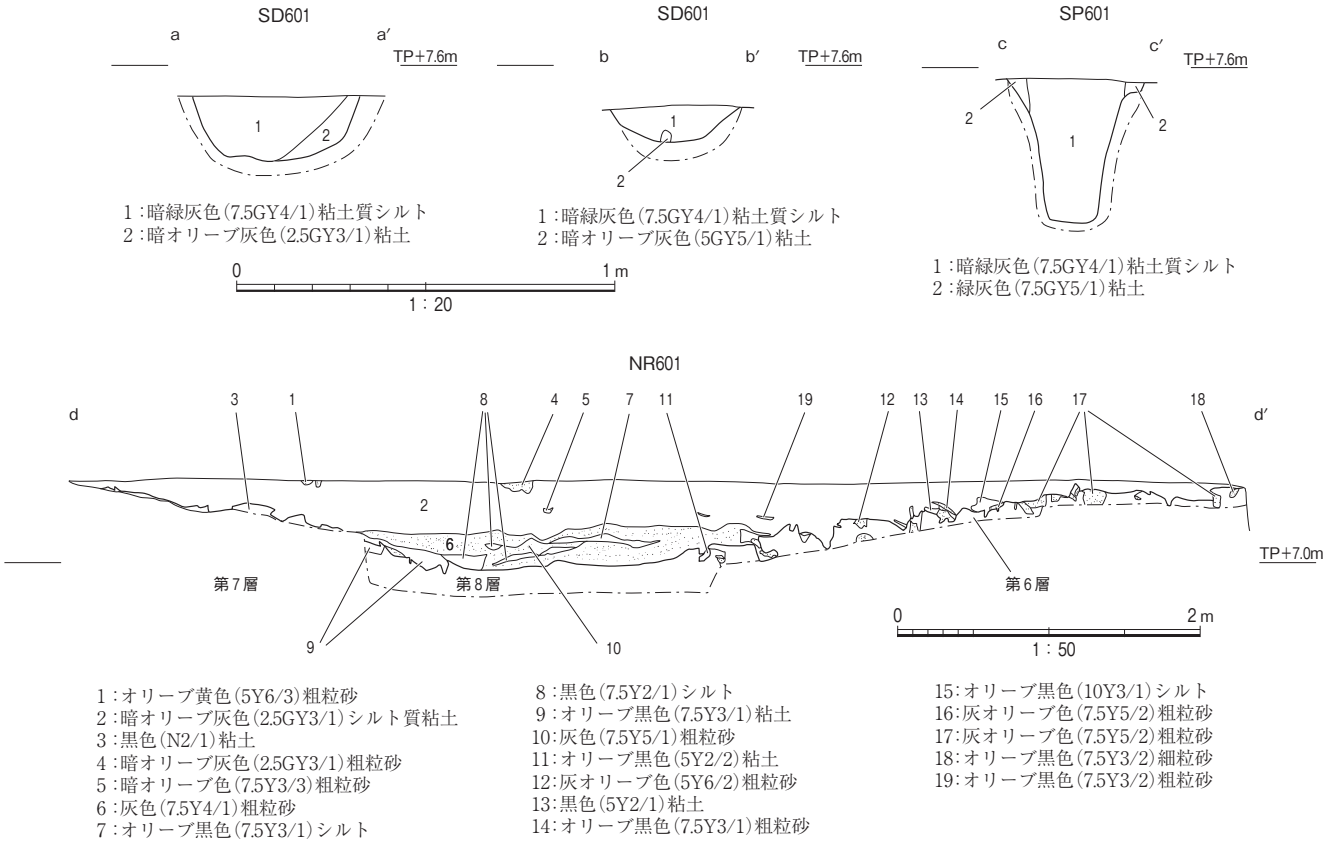


図37　奈良時代の遺構断面図

検出面まで重機によって除去したため、本来はもう少し規模が大きかった可能性がある。流路の最深部は第８層まで達していた。流路内には度重なる洪水の形跡が確認され、上層の暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)粗粒砂、中層の暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)シルト質粘土、下層の黒色(7.5Y2/1)シルトの偽礫を含む灰色(7.5Y4/1)中粒砂質粗粒砂が堆積しており、中層のシルト質粘土を挟んで上下層が粗粒砂という層相であった。また、流路の底面には水流によって生じた凹凸をはじめ、複数の溝状の窪みが見られた。これは流路内に粗粒砂が堆積した水勢が強い時期およびシルト質粘土が堆積するような水勢がゆるやかな時期があったことを示している。

NR601からは弥生土器・土師器・須恵器などが出土した。

200～214は弥生土器である。200～204は壺である。200は口径約13㎝の長頸壺で、口頸部の中程以下を欠損している。器面の調整は外面が縦方向のヘラミガキ、内面は横方向のハケである。201は体部を欠損した口径約15㎝の広口壺である。口縁端部をつまみ上げており、頸部外面をハケ調整している。202は体部の大半を欠損した口径約16㎝の広口壺である。器面が磨滅しており、調整は明らかでない。203は絵画土器とみられるもので、土器の器表面にヘラで縦線ののち横線を描いている。屋根の表現かとも考えられるが断定しがたい。同様な先刻のある土器片152が第７層から出土している。204は口径約34㎝の広口壺の口縁部で、垂下した口縁部の外端面に３個一対の円形浮文を施している。口縁部内面をヘラミガキで調整しており、胎土中に角閃石粒を多く含むいわゆる生駒西麓産の土器である。

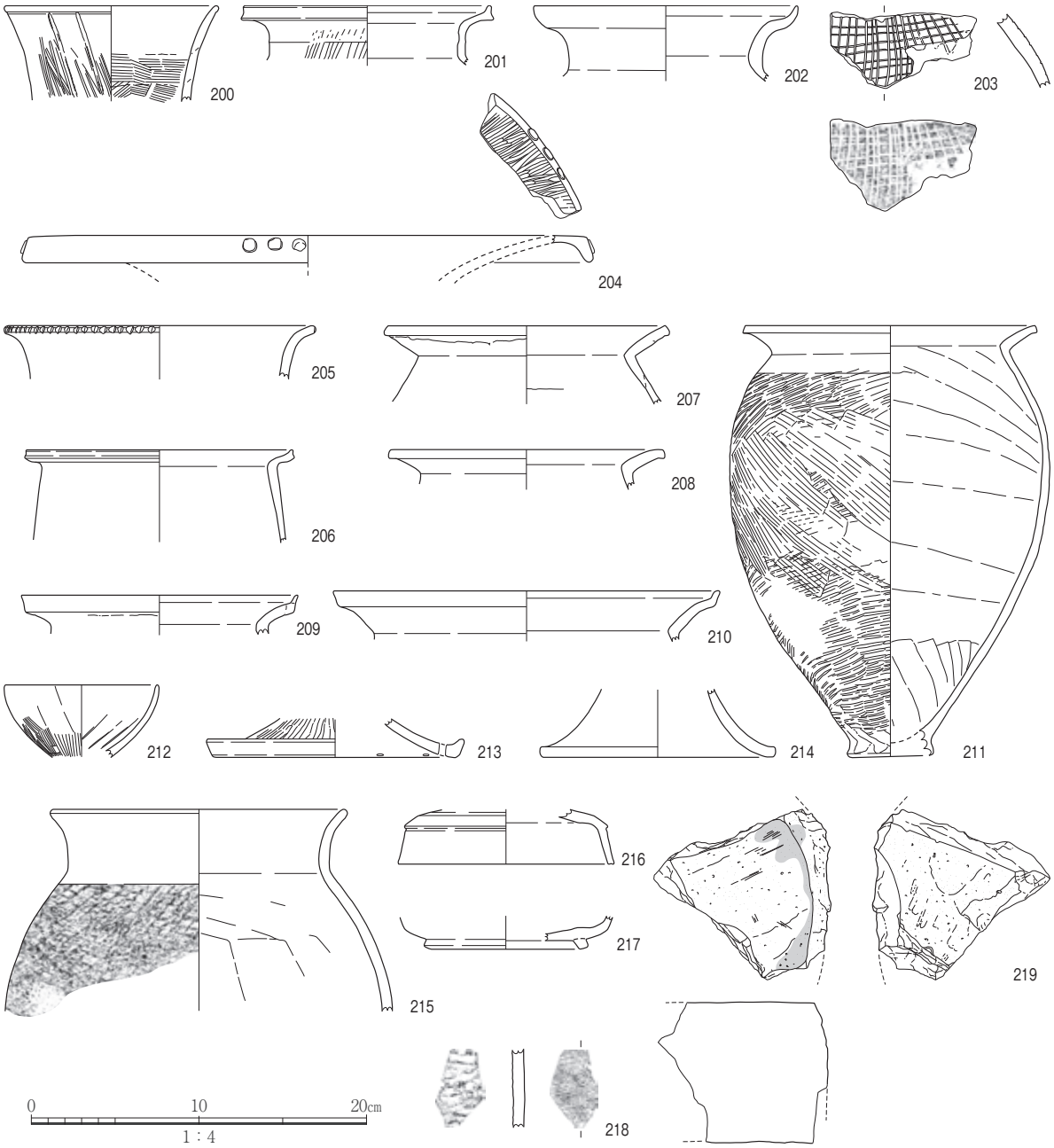


図38　NR601出土遺物

205～211は弥生土器甕である。205の口縁部は頸部から緩やかに開き、同端部にキザミメを施している。206～210は口径約16～32cmの甕で、206は直線的に立つ体部から口縁部が短く開いており、外端面は強いヨコナデにより凹線状をなす。207・208は口縁部が頸部から強く外反する。209・210は口縁部が外反したのちに端部が立つ。211は口径17.5cm、器高約26cmの甕で、口縁部は頸部から短く外反する。体部の外面を３分割成形しており、平行タタキの後、左上がりのハケ調整している。体部の内面は左上がりの連続したナデ調整である。NR601の底付近でSB701に近接したから出土したことから、本来はSB701に伴う土器の可能性がある。

212は弥生土器鉢で、口径約９cmである。器体の内外面の調整は外面が縦方向のハケ、内面は右上がりのナデである。213は弥生土器無頸壺の蓋とみられるものである。器表面を縦方向のヘラミガキ

で調整しており、下端近くに２個一対の紐孔を穿つ。口径約14.5cmある。214は弥生土器高杯の脚裾部である。

以上の遺物のうち、205は弥生時代前期後葉、201・204・206・214は弥生時代中期後葉、200～204・207・208・211は弥生時代後期中～後葉、209・210・212は弥生時代後期後葉に属するものと考えられる。

215は口径17.5cmの韓式系土器甕で、口縁部は頸部からわずかに開きながら立つ。体部の外面を粗い菱形格子タタキで整形しており、内面は左上がりのナデ調整である。色調はにぶい橙色で、胎土中に微細な長石・石英・チャート・雲母粒を含む。軟質焼成されている。

216～218は須恵器である。216は口径12.8cmの須恵器の杯蓋で、天井部を欠損している。TK216型式に属するものであろう。217は須恵器杯Bの底部の細片である。高台は断面形が長方形に近く、底部の外縁からやや内側に貼りつけている。７世紀後半に属するものあろう。218は須恵器の甕あるいは壺の体部片で、外面にはハケメが、内面には当て具痕が見られる。色調は灰色で、焼成は良好である。

219は厚さ8.4cmの砥石の破片である。一面に砥ぎ痕が、他面には二次的な火を受けた痕跡が見られるほか、煤が付着している。

ほかに図化していないがウシなどの動物遺体が出土している。

出土遺物の多くは弥生土器もしくは古墳時代の遺物であるが、図化しえなかった遺物には奈良時代に降る可能性があるものを含む。また、位置的には東隣のNG07－１次調査で検出した奈良時代前～中葉の遺物を含む流路と同一である可能性が高い。

NR602　NR601の西に位置する幅1.4～1.9m、深さ0.1m未満の浅い自然流路である。時期を決するだけの遺物は出土しなかった。本来はNR601と一連であったと推定できる。

NR601・602はこれまでの近隣の調査結果から蛇行しながら大きくは西流していることが判明している。奈良時代前～中葉の遺物を含み、人面墨画土器・動物遺体など祭祀関連の遺物を多く含む流路である。東隣のNG07－１次調査では北北西方向への流れとなっており、埋土は粗粒砂主体であったのに対し、今回の調査地では粗粒砂は東側にのみ分布していたことから、流路の西肩付近に当っていると推定できよう。奈良時代中頃には度重なる洪水などにより埋没していたものと思われる。

（田中）

ｖ）平安時代以降（図39～41、図版11・21）

第4d層上面では水田面を検出した（図39）。畦畔は下幅0.7～1.2m、高さ0.05～0.15mが遺存していた。第4b層の耕作によって畦畔や水田面が失われている部分も多く、東半では畦畔のつながりが明瞭であるのに対し、西半では不明瞭である。

これを覆う作土層である第4c層からは弥生土器・土師器・須恵器・瓦器片が出土した。220～222は水田面を直接覆う水成の砂層から出土した瓦器椀である。221には３箇所に焼成後の穿孔が認められる。細片のため詳細は不明であるが、穿孔が破面に近接することから補修孔の可能性がある。これらは12～13世紀代のものであろう。

出土遺物や近隣の調査成果などから本水田の時期は鎌倉時代と推定される。

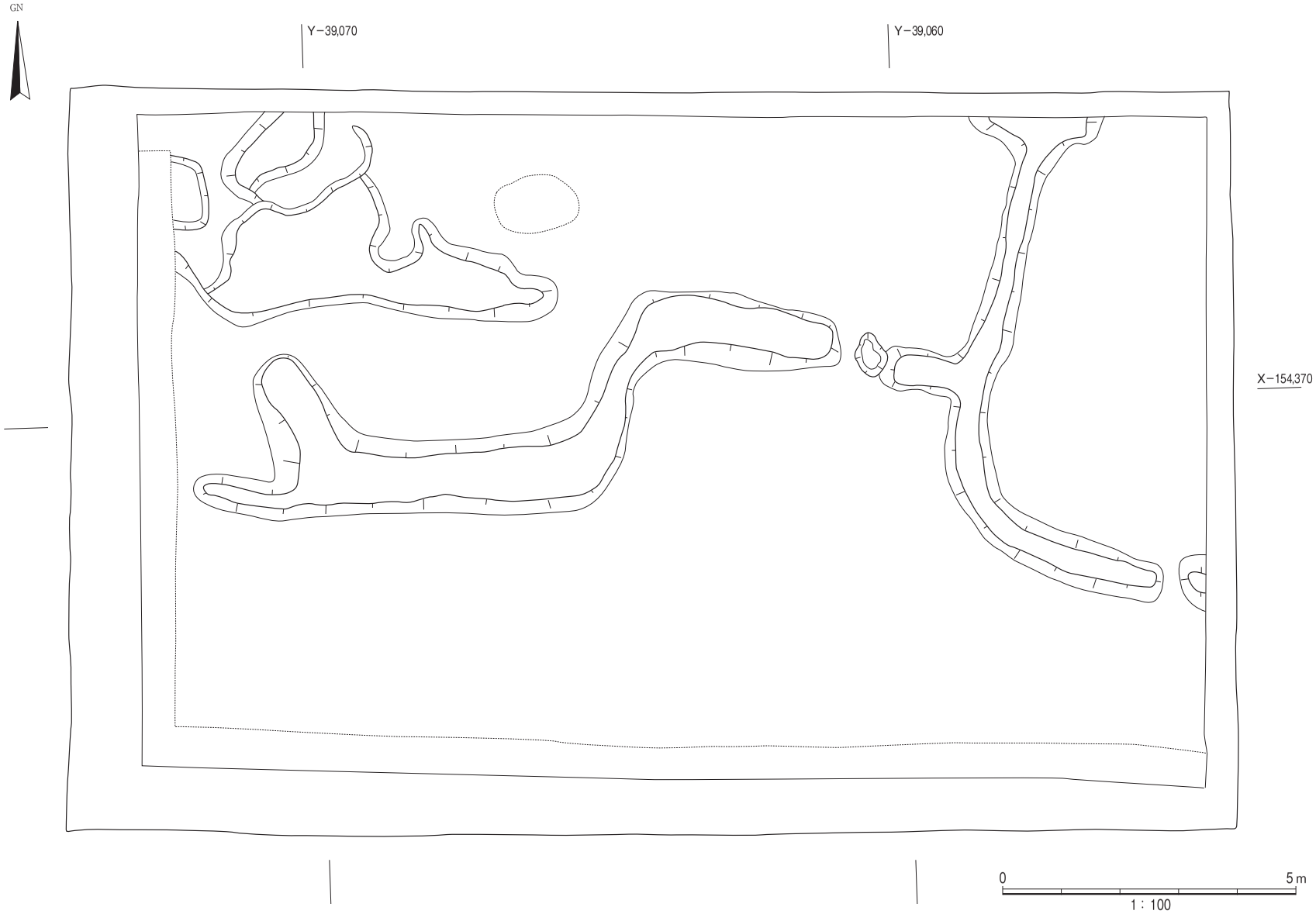


図39　鎌倉時代の遺構平面図

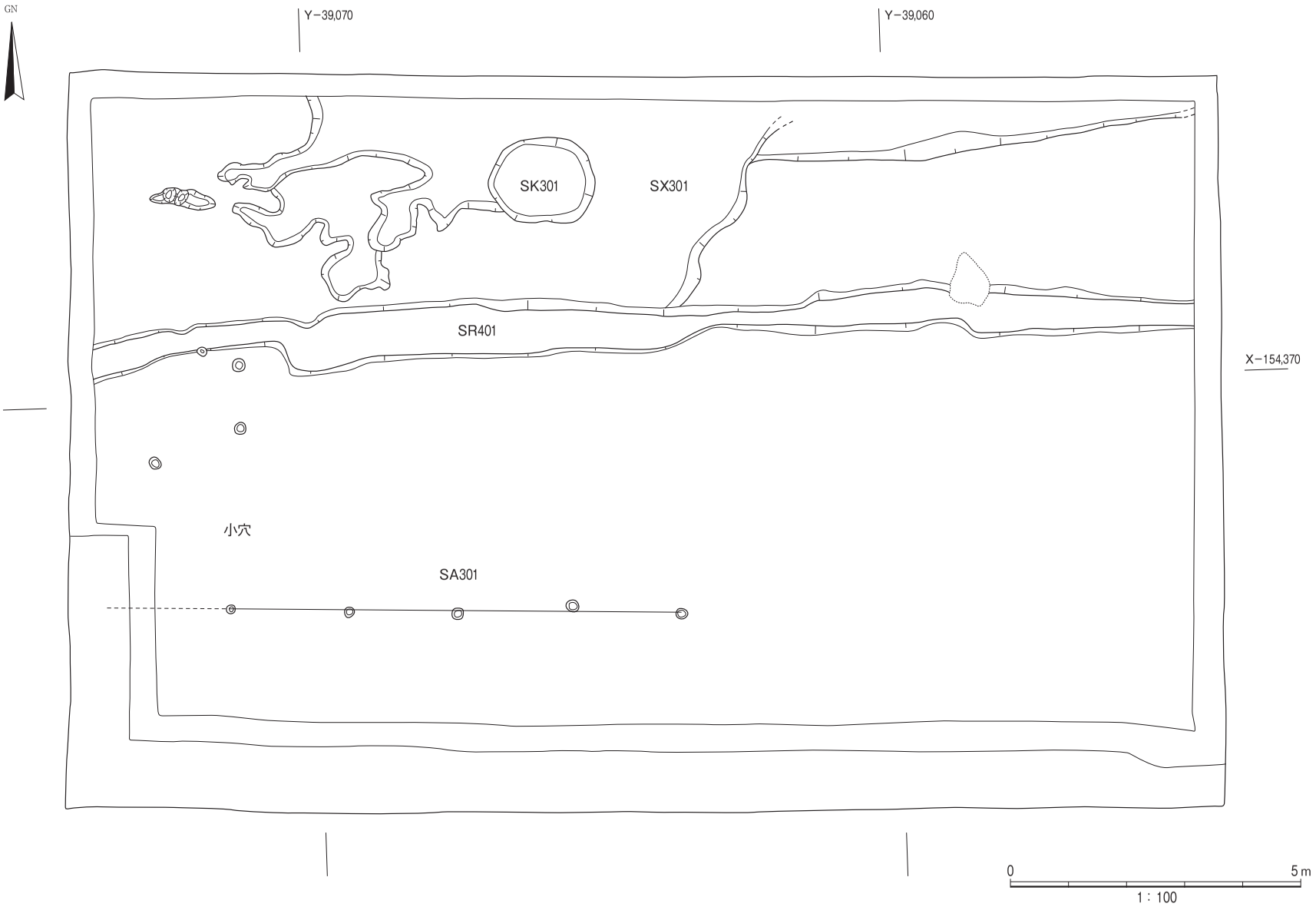


図40　室町時代の遺構平面図

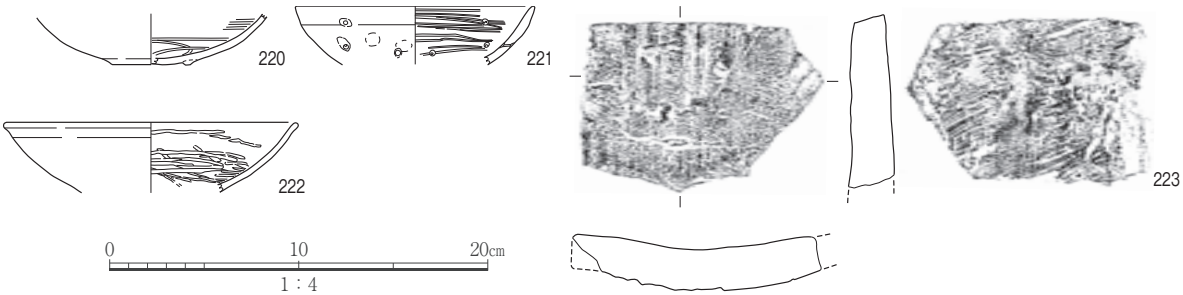


図41　第４層以上の出土遺物
（第4c層：220～222、第２～4a層：223）

第4b層上面では畦畔状の高まりと杭、溝状の落込みを検出した(図40)。本層から平面的な調査を行ったため、より上位の遺構も同一面での検出となっている。

SR401　北側が後述のSX301によって失われているため、正確な規模は不明であるが、幅0.6～0.9m、高さ0.05mの東西方向の畦畔である。これより南では水成層で覆われた水田面が検出された。

SX301　SR401の北辺より北側で検出した不整形な落込みである。検出面からの深さは0.1～0.2mあり、北に向けてさらに下がっている。また、底面が部分的に凹凸が認められる。埋土はシルトの偽礫を多く含む粗粒砂であり、第３層段階の遺構と考えられる。遺構の正確は不明であるが、同様の遺構は東隣で行われたNG07－１次調査でも確認されている[大阪市文化財協会2009a]。遺物は出土しなかったが、室町時代の遺構と考えられる。

SK301　SX301を切る東西1.8m、南北1.4mの平面形が楕円形の土壙である。検出面からの深さは1.0m以上ある。土師器羽釜片が出土した。室町時代の遺構であろう。

小穴　西南部を中心に直径0.2m前後、深さ0.2m未満の小穴を９基検出した。このうち西南部では1.8～2.0m間隔で５基が東西方向に並ぶ(SA301)。埋土から第３層以上に掘込面があると考えられる。

第２～4a層からは弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・瓦などが出土した。いずれも細片が多い。223は須恵質の平瓦片で内外面ともにナデ調整が施されている。

上記のように調査地は平安時代遺構は耕作域として利用されていたといえる。

３)小結

今回の調査では、各時代において土地利用を示す遺構を検出することができた。近隣との成果を合わせると調査地の変遷はおおよそ次の通りとなる。

縄文時代以前については石匙が１点出土したのみであり、詳細は不明であるが、近隣に集落が存在したと推定できる。

弥生時代中～後期では多くの土器とともに、建物・土壙・溝などが検出された。同時期の集落は周辺の調査でも確認されており、調査地周辺が集落域として利用されていたといえる。

古墳時代の遺構は確認されず、遺物も少なかった。調査地の北側に当るNG06－４次調査[大阪市文化財協会2008b]で古墳時代中期の建物跡が検出されている一方で、東隣のNG07－１次調査[大阪市文化財協会2009a]では遺構は希薄であり、耕作域もしくはあまり利用されなかった地域といえるかも

しれない。

飛鳥時代と考えられる遺構としては水田を検出した。自然流路に近いという制約はあるものの、正方位から振れる方位であり、長原地域の条里制の施行を考える上で興味深い資料となるであろう。

奈良時代のものとしては自然流路の一部が検出された。これまでの成果と合わせると、概ね東から西方向に蛇行しながら流れる流路が、調査地東側にて一端北流するようである。

平安時代については重機によって除去したため明らかにできなかったが、NG07－１次調査の結果を参考にすると、第5a層の水成層の上部堆積期～第4d層の作土層までが相当し、流路埋没後の湿地の状態から耕作域へと変化していったと推定できる。

鎌倉時代以降については複数の水田面を検出した。一帯は耕作域として利用されたのであろう。

（平田）

第３節　NG08－４次調査

１)層序(図42、表７、図版12・13)

現地表下５ｍまでの地層を確認した。以下に各層の特徴と長原遺跡東北地区および長原遺跡の基本層序との対比について記す。

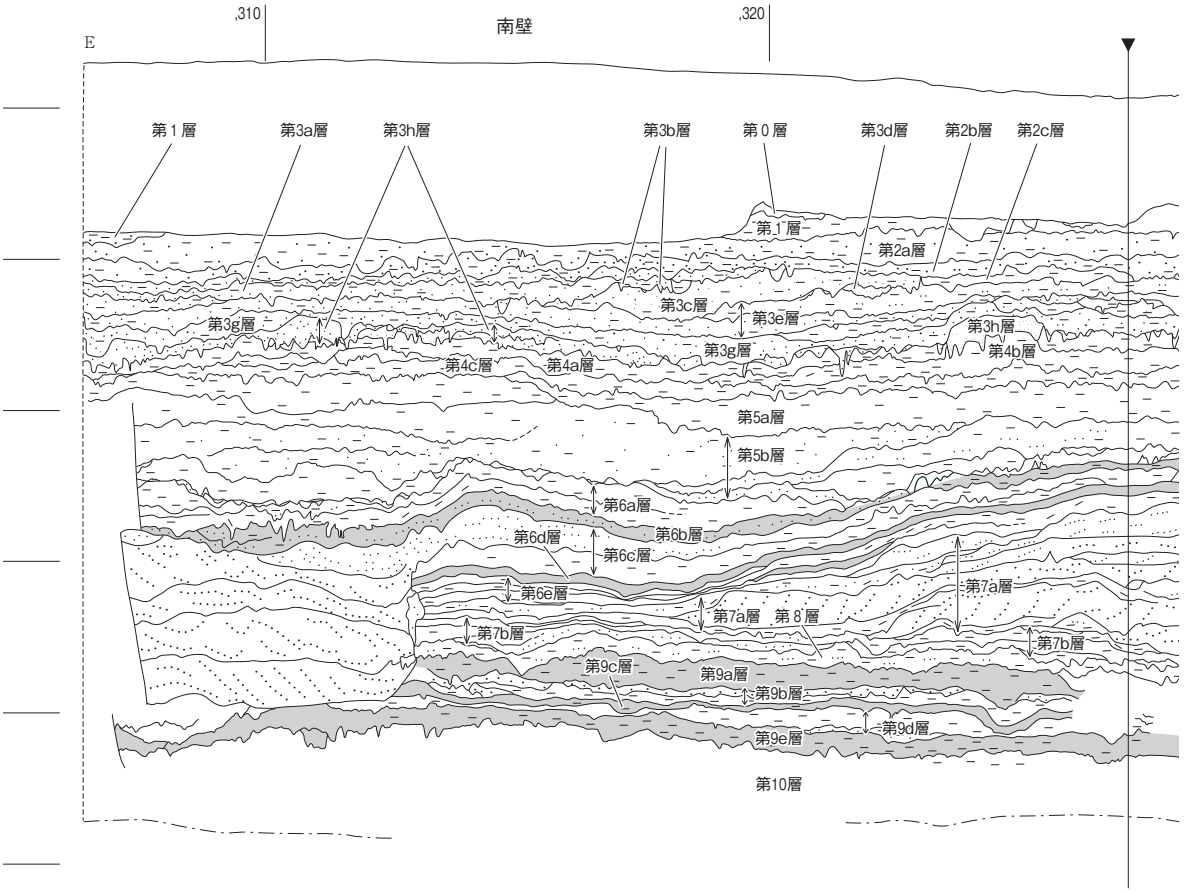
第０層：現代の整地層で、層厚は100～140㎝である。RK０層、NG０層である。

第１層：オリーブ黒色(7.5Y2/1.5)粗粒砂質シルト層で、現代の作土層である。層厚は10～20㎝である。RK１層、NG１層である。

第２層：オリーブ灰色(10Y4/2)中粒～粗粒砂質シルトなどからなる作土層で、層厚は30～40㎝である。第2a ～2c層の３層に細分できる。第2a層はオリーブ黒色(10Y3/2)中粒～粗粒砂層で、層厚は15～25㎝である。第2b層はオリーブ灰色(10Y4/2)中粒～粗粒砂質シルト層で、層厚は10～15㎝である。第2a層に比べるとやや粗粒である。第2c層はオリーブ黒色(10Y3/2)中粒～粗粒砂質シルト層で、層厚は５～10㎝である。第２層からの出土遺物はないが、周辺の調査成果からRK２層、NG２層に相当する。

第３層：作土層と水成層が互層となり、層厚は35～55㎝ある。第3a ～3h層に細分した。第3a層は暗オリーブ色(5Y4/4)中粒～粗粒砂質シルトからなる作土層で、調査区東部にのみ層厚15㎝未満で遺存する。第3b層は黄褐色(2.5Y5/3)粗粒砂からなる水成層で、調査地東部に踏込み埋土として部分的に遺存する。第3c層はオリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒～中粒砂質シルトからなる作土層で、調査地東部に層厚25㎝未満で遺存する。第3d層は黄褐色(2.5Y5/3)粗粒砂からなる水成層で、調査地東部に層厚10㎝以下で部分的に遺存する。第3e層はオリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂質シルト～シルト質粗粒砂からなる作土層で、さらに数枚に細分可能である。調査区全域に分布し、層厚は10～30㎝である。第3f層は灰オリーブ色(7.5Y5/3)中粒～粗粒砂からなる水成層で、調査区西部にのみ層厚５㎝未満で部分的に遺存する。東部では上位の第3d層の耕起によって失われているが、第3d層最下部付近には本層に由来する砂が多く含まれており、削平の程度は少ない。第3g層は灰色(10Y5/1)中粒～粗粒砂質シルトおよび灰オリーブ色(5Y4/2)シルト質中粒～粗粒砂からなる作土層で、層厚10～25㎝で全域に分布する。上面では畦畔が認められた。第3h層は褐色(10YR4/4)シルト～粗粒砂からなる水成層で、東部では層厚10㎝程度で遺存し、中央部および西部では層厚20㎝未満で、第3g層段階の畦畔下などに部分的に遺存する。第３層からは土師器・須恵器のほか瓦器片が出土しており、RK３～4B層、NG３～4B層に相当する。

第４層：シルトが主体となる作土層で第4a ～4c層の３層に細分できる。第4a層は灰オリーブ色(5Y4/2)シルトからなる作土層で、層厚は10㎝程度ある。第4b層は灰色(10Y5/1)シルトからなる作土層で、層厚は10～25㎝である。第4c層は灰色(7.5Y5/1)シルトからなる作土層で、層厚は10㎝程度ある。本層除去後から平面的な調査を開始し、下面で耕作痕跡を検出した。第４層からは土師器・須恵器・黒色土器片が出土し、RK4B ～4C層、NG4B ～4C層に相当する。


,310
南壁
,320
E
第1層
第3a層
第3h層
第3b層
第0層
第3d層
第2b層
第2c層
第1'層
第2a層
第3c層
第3e層
第3g層
第3h層
第4b層
第4c層
第4a層
第5a層
第5b層
第6a層
第6d層
第6b層
第6c層
第6e層
第7a層
第7b層
第8'層
第9c層
第9a層
第9b層
第9d層
第9e層
第10層

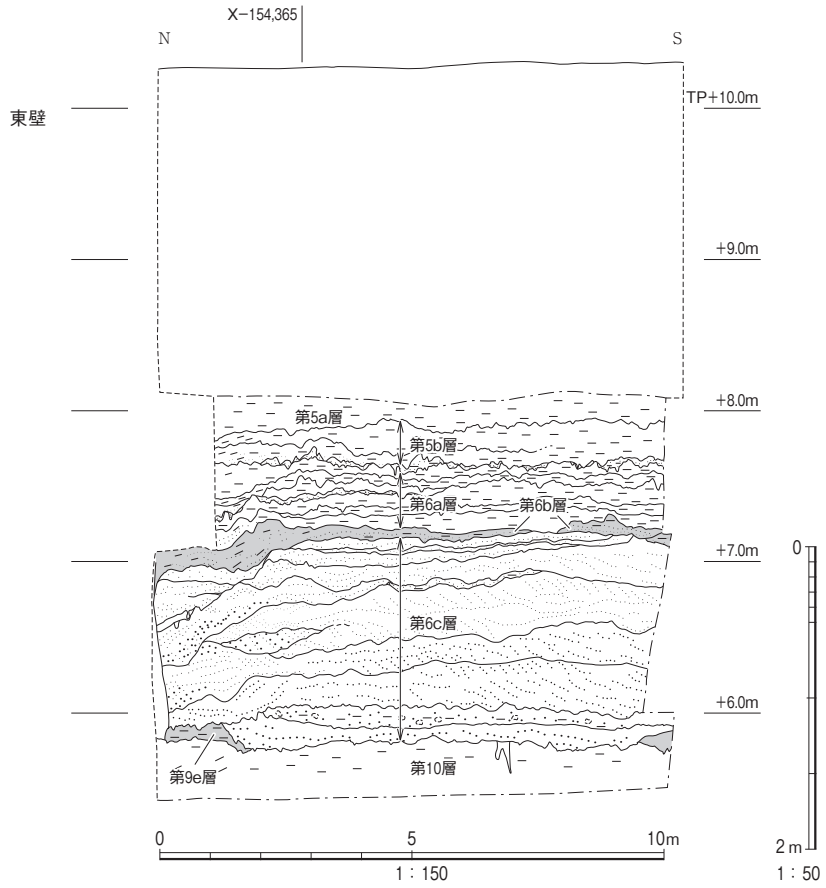
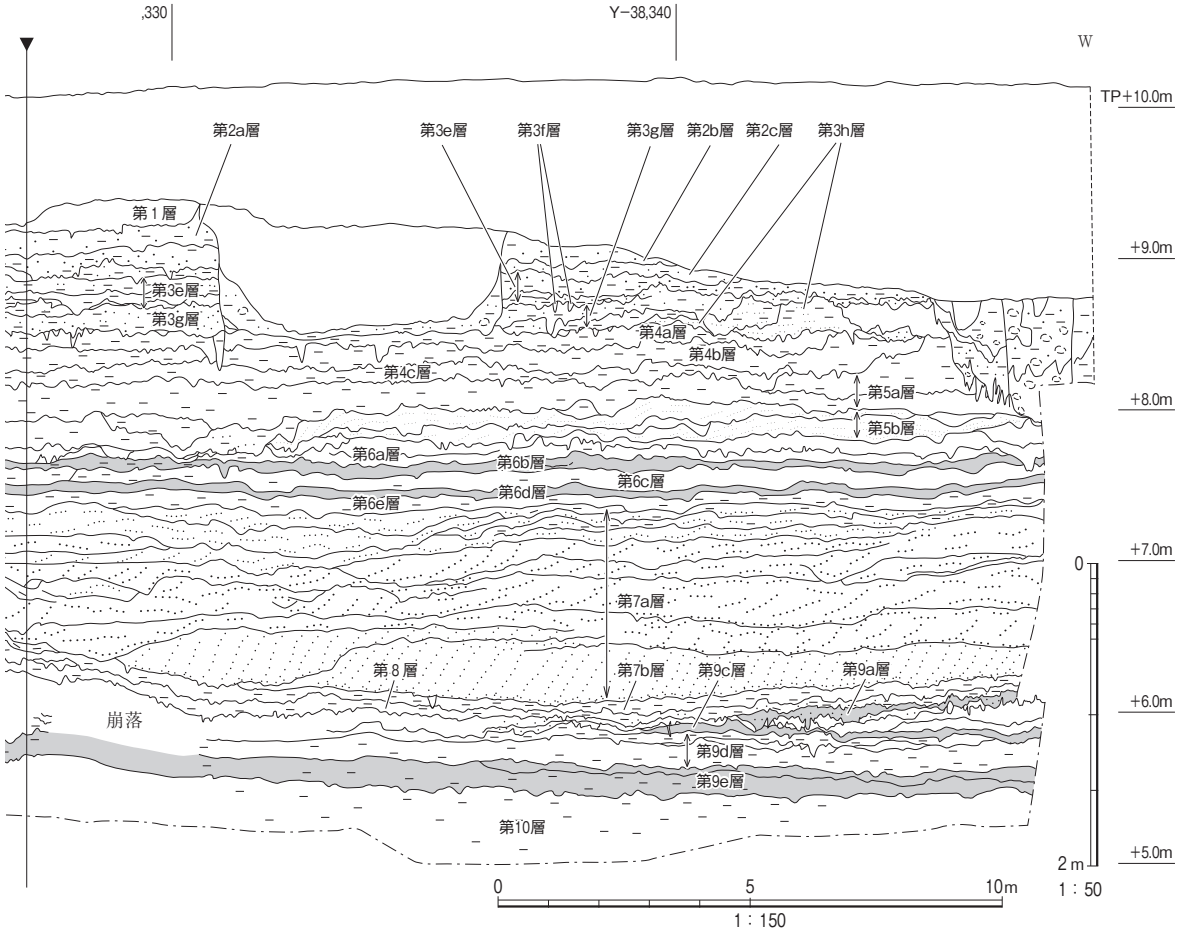

X−154,365
N
S
東壁
TP+10.0m
+9.0m
+8.0m
+7.0m
+6.0m
第5a層
第5b層
第6a層
第6b層
第6c層
第9e層
第10層
0
5
10m
1：150
0
2 m
1：50

図42　地層断面図


,330
Y−38,340
W
TP+10.0m
+9.0m
+8.0m
+7.0m
+6.0m
+5.0m
第2a層
第3e層
第3f層
第3g層
第2b層
第2c層
第3h層
第1層
第3e層
第3g層
第4a層
第4b層
第4c層
第5a層
第5b層
第6a層
第6b層
第6c層
第6d層
第6e層
第7a層
第8層
第7b層
第9c層
第9a層
崩落
第9d層
第9e層
第10層
0
2m
1：50
0
5
10m
1：150

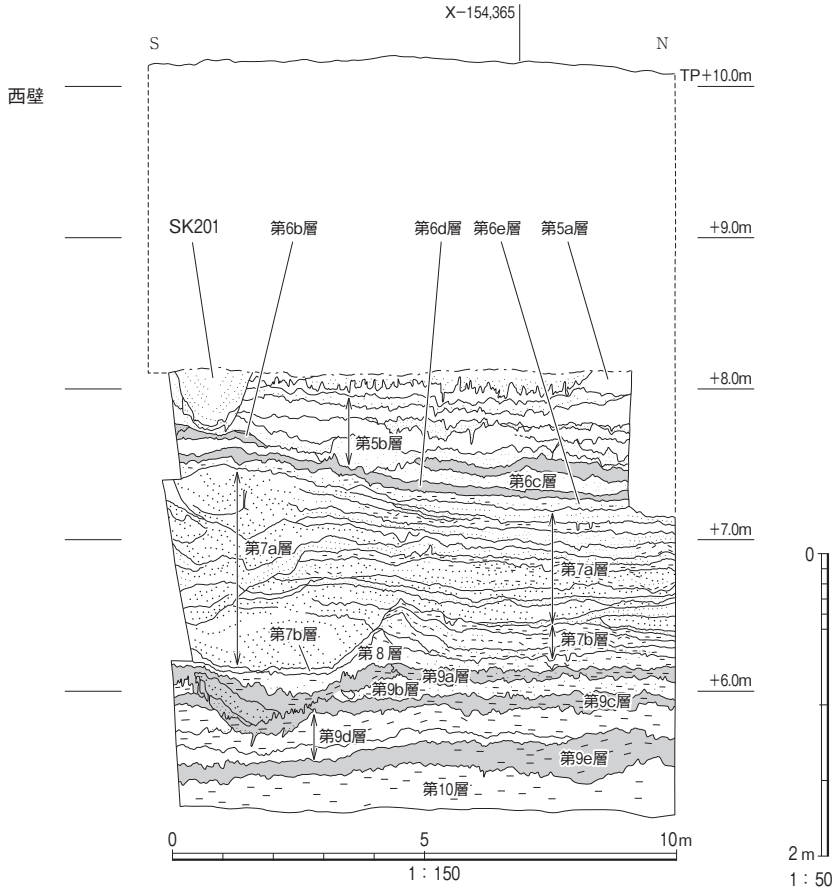

X−154,365
S
N
西壁
TP+10.0m
+9.0m
+8.0m
+7.0m
+6.0m
SK201
第6b層
第6d層
第6e層
第5a層
第5b層
第6c層
第7a層
第7a層
第7b層
第7b層
第8層
第9a層
第9b層
第9c層
第9d層
第9e層
第10層
0
2m
1：50
0
5
10m
1：150

表８　NG08－４次調査層序表

層序		主たる岩相	層厚(cm)	地層の特徴	遺構	おもな遺物	RK層序	NG層序	時代
第０層		現代整地層	100～140				0	0	現代
第１層		オリーブ黒色（7.5Y2/1.5）粗粒砂質シルト	10～20	作土層	←SK201		1	1	
第２層	a	オリーブ黒色（10Y3/2）中粒～粗粒砂	15～25	作土層			2	2	江戸
	b	オリーブ灰色（10Y4/2）中粒～粗粒砂質シルト	10～15	作土層					
	c	オリーブ黒色（10Y3/2）中粒～粗粒砂質シルト	5～10	作土層					
第３層	a	暗オリーブ色（5Y4/4）中粒～粗粒砂質シルト	≦15	作土層		土師器・須恵器・瓦器	3～4B	3～4B	室町～鎌倉
	b	黄褐色（2.5Y5/3）粗粒砂	≦5	水成層	←踏込み				
	c	オリーブ褐色（2.5Y4/3）細粒～中粒砂質シルト	≦25	作土層					
	d	黄褐色（2.5Y5/3）粗粒砂	≦10	水成層					
	e	オリーブ褐色（2.5Y4/3）中粒砂質シルト～シルト質粗粒砂	10～30	作土層					
	f	灰オリーブ色（7.5Y5/3）中粒～粗粒砂	≦5	水成層	←畦畔				
	g	灰色（10Y5/1）中粒～粗粒砂質シルト および灰オリーブ色(5Y4/2)シルト質中粒～粗粒砂	10～25	作土層					
	h	褐色（10YR4/4）シルト～粗粒砂	10～20	水成層					
第４層	a	灰オリーブ色（5Y4/2）シルト	10	作土層		土師器・須恵器・黒色土器	4B～4C	4B～4C	平安
	b	灰色（10Y5/1）シルト	10～25	作土層					
	c	灰色（7.5Y5/1）シルト	10	作土層	↓SX401・SD401～404 ←SD501				
第５層	a	灰色(10Y4/1)～オリーブ黒色(2.5GY6/1)シルト	15～40	水成層(植物擾乱)		黒色土器	4C～6	4C～7A	
	b	オリーブ黒色(10Y3/2)極細粒砂質シルト～細粒砂	15～80	水成層		土師器・須恵器	6	7A	奈良～飛鳥
第６層	a	暗オリーブ灰色（5GY4/1）シルト	5～25	水成層			7A	7B	
	b	炭化物を含む黒色(2.5GY2/1)シルト～中粒砂質シルト	5～15	暗色帯					
	c	暗オリーブ灰色（5GY3/1）シルト 東端部ではオリーブ黄色（5Y6/3）粗粒砂	＞120	水成層	▽NR601 ←NR601	土師器・須恵器			
	d	炭化物を含む暗オリーブ灰色（5GY3/1）シルト	5～10	暗色帯					
	e	暗オリーブ灰色（2.5GY3/1）シルト	5～15	水成層					
第７層	a	黒オリーブ黄色（7.5Y6/3）粗粒砂	10～135	水成層			7B	7Bii	古墳
	b	炭化物を多く含むオリーブ黒色（7.5Y2/2）シルト	5～25	水成層	←SR801～811	土師器			
第８層		オリーブ黒色（7.5Y3/2）シルト	5～10	作土層		土師器	8A	7Biii	
第９層	a	暗オリーブ灰色（10GY3/1）シルト	5～25	暗色帯	↓SD901	土師器	8B	7Biii	
	b	オリーブ黒色（10Y3/1）粗粒砂～シルト	10～25	水成層		土師器	8B	7Biii	
	c	黒色（10Y2/1）シルト	≦10	暗色帯			8C～10B	8A～9B	弥生
	d	暗緑灰色（7.5GY4/1）シルト	5～35	水成層	←NR901・902 ▽SX901～914 ←SX1001				
	e	黒色（7.5Y2/1）シルト	15～20	暗色帯			10C	9C	縄文
第10層		暗オリーブ灰色（2.5GY3/1）シルト～細粒砂	＞70	水成層			11	10・11	

凡例　←上面検出遺構　↓下面検出遺構　▽地層内検出遺構

第５層：シルト～粗粒砂を主体とする水成層で第5a・5b層の２層に細分した。上方に細粒化し、一連の水成層である。第5a層は灰色(10Y4/1) ～オリーブ黒色(2.5GY6/1)シルトからなり、層厚は15～40cmある。植物の根による擾乱が著しく、上位層との境は不明瞭な部分もある。本層の上部からは黒色土器片が出土した。RK4C～６層､NG4C～7A層に対比しうる。第5b層はオリーブ黒色(10Y3/2)極細粒砂質シルト～細粒砂からなり、層厚は15～80cmである。土師器・須恵器片が出土したが時期を決する遺物はない。RK６層、NG7A層に対比できる。

第６層：シルト主体となる水成層であるが、東端部では粗粒な堆積物となる。暗色帯を挟み、第6a～6e層に細分した。第6a層は暗オリーブ灰色(5GY4/1)シルトからなり、層厚は５～25cmある。第6b層は炭化物を含む黒色(2.5GY2/1)シルト～中粒砂質シルトで暗色帯を構成する。層厚は５～15cmである。東端部の後述のNR601の上部に当る部分では、炭酸第一鉄の団塊を多く含み、また、地震による変形が認められた。土師器・須恵器を含む。第6c層は暗オリーブ灰色(5GY3/1)シルトを主体とするが、東端ではオリーブ黄色(5Y6/3)粗粒砂など粗粒な堆積物であり、NR601の埋土となる。土師器・須恵器片が出土した。第6d層は炭化物を含む暗オリーブ灰色(5GY3/1)シルトで暗色帯を構成する。層厚は５～10cmである。第6e層は暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)シルトで層厚は５～15cmある。厚い部分では部分的に暗色帯を挟む。第６層はRK7A層、NG7B層に相当する。

第７層：水成層で第7a・7b層の２層に細分できる。第7a層はオリーブ黄色(7.5Y6/3)粗粒砂など

粗粒な堆積物からなり、ラミナが顕著に認められる。南西部で厚く北西部で薄く分布し、層厚は10～135cmある。第7b層は炭化物を多く含むオリーブ黒色(7.5Y2/2)シルトなど細粒な堆積物からなり、第８層の水田面を覆っている。第８層水田面の東西方向の畦畔より北側では層厚は25cmと厚く、畦畔より南側では層厚５～10cmと薄い。土師器片が出土した。第７層はRK7B層、NG7Bii層に相当する。

第８層：オリーブ黒色(7.5Y3/2)シルトからなる作土層で、層厚は５～10cmである。上面では畦畔が検出された。古墳時代前期、布留式期の古式土師器片が出土した。RK8A層、NG7Biii層に相当する。

第９層：水成層と暗色帯との互層からなる。第9a～9e層の５層に細分した。第9a層は暗オリーブ灰色(10GY3/1)シルトで暗色帯を構成する。層厚は５～25cmである。南部では本層中で東西方向の溝SD901を検出した。第9b層はオリーブ黒色(10Y3/1)粗粒砂～シルトからなる水成層で層厚は10～25cmである。遺物は出土しなかった。第9c層は黒色(10Y2/1)シルトで暗色帯を構成する。層厚は10cm未満である。遺物は出土しなかった。第9d層は暗緑灰色(7.5GY4/1)シルトからなる水成層で層厚は５～35cmある。遺物は出土しなかった。第9e層は黒色(7.5Y2/1)シルトで暗色帯を構成する。層厚は15～20cmである。本層中で倒木痕を検出した。第９層は第9a層が出土遺物からRK8B層、NG7'Biii層に相当する。また、東隣のNG99－19次調査で第9e層から縄文時代後期の土器が出土したことからRK10C、NG9C層に相当する。

第10層：暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)シルト～細粒砂からなる水成層で層厚は70cm以上である。本層は部分的な掘削で確認したのみであるが、流路内堆積物であり、NG99－19次調査では厚さ300cm程度ある。RK11層、NG10・11層に相当する。

２)遺構と遺物

ⅰ)縄文～弥生時代(図43～45、図版14)

第9c層以下が相当する。今回の調査では時期を決する遺物は出土しなかったが、隣接するNG99－19次調査[大阪市文化財協会2002a]の成果から、縄文～弥生時代の事象と判断できるものとして以下のようなものがある。

第10層上面では、地形は東で高く西に向かって0.5mほど緩やかに下がっている。途中には深さ0.1m程度の北東から南西方向の窪みSX1001がある。第10層を覆う第9e層は東では擾乱が認められたのに対し、西では自然な堆積状態であったことから、西半は水中であった可能性がある。また、東半では第9e層中からの土壙状の落込みを多数検出した。土壙状の落込みの多くは平面形が不整形であることや底部に凹凸が著しいこと、埋土に第10層に由来する細粒砂質シルトの偽礫を多く含むことから、遺構ではなく倒木痕もしくは木根痕と推定できる。いずれも遺物は出土しなかった。遺構ではないが当時の環境の一端を示すものとして記す。

SX901　直径0.9mの平面形が円形で、深さは0.1mである。底面は凹凸が著しい。

SX902　直径0.6mの平面形が円形で、深さは0.1mである。

SX903　直径0.6mの平面形が円形で、深さは0.1m未満で、東側が深くなる。

SX904　直径0.8mの平面形が円形で、深さは0.1m未満である。底は凹凸が著しい。

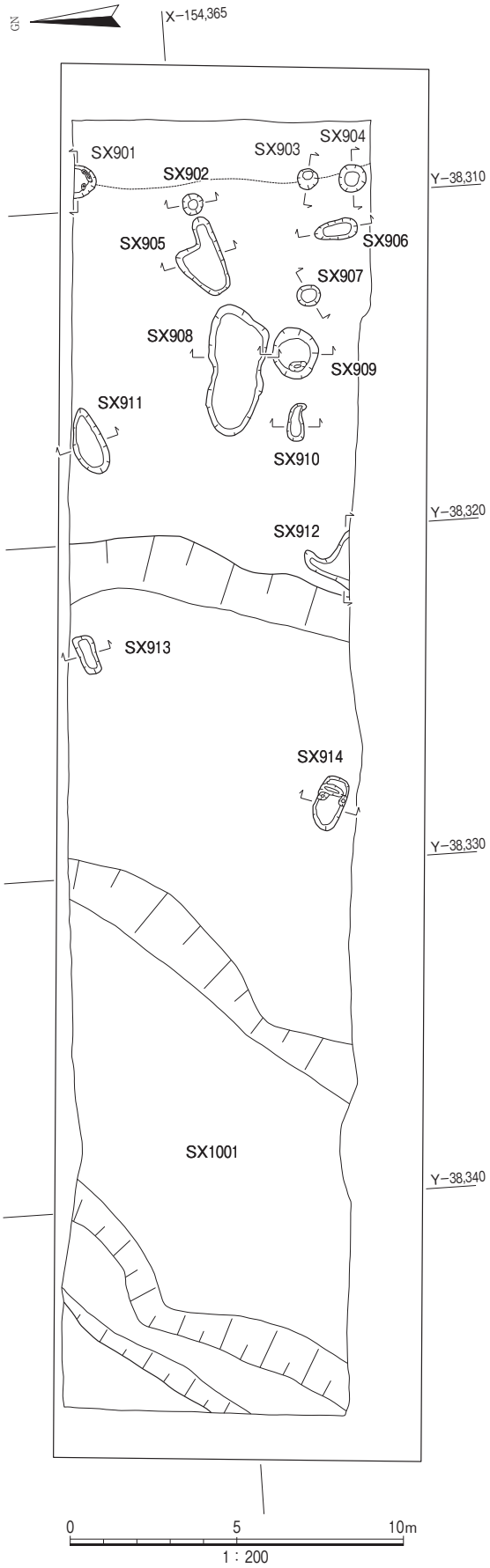


図43　縄文時代の遺構平面図（1）

SX905　最大長2.3mの不整形な形状で、深さは0.1m未満である。埋土は第10層の偽礫を多く含む。

SX906　長軸長1.3mの平面形が楕円形で、深さは0.1m未満である。

SX907　直径0.5mの平面形が円形で、深さは0.1m未満である。

SX908　長さ4.0m、幅1.4mの不整形な形状で、深さは0.1m未満である。底は凹凸が著しい。

SX909　直径0.6mの平面形が円形で、深さは0.1m未満である。

SX910　最大長1.2mの不整形な形状で、深さは0.1m未満である。

SX911　長さ2.0m、幅0.8mの平面形が楕円形で、深さは0.1m未満である。

SX912　最大長1.8mの不整形な形状で、深さは0.1mである。底は凹凸が著しい。

SX913　長さ1.2m、幅0.5mの平面形が隅丸方形で、深さは0.1mである。

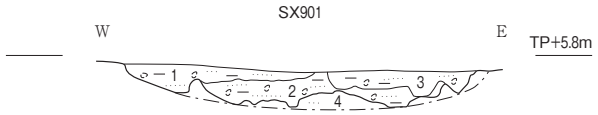
SX914　長さ1.6m、幅0.8mの平面形が隅丸方形で、深さは0.2mである。底は凹凸が著しい。

第9e層上面では第9d層を埋土とする小流路状の窪みNR901・902のほか倒木痕もしくは木根痕と考えられる不整形な窪みを確認した。いずれも遺物は出土していない。

NR901　中央部で検出した幅4.0m、深さ0.1～0.2mの小流路状の窪みで、北部では２条に分かれる。方向は南南西から北北東である。

NR902　西端部で検出した幅7.0～10.0m、深さ0.1mの小流路状の窪みである。方向は南西から北東である。

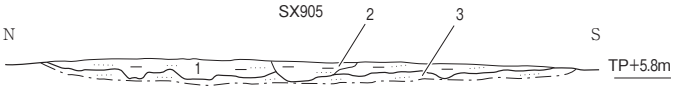
隣接するNG99－19次調査では第9c～9e層において縄文時代後～晩期の土器・石器が見つかっている。これらには集中する部分もあり、集落にほど近い地点であったと考えられている。一方、今回の調査地では遺物は出土しておらず、NG99－



1：第10層偽礫含むオリーブ黒色（10Y3/1）シルト質細粒砂
2：第10層小偽礫多量に含むオリーブ黒色（10Y3/1）シルト質細粒砂
3：第10層偽礫含むオリーブ黒色（10Y3/1）シルト質細粒砂
4：暗緑灰色（7.5GY4/1）細粒砂（第10層）

1：第10層小偽礫下方に多く含むオリーブ黒色（10Y3/1）細粒砂質シルト～シルト質細粒砂
2：暗緑灰色（7.5GY4/1）シルト質細粒砂（第10層）

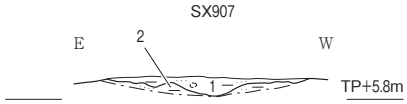
1：第10層小偽礫含むオリーブ黒色（10Y3/1）細粒砂質シルト
2：暗緑灰色（7.5GY4/1）シルト質細粒砂（第10層）



1：第10層小偽礫多量に含むオリーブ黒色（10Y3/1）シルト質細粒砂
2：第10層小偽礫含むオリーブ黒色（10Y3/1）細粒砂質シルト
3：暗緑灰色（7.5GY4/1）細粒砂質シルト（第10層）

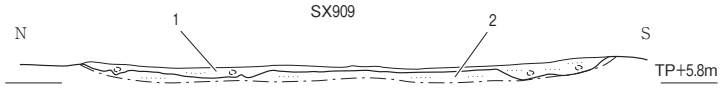
1：第10層小偽礫多量に含むオリーブ黒色（10Y3/1）細粒砂質シルト
2：暗緑灰色（7.5GY4/1）シルト質細粒砂（第10層）

1：第10層小偽礫含むオリーブ黒色（10Y3/1）細粒砂質シルト
2：第10層小偽礫多量に含むオリーブ黒色（10Y3/1）細粒砂質シルト
3：暗緑灰色（7.5GY4/1）シルト質細粒砂（第10層）

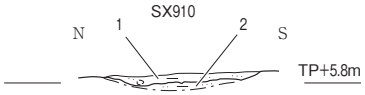


1：第10層小偽礫含むオリーブ黒色（10Y3/1）細粒砂質シルト
2：暗緑灰色（7.5GY4/1）細粒砂質シルト（第10層）

1：第10層小偽礫多量に含むオリーブ黒色（10Y3/1）細粒砂質シルト
2：暗緑灰色（7.5GY4/1）細粒砂質シルト（第10層）

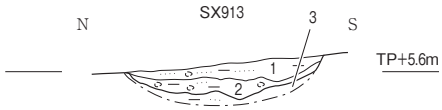


1：第10層小偽礫多量に含むオリーブ黒色（10Y3/1）細粒砂質シルト
2：暗緑灰色（7.5GY4/1）細粒砂質シルト（第10層）



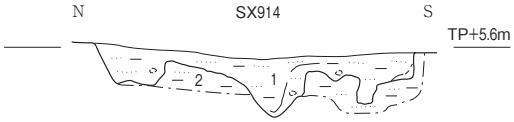
1：第10層小偽礫含むオリーブ黒色（10Y3/1）細粒砂質シルト
2：暗緑灰色（7.5GY4/1）細粒砂質シルト（第10層）

1：第10層小偽礫多量に含むオリーブ黒色（10Y3/1）シルト質細粒砂
2：暗緑灰色（7.5GY4/1）細粒砂質シルト（第10層）



1：第10層小偽礫含むオリーブ黒色（10Y3/1）細粒砂質シルト～シルト
2：第10層多量に含むオリーブ黒色（10Y3/1）細粒砂質シルト
3：暗緑灰色（7.5GY4/1）細粒砂質シルト（第10層）

1：第10層小偽礫含むオリーブ黒色（10Y3/1）細粒砂質シルト
2：暗緑灰色（7.5GY4/1）細粒砂質シルト（第10層）



1：第10層小偽礫含むオリーブ黒色（10Y3/1）シルト～細粒砂質シルト
2：暗緑灰色（7.5GY4/1）細粒砂質シルト（第10層）

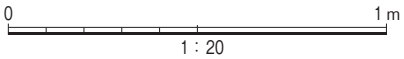


図44　縄文時代の遺構断面図

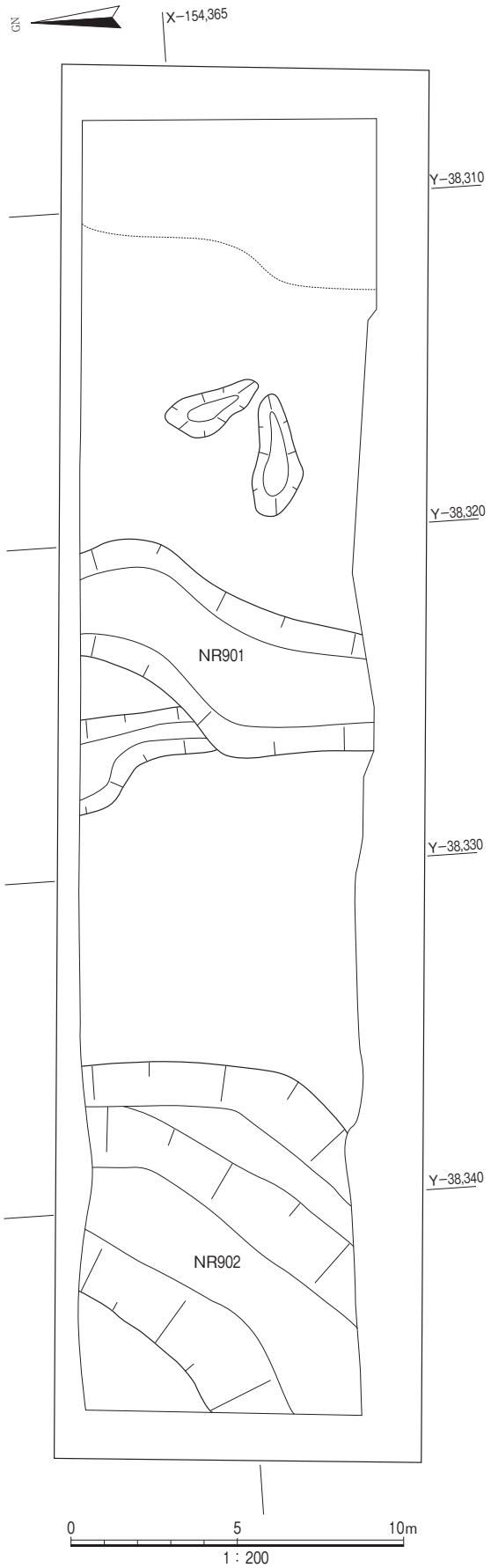


図45　縄文時代の遺構平面図（２）

19次調査に比べて、標高が低く、さらに西に下がる地形となっていること、当時の地上であることを示すと推定される倒木痕・木根痕が東部にのみ認められることから、谷の斜面に当っており、居住には不向きな場所であったと推定できる。

弥生時代にあっても、地層の状況から同様な環境であったと考えられるが、第９層の堆積につれて徐々に安定した環境になったと推測される。なお、今回の調査地では遺構が検出されなかったが、NG99－19次調査では弥生時代後期の水田が確認されている。

ⅱ）古墳時代（図46～50、原色図版、図版15・16・22）

第9b層からは弥生土器224、土師器225が出土した（図49）。224は弥生土器広口壺で、口縁部外面には１条の沈線と矢羽根状のキザミメが施されている。弥生時代前期後半のものであろう。225は土師器甕で口縁端部は内面に肥厚する。布留式期のものである。

第9a層下面では調査地西部にて東西方向の溝SD901を検出した。

SD901（図46）　ごく一部のみの検出であるが、調査地北壁断面の観察から幅2.8m、深さ0.3mの溝と判断できる。埋土は下部が第9b層由来のシルト偽礫を主体とする加工時形成層で、底面には凹凸が見られる。中部は粗粒砂を主体とする自然堆積層、上部が偽礫を含むシルトで、周囲の土が崩落しながら徐々に堆積したものである。遺物は出土しなかった。

第9a層からは土師器甕226が出土した（図49）。体部外面はハケ調整、内面はケズリ調整である。布留式期のものである。

古墳時代前期のものとして第８層上面で水田を検出した（図47・49、原色図版、図版15）。東端は第６層内の流路によって失われているが遺存状況

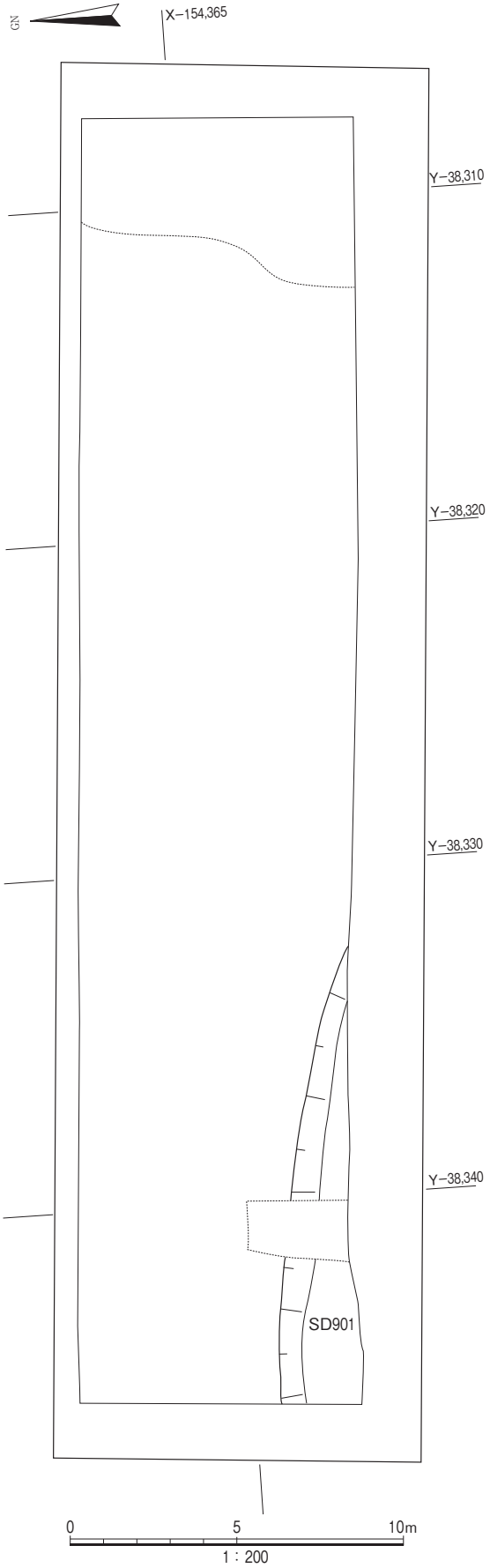


図46　古墳時代前期の遺構平面図（１）

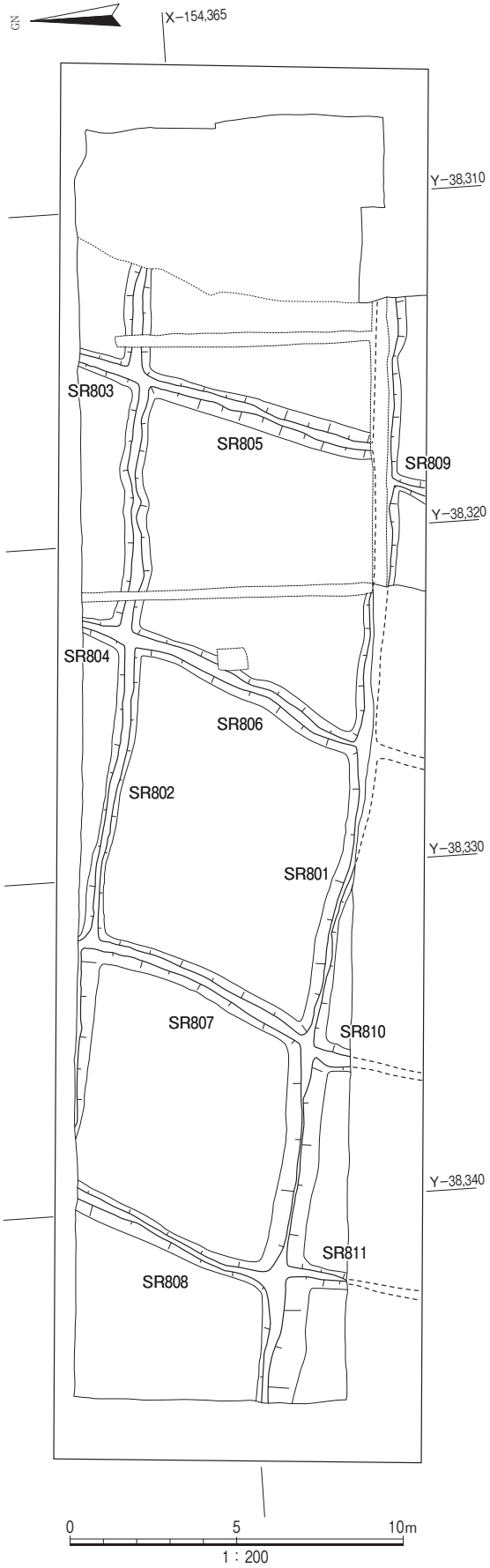


図47　古墳時代前期の遺構平面図（２）

は良好である。一部検出できなかった畦畔もあるが、畦畔にはSR801～811があり、水田としては13筆分を確認した。各水田は整然と区画され、東西方向のSR801・802によって区画されたあと、南北方向の各畦畔によって細分されていたことがわかる。１筆の面積は全体のわかるものでは41～55㎡である。地形的にはSR801の南北で標高差があり、0.1m北側が高くなっている。東西方向では西に向かって緩やかに低くなっている。畦畔には水口などの痕跡は確認できなかった。

SR801　東西方向の畦畔で、下幅0.7～1.3m、高さ0.2～0.3mと検出した畦畔の中ではもっとも規模が大きい。SR801を境として南北での水田面の標高が大きく異なっている。

SR802　東西方向の畦畔で、下幅0.5～0.8m、高さはもっとも高い部分で0.05mである。

SR803～808　SR801より北側に位置する南北方向の畦畔で、下幅0.8m未満、高さ0.03m未満と低く、検出が困難なものもあった。畦畔の間隔は7.5～8.5mである。

SR809～811　SR801より南側に位置する南北方向の畦畔で、下幅0.3～0.5m、高さ0.03m未満と低い。SR809とSR810との間にも本来、畦畔が存在したと思われるが、検出することはできなかった。

この水田はNG99－19次調査にも連続して確認されている。

作土層である第８層からは土師器227・228が出土した(図49)。ともに甕口縁部で227は口縁端部をつまみ上げ、228は内面に肥厚する。227は庄内式期、228は布留式期のものである。

これらのことから第８層上面の水田の時期は古墳時代前期に位置づけられる。

水田面を覆う第7b層からは多くの木製遺物が出土した。多くは流木であったが、239は槽である(図50)。刳り物として製作されている。平面形は長方形で、側面は面をもつ。一部を欠損するが平坦な底部には低い長方形の脚が削り出されている。長軸方向の１箇所には穿孔が施されている。材はクスノキ属である。

また、第7b層上部からは土師器229・韓式系土器230・231が出土した(図49)。229は甑で、内外面ともにハケ調整が施されている。230・231は軟質の韓式系土器甕で、同一個体の可能性がある。外面は格子タタキ、内面はナデ調整である。

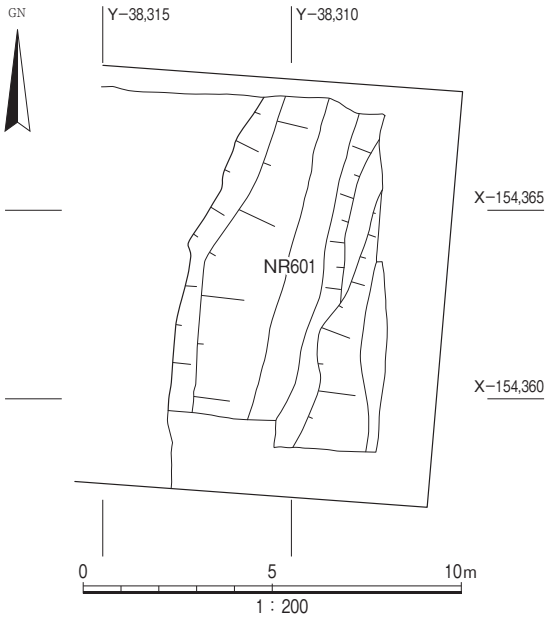


図48　古墳時代中期の遺構平面図

第6d層からの出土遺物は少なかった。土師器甕232が出土した(図49)。外面はハケ調整、内面はナデ調整である。

第6c層内では調査区東端部で自然流路NR601を検出した。

NR601(図48・49、図版16・22)　多くが調査区外のため規模は不明であるが、幅6.5m以上、深さは1.2m以上ある。第9e層までを削込んでおり、埋土は最下部付近に第9e層のシルトの偽礫を含むほかは粗粒砂が主体であり、ラミナが顕著に認められた。西肩には急激な流れによるオーバーハングが認められる。流れの方向は南南西から北北東で

ある。

NR601からは弥生土器・土師器・須恵器・韓式系土器が出土した。233は土師器二重口縁壺で、口縁部外面には２段の櫛描波状文が施されている。庄内式期のものであろう。磨滅しており、上流からの混入であろう。234は須恵器壺で、体部最大径付近に２条の沈線間に櫛描波状文が施されている。235は軟質の韓式系土器甕で、外面は格子タタキ、内面はナデ調整である。

これらの出土遺物からNR601は古墳時代中期に位置づけられる。

また、第6b層のうちNR601の窪みに堆積した部分からは須恵器杯蓋236が出土した。TK10型式のものである。

上記のように調査地は厚い第10層の堆積の後、第９層の堆積につれて次第に安定し、古墳時代前期には水田耕作の場として利用されている。しかしながら、再び不安定な環境へと変化し、第7b層の段階には水漬きの状態となる。さらに古墳時代中期には1.2mをも越える大規模な氾濫堆積層によって覆われることとなる。

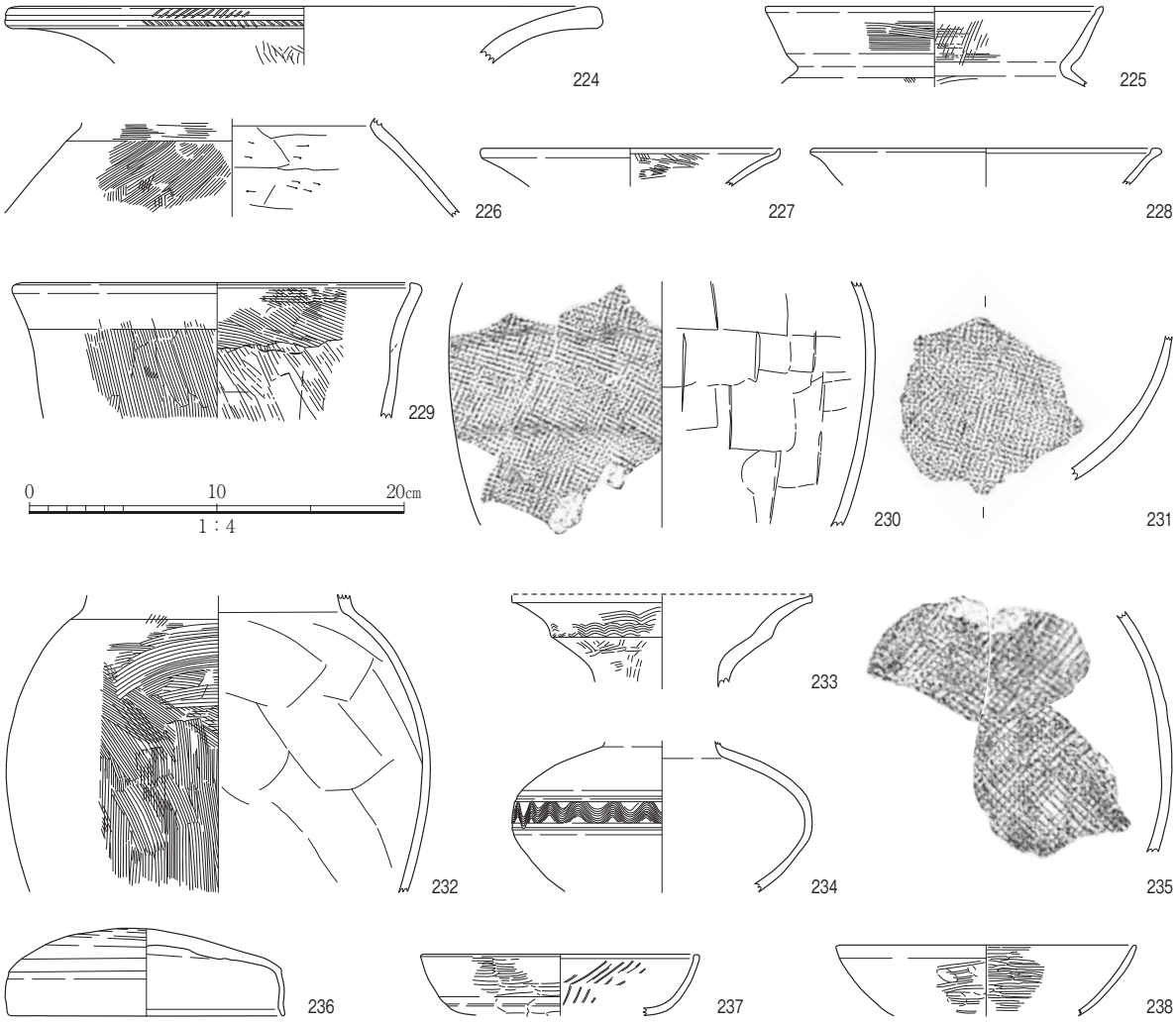


図49　出土遺物

第9b層(224・225)、第9b層(226)、第８層(227・228)、第7b層(229～231)、第6d層(232)、NR601(233～235)、第6b層(236)、第５層(237)、小溝群(238)

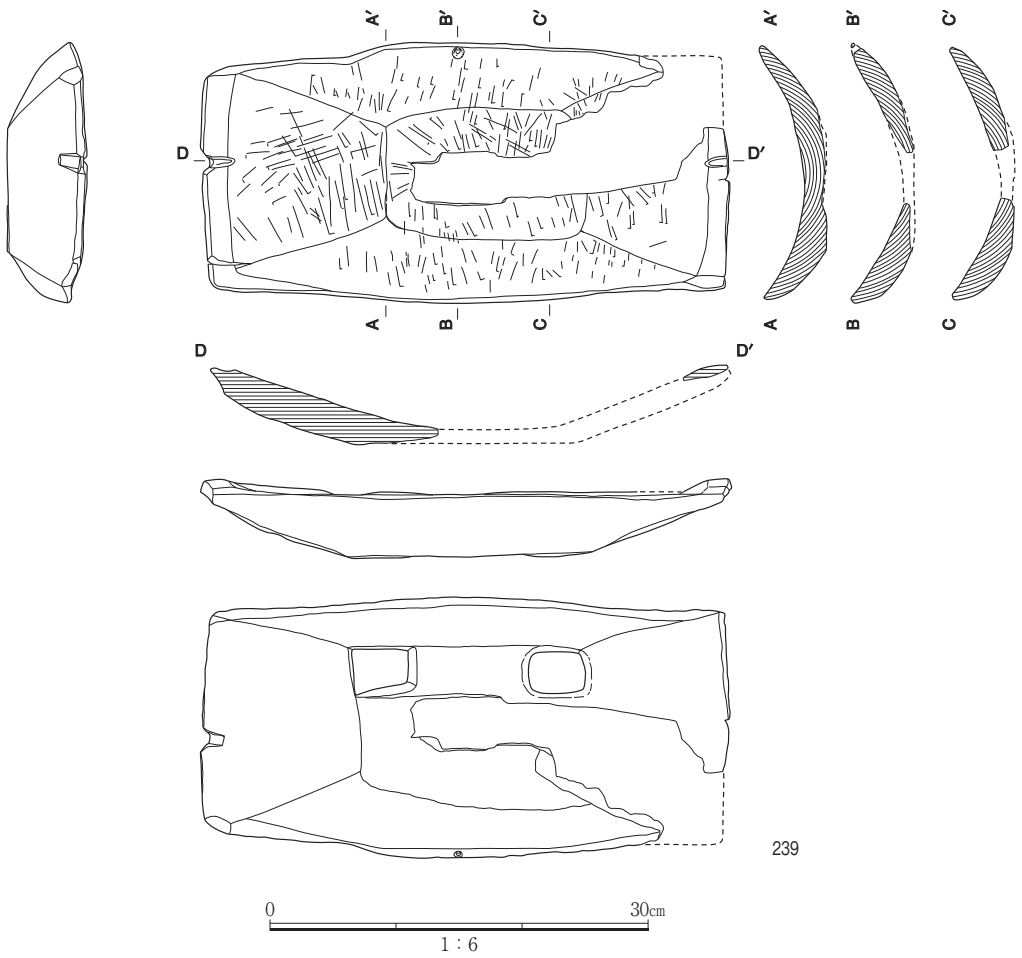


図50　第7b層出土木製品

ⅲ)平安時代以降の遺構と遺物(図51～53、図版17・22)

第６層に続く第５層の段階は堆積物が細粒化し、第5a層の段階には植物の根による擾乱が認められることから、調査地は湿地の環境に移行したと推測される。近隣の調査成果からは概ね飛鳥～奈良時代に相当するが、本調査地では平安時代まで下る遺物も出土しており、遅くまで不安定な環境であったといえる。

第５層からは土師器・須恵器・黒色土器が出土したが図化しうるものは少ない。237は土師器杯である。平城宮土器Ⅰ～Ⅱのものである。

第4c層下面・５層上面では溝を主体とする多くの遺構を検出した。ただし、第４層除去後から調査を開始したため、より上位に掘込み面をもつ遺構も同一面で検出している。ここでは出土遺物や埋土より分類した。

第５層上面の遺構としては、溝SD501がある。埋土が他の小溝群とは異なっており、切合い関係からももっとも古いことから小溝群に遡る本層の遺構とした。SD501を除いては同時期と考えられる遺構は検出されないことから、第4c層の耕作によって失われたと考えられる。

SD501　調査区西部で検出した溝である。屈曲しており、本来は方形に巡る溝であった可能性がある。溝間の東西方向の距離は5.5mである。幅0.3～0.4m、深さ0.1m未満で、埋土は暗緑灰色(2.5Y4/1)

シルトである。遺物は出土しなかったが、第５層および後述の小溝群の年代観から平安時代に位置づけられる。

第4c層下面の遺構には、西で検出した高まりSX401のほか小溝群がある。

SX401　西端で検出した。東側に比べ西側が一段高くなる。第５層が第4c層の耕作の際に削り残されてできたものである。大畦畔状の高まりであるのか、段差であるのかは不明である。幅は3.5m以上で比高差は0.2～0.4mある。

小溝群　全域で南北あるいは東西方向の溝を多数検出した。幅0.5～1.0mのやや幅広の南北方向の溝間に幅0.1～0.3mの幅の狭い溝が分布する傾向がある。埋土はいずれも作土層である第4c層の灰オリーブ色(7.5Y4/2)シルトであり、耕作に係わる溝と考えられる。以下おもなものについて記す。

SD401　中央やや東に位置する南北方向の溝である。幅0.6～0.7mで深さは0.1mである。

SD402　中央部に位置する南北方向の溝である。幅0.4mで深さは0.1m未満である。

SD403　中央やや西に位置する南北方向の溝である。幅0.6～0.8mで深さは0.1m未満である。

SD404　西に位置する南北方向の溝である。幅0.6～1.1mで深さは0.1m未満である。これより２m西側に前述の段SX401があり、この間には小溝は検出されなかった。

これらの溝群からは土師器・須恵器・黒色土器が出土したが少量である。238は内黒の黒色土器椀で平安時代Ⅲ期に位置づけられる。このことから小溝群の時期は平安時代であろう。

また、第５層上面で検出したが、第２層より上位に掘込み面があるものとして、調査地西端で土壙を検出した。

SK101　西・南が調査区外に続くため正確な形状は不明であるが、南北10.0m以上、東西2.8m以

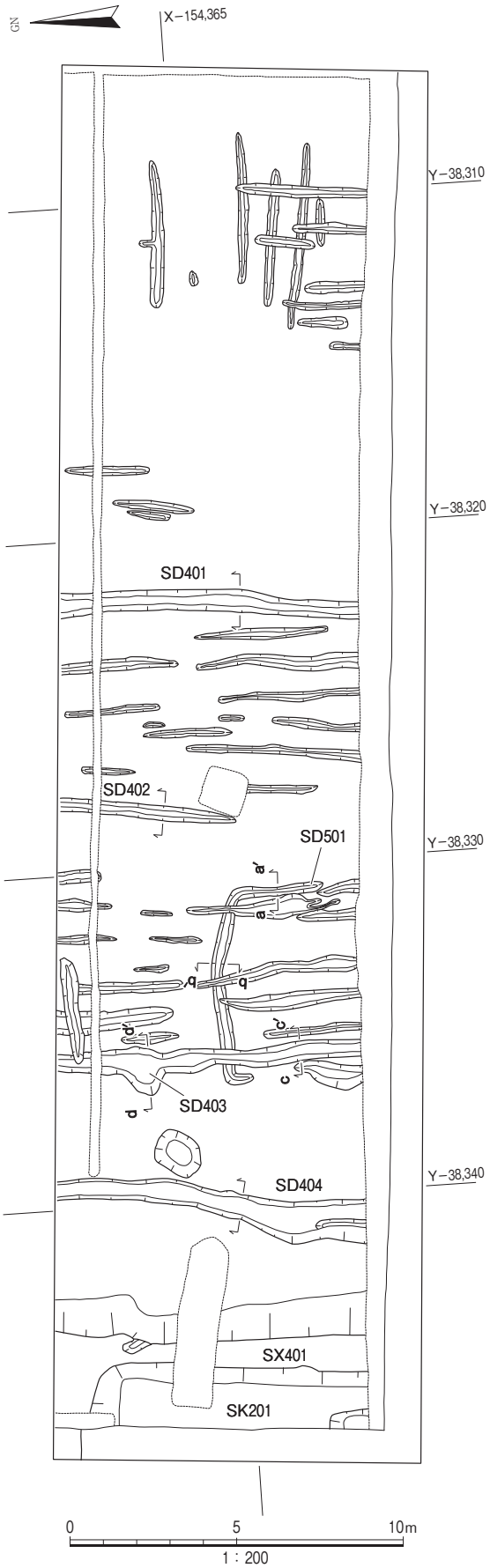


図51　平安時代以降の遺構平面図

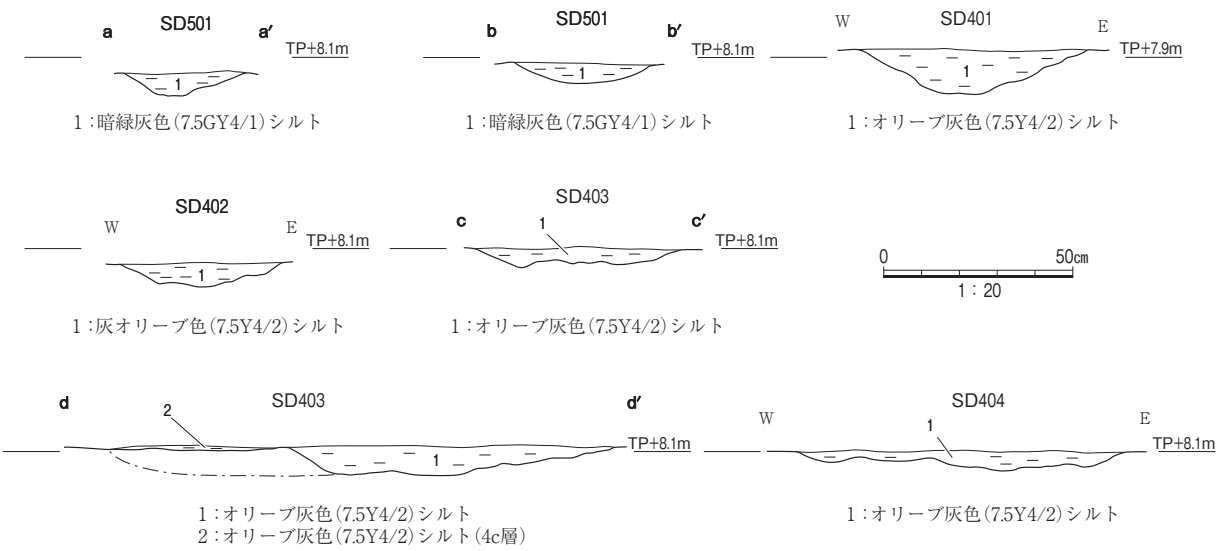


図52　平安時代以降の遺構断面図

上の大規模な土壙である。第５層上面まで重機で掘削したため、深さ0.6mを検出したに過ぎないが、壁面の観察では深さ0.7mであり、第２層上面に掘込み面があるとすれば、深さ1.2m程度となる。壁面の傾斜は急で、底面は凹凸が著しいものの概して平坦である。埋土は下部に水漬きの状態を示すシルトが堆積しており、上部は埋戻し土である。また、埋没後には多くの土壙が掘込まれている。多くの国産陶磁器・瓦・木製品が出土した。北端が切れていることから土壙としたが、滞水の痕跡が顕著に認められることから、長期間開放的な状態であったといえ、区画溝の一部、もしくは池のようなものであるかもしれない。

240・241は関西系陶器行平蓋である。240は外面トビカンナののち鉄泥を帯状に塗布し、イッチン盛で文様を描く。241には外面に白泥が施されて、染付で文様が描かれている。242は関西系陶器行平である。体部上半はトビカンナ後、 鉄泥が塗布されている。243は陶器小壺で外面には褐色の釉が塗布されている。244は瓦質土器鉢で、内面には煤が付着する。245は土師器火鉢、246は陶器甕で内外面ともに褐色の釉が施されている。247～254は磁器である。247・251・252は瀬戸美濃焼で、247は小碗である。251・252は皿で、このうち251は内底面にスタンプによる文様が施されている。248～250、253、254は肥前磁器である。248～250は碗で、このうち250は青磁である。253は鉢、254は皿である。

これらの遺物は18世紀後半～19世紀前半に位置づけられ、遺構の時期もその頃と推測される。

上記のことから平安時代当初までは調査地は湿地の環境であったと推測される。その後、耕作痕跡や、平面的には調査ができなかったものの断面の観察から、平安時代以降、江戸時代に至るまで、調査地はおもに耕作地として利用されたと考えられる。しかしながら、第３層に見られるいくつもの洪水砂は、鎌倉時代以降であっても決して安定した環境にはなかったことを如実に示しているといえよう。調査地西端に位置する江戸時代の大規模な土壙はその規模から、単なる廃棄土壙としての機能だけではなく、区画の溝あるいは池などであったと推測されよう。また、出土遺物が多いことから近隣に集落の存在が推定できる。

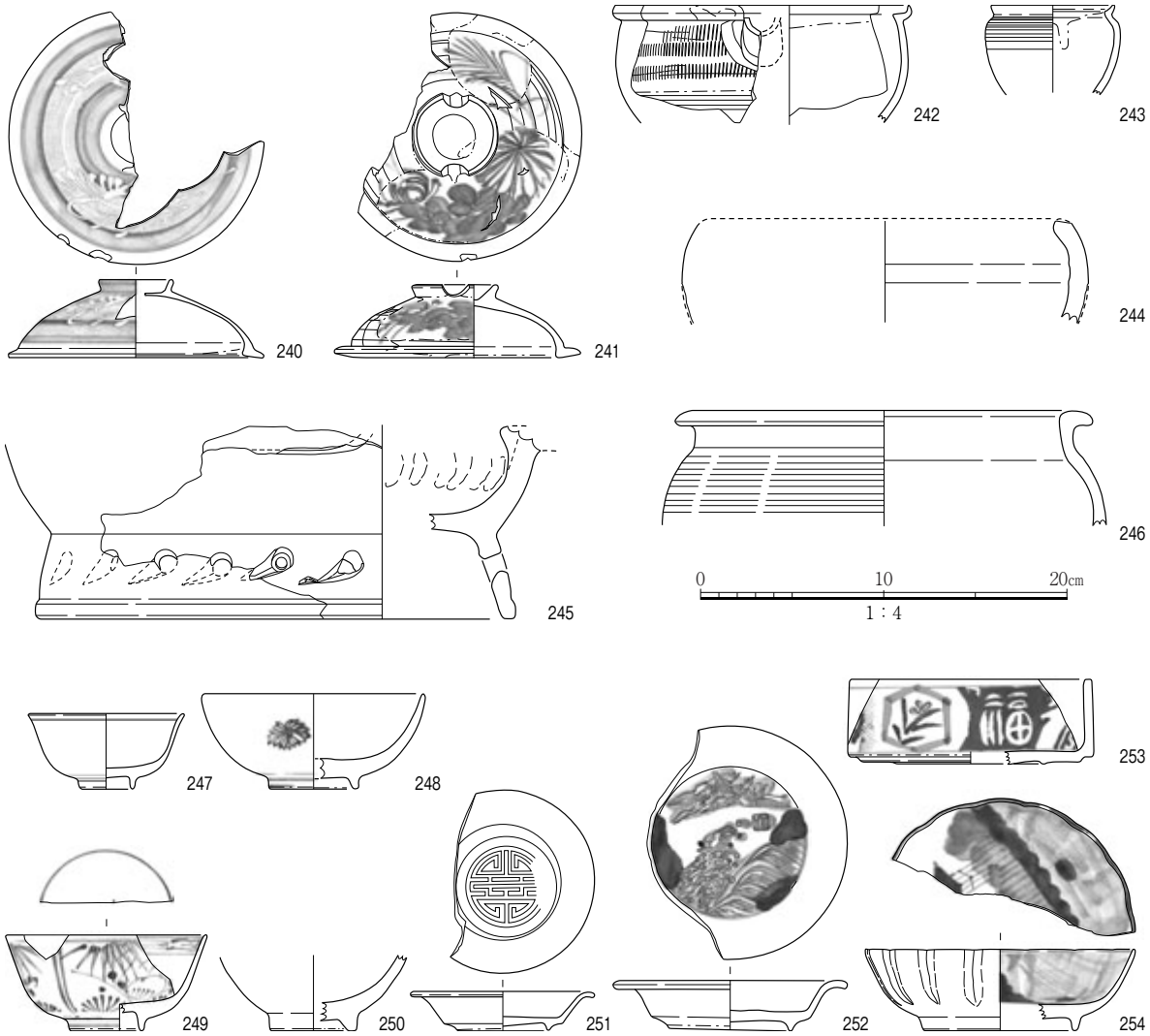


図53　SK201出土遺物

4）小結

今回の調査では、縄文時代の倒木痕・根痕、古墳時代前期の溝と水田、古墳時代中期の自然流路、平安時代の耕作痕跡、江戸時代の土壙などを確認した。

縄文時代では東隣のNG99－19次調査と異なり縄文土器が出土しなかった。標高も低く、西へ下がる谷の斜面に位置していると考えられる。

弥生時代では暗色帯の形成から、離水と滞水を繰返す環境であったと考えられるが、遺構は認められず、人々が利用する土地ではなかったといえよう。

古墳時代前期になると東西方向の溝が掘られ、さらには水田が形成されるなど積極的に利用されるようになる。この時期の水田は近隣の調査でも確認されており、広範囲に拡がっていたと考えられる。

古墳時代前～中期にかけては第7b層に見られる有機物の堆積など再び滞水する状況となり、第7a層の厚い砂の堆積が示すように大規模な洪水が起こったと推測される。その後、第６層のシルト主体の堆積など静かな水域になったと考えられるが、NR601の埋土などに見られるように洪水は頻繁に発生したと考えられる。

その後、第５層の堆積状況から、調査地はアシなどの繁茂する湿地へと変化し、完全に離水するのは平安時代になってからのことといえる。この段階以降、耕作痕跡が検出され、調査地はおもに耕作地として利用された。ただし、第３層内には多くの洪水砂が認められ、耕作域として利用されたといえども度々洪水に見舞われる不安定な環境にあったといえよう。

江戸時代には耕作域として利用される一方、西側では大規模な土壙が掘られ、多くの陶磁器類が投棄されるなどやや異なった利用も見られ、区画の溝あるいは池が存在した可能性がある。また、集落はごく近隣に位置していたことが推定される。

（平田）

第４節　樹種同定作業

１)分析の目的

今回の調査地であるNG08－２～４次調査では、いずれの調査地においても木製品が出土した。種類は舟形木製品の可能性がある祭祀関係のもの、木槽など日常の容器、杭などの部材などさまざまであった。木製品は一般的に用途に応じた材を選択している場合が多い。また、一方で多量に用いる杭や部材などは遺跡周辺に自生しているものを利用することがある。そこで、弥生～古墳時代と時期の推定できる今回の資料において、木製品の種類と材との関係を明らかとするため、樹種の同定作業を行った。

分析試料は表８に示す６点であり、各調査担当者が採取した試料から、文化財調査コンサルタント(株)が切片採取を行った。以下、樹種同定の方法およびその結果を記す。

（平田）

２)木材樹種鑑定方法

ⅰ）原理

木々は、その発生学的な理由により、種あるいは属、科ごとに独自の形態をとる。その形態の違いは、樹形、葉形にとどまらず、生殖細部である花粉や、木々を直接形作る幹の木部組織にも及んでいる。

木材樹種鑑定とは、対象とする木材（試料）の木材解剖学的な特徴を明らかにするとともに、既知の資料との比較検討から試料の樹種を同定することである。

ⅱ）観察方法と手順

木部組織が軸方向に配列する細胞と、髄から放射状に配列する細胞（放射組織）とから構成されていることから、木材の横断面（木口面）、放射断面（まさ目面）、接線断面（板目面）の３断面を光学顕微鏡下で観察する。

① プレパラート作製

木質考古遺物にはその重要性から、切片作製にあたりできるだけ損傷を少なくする必要のあるものが少なくない。このため、ミクロトームによる切片作成（特に前処理としての試料整形）は避けるべきであり、剃刀による手作業が必要となる。

従来行われていた、試料整形→ ミクロトームによる切片作成→ 染色という「破壊を前提としたプレパラート作製法」に対し、切片作成作業をすべて剃刀による手作業で行い、できるだけ遺物に損傷を与えないようにする方法を用いた。

光学顕微鏡下での観察を行うため、プレパラートを作製する手順をフローチャートに示す（図54）。

② 顕微鏡による観察および記載

上記の手順で作製したプレパラートを、光学顕微鏡下で４倍～ 600倍の倍率で観察、記載する。記載に当たっては３断面の顕微鏡写真を付け、用語などは基本的には[島地謙ほか1985]に従う。記載は

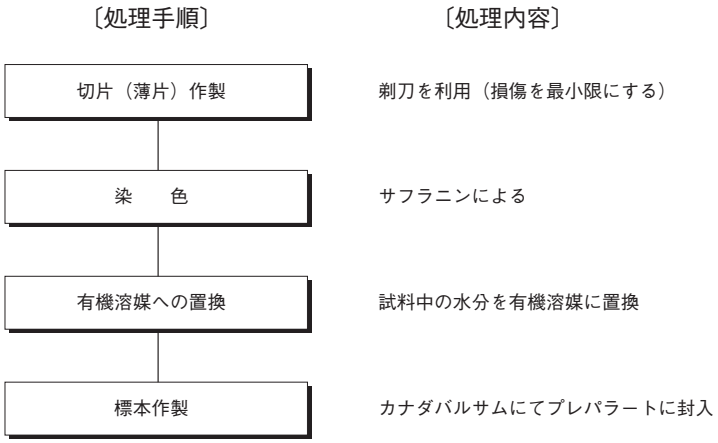


図54　プレパラート作製の手順

同定した種類別に、同定した個体を網羅する形で行う。顕微鏡写真は、最も特徴的な個体についてのみ行う。

③ 樹種の同定

樹種の同定に当たっては、現生標本および試料とを顕微鏡下で比較することを基本とする。

3）樹種の鑑定と記載

各試料の記載を行い、顕微鏡写真を掲載した(写真２・３)。また、表８に同定結果を示した。

・掲載番号99

ヒノキ属　*Chamaecypris* sp.（ヒノキ科）

記載：構成細胞は仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞からなる。早材から晩材への移行は緩やかである。晩材幅は非常に狭い（３－５細胞幅）。樹脂細胞は早・晩材の移行部から晩材にかけて多く分布し、接線方向に配列する傾向がある。放射組織は単列で、ほとんど10細胞高以下で低い。分野壁孔はヒノキ型を示し、１分野に通常２個存在する。以上の組織上の特徴から、ヒノキ属と同定した。

・掲載番号100

モミ属　*Abies* sp.（マツ科）

記載：構成細胞は仮道管、放射柔細胞からなる。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材の幅はやや広い。放射組織は単列で、大部分が10細胞高を超えるものが多い。また、放射柔細胞の水平壁は結節状を、末端壁は数珠状を成す。分野壁孔は不明瞭であるが小型ものが１分野に複数存在する。以上の組織上の特徴から、モミ属と同定した。

・掲載番号101

コウヤマキ　*Sciadopitys verticillata Sieb.* et Zucc.（コウヤマキ科）

記載：構成細胞は仮道管、放射柔細胞からなる。放射仮道管、樹脂細胞、らせん肥厚および樹脂道は存在しない。早材から晩材への移行は緩やかである。晩材幅は非常に狭い（２－５細胞幅）。放射組織は単列で、高さは６細胞高以下であり、非常に低い。分野壁孔は明瞭な窓状を示す。以上の組織上

表９　試料と同定結果

掲載番号	樹種名	製品名	調査(地区)	出土地点(層位)	時代
99	ヒノキ属	弓状木製品	NG08－２	NR501	古墳中期
100	モミ属	板状木製品		NR501	古墳中期
101	コウヤマキ	舟形木製品か？		第５層	古墳中期
102	ヒノキ属？	板状木製品		第５層	古墳中期
139	イヌマキ	杭	NG08－３	第6a層上面	弥生か
239	クスノキ属	木槽	NG08－４	第7b層	古墳前期

の特徴から、コウヤマキと同定した。

・掲載番号102

ヒノキ属？　cf. *Chamaecypris* sp.（ヒノキ科）

記載：構成細胞は仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞からなる。放射仮道管、らせん肥厚および樹脂道は存在しない。早材から晩材への移行はやや急で、晩材の幅はやや広い。樹脂細胞は早・晩材の移行部から晩材にかけて存在する。放射組織は単列で、大部分が10細胞高以下で低い。分野壁孔は不明瞭であるが、ヒノキ型が１分野に２－３個存在するのが確認できた(ただし、確認できた場所に早材から晩材への移行部である可能性がある)。以上の組織上の特徴から、ヒノキ属の可能性があるが、断定はできなかった。

・掲載番号139

イヌマキ　*Podocarpus macrophyllus* D. Don（マキ科）

記載：構成細胞は仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞からなる。放射仮道管、らせん肥厚および樹脂道は存在しない。年輪幅は非常に狭く、早材から晩材への移行は緩やかである。晩材幅は非常に狭い(数細胞幅)。樹脂細胞は多数存在し、年輪内に均等に散在している。放射組織は単列で、10細胞高以下で低い。分野壁孔はヒノキ型で、１分野に１－２個存在する。以上の組織上の特徴から、イヌマキと同定した。

・掲載番号239

クスノキ属　*Cinnamomum* sp.（クスノキ科）

記載：中庸の道管が単独あるいは放射方向または斜め方向に２－３個複合して、年輪内に均等に分布する散孔材である。道管せん孔は単せん孔で、道管相互壁孔は交互状である。道管内腔にチロースが発達している。軸方向柔組織は周囲状で、道管の周りを厚いさや状に包んでいる。放射組織は異性で、１－３細胞幅である。異形細胞である油細胞が放射柔細胞と周囲柔細胞に多数存在し、顕著である。以上の組織上の特徴から、クスノキ属と同定した。

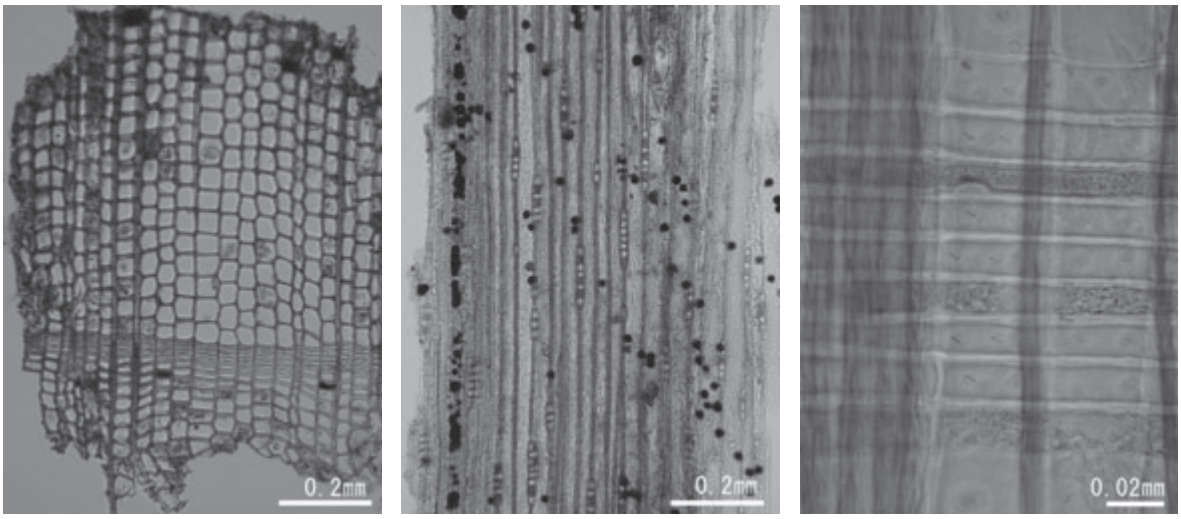
４）同定樹種と用材について

以下では樹種ごとに、[島地謙・伊東隆夫1988]、[山田昌久1993]の集成を下に用例を紹介し、今回の用材についてのコメントを示す。

・ヒノキ属

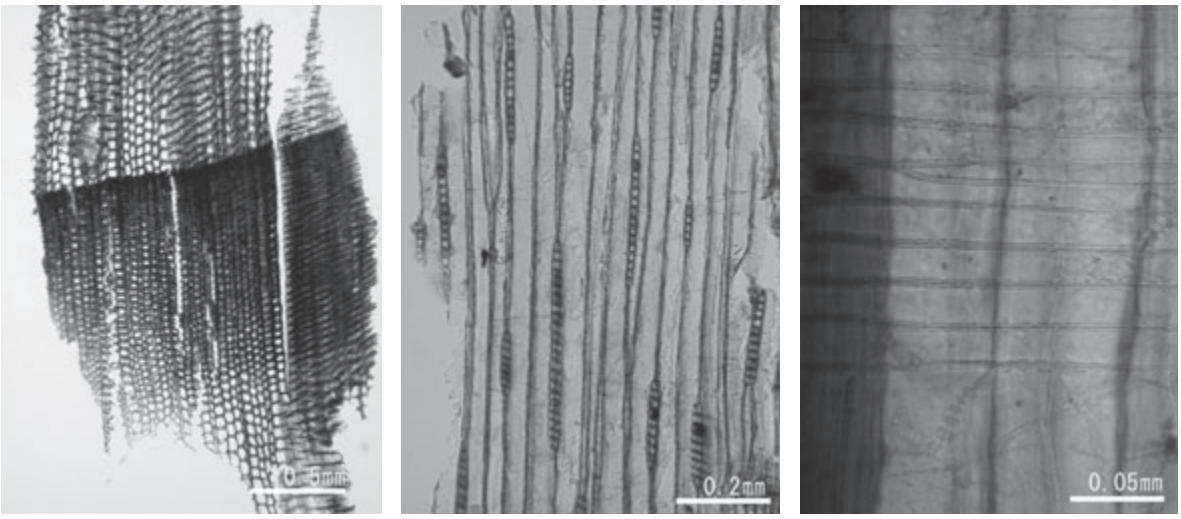
掲載番号 99　ヒノキ属　*Chamaecypris* sp.

横断面　接線断面　放射断面



掲載番号 100　モミ属　*Abies* sp.

横断面　接線断面　放射断面



掲載番号 101　コウヤマキ　*Sciadopitys verticillata Sieb.* et Zucc.

横断面　接線断面　放射断面

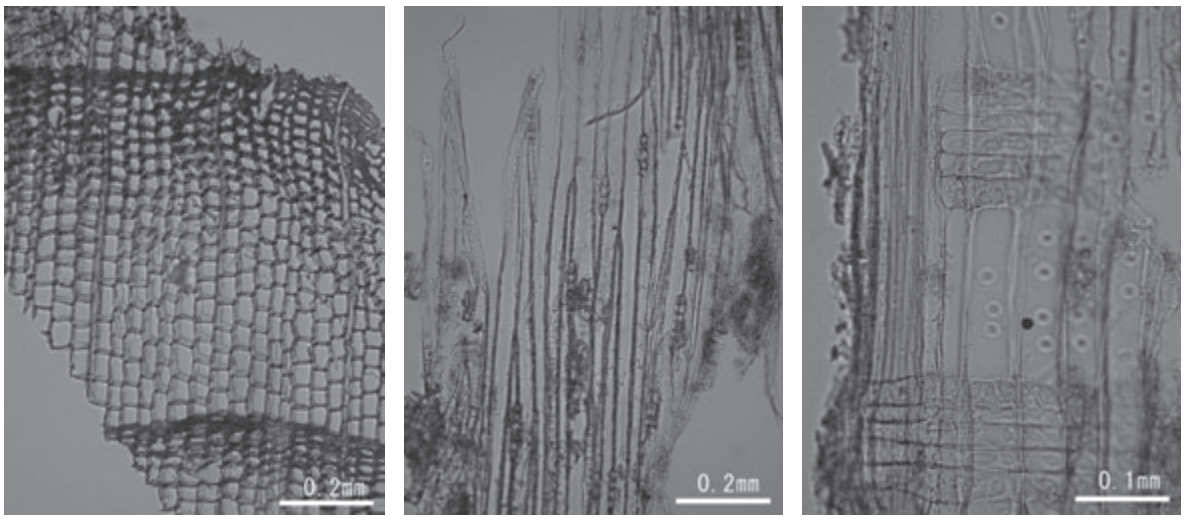
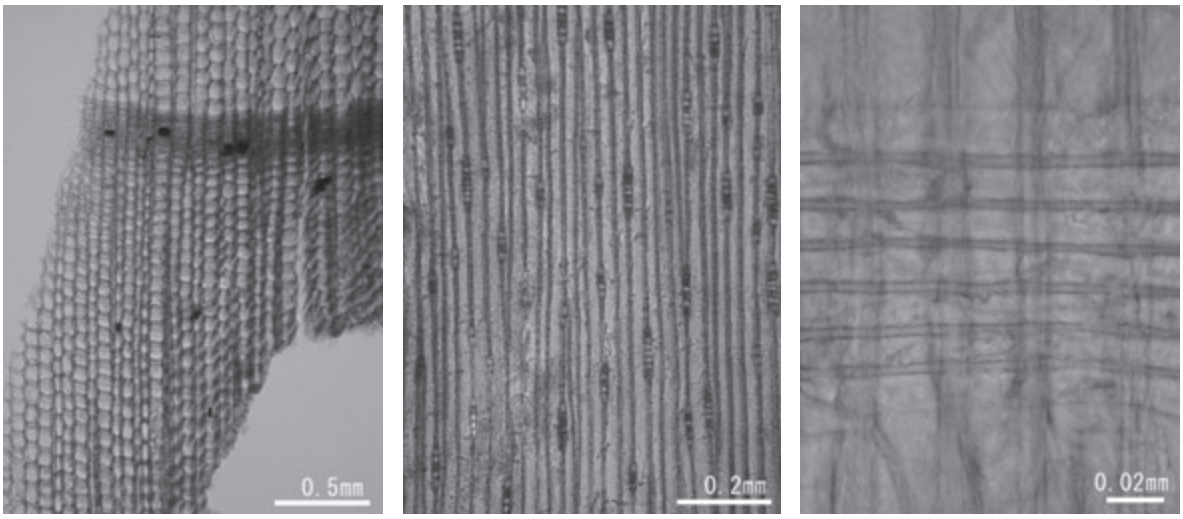


写真２　顕微鏡写真（１）

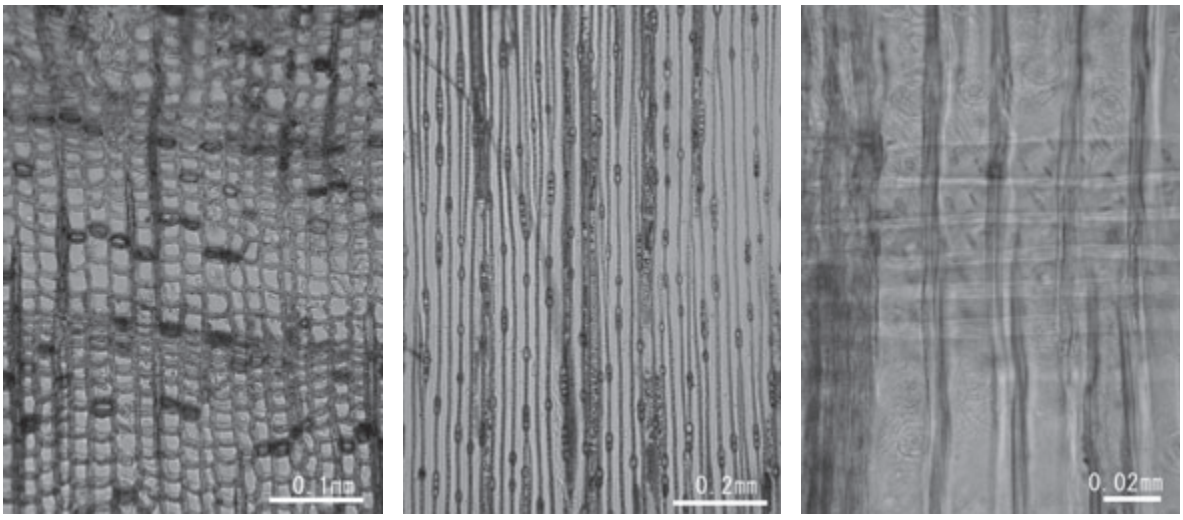
掲載番号 102　ヒノキ属？　cf . *Chamaecypris* sp.

横断面　接線断面　放射断面



掲載番号 139　イヌマキ　*Podocarpus macrophyllus* D. Don

横断面　接線断面　放射断面



掲載番号 239　クスノキ属　*Cinnamomum* sp.

横断面　接線断面　放射断面

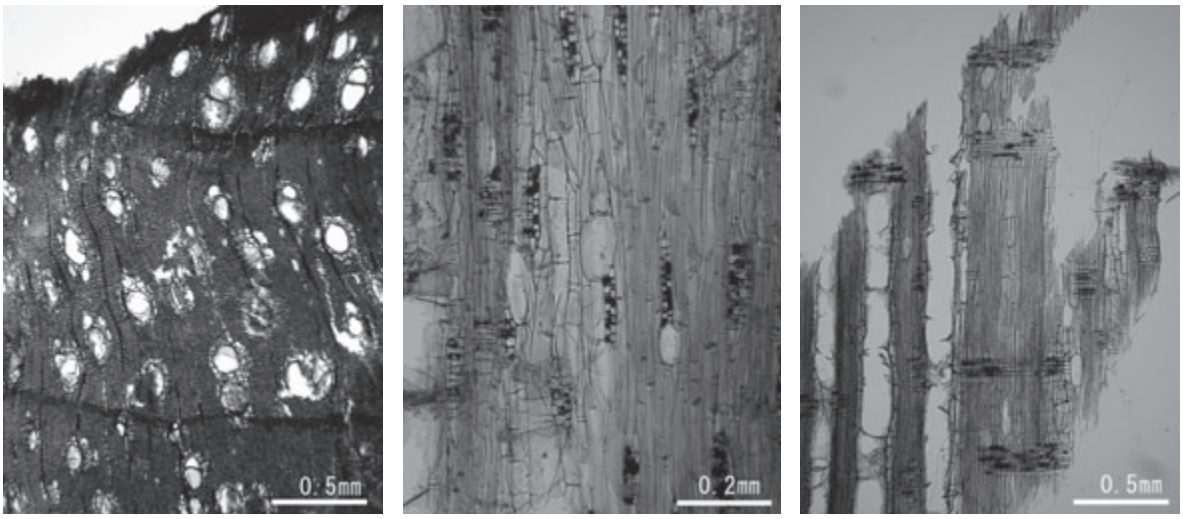


写真３　顕微鏡写真（２）

以下のコウヤマキと同様に香りが良く、宮殿の柱や板材、曲物などの容器類、棺材、祭祀具での用例が多い。弓の用材としてはカヤ、イヌガヤ、イヌマキの用例が多く、「弓状木製品」が「弓」とすれば、ヒノキ属の希な用例である。

・モミ属

弥生時代から古墳時代前期には利用が多いが、それ以降は減る傾向にある。建築用材として用いられることが多く、柱材や角材として出土している。板材としての用例は多くない。また、井戸材としての出土例もあるが、板材として用いられたか否かについては分からない。

・コウヤマキ

コウヤマキは、香りの良いことから平城京以前の宮殿の柱や木棺などの祭祀具に多く用いられている。「舟形木製品」とされ、祭祀に用いられていた可能性も指摘できる。

・イヌマキ

現在の分布は、中部地方以南の太平洋側に集中している。このことからか、近畿地方での用例は少ない。東海地方での記載が多く、丸太としての用例が突出している。杭には近辺に生育してた小径木を用いられることが多く、長原遺跡近辺に生育していた事が推定できる。

・クスノキ属

「刳り物」としての用例が多い。今回の「木槽」も刳り物であり、同様の傾向である。

（文化財調査コンサルタント株式会社　渡邉正己・古野毅）

5）小結

今回分析した木製品とその樹種との関係については、用途に応じて概ね調和的であったといえる。木槽がクスノキ属、舟形木製品の可能性がある木製品がコウヤマキと同定されたことなどは、これまでの他遺跡の事例でも見られる。杭に利用されたイヌマキは弥生時代の長原遺跡周辺に自生していた可能性を示し、当時の環境復元の一助となろう。

一方、形状から弓状木製品と報告した試料については弓としての用途に稀なヒノキ属という結果を得た。あくまで形状から呼称したものであり、本来の用途としては類例を探る必要がある。

（平田）

第Ⅲ章　まとめ

今回報告した調査地は３箇所であった。以下、各調査地ごとに成果を記してまとめとしたい。

１）NG08－２次調査

今回の調査では、古墳時代の自然流路・落込み、地震痕跡のほか、飛鳥時代の集落に伴う溝、中～近世の耕作に関わる溝などの成果が得られた。古墳時代前期以前については調査することができなかったため不明である。

古墳時代中期における大規模な洪水は近隣の調査でも認められるところである。今回検出した自然流路はそのひとつであるといえる。また、洪水がひと段落したのちに形成されたSX501からは古墳時代中期後葉とみられる土師器甕・椀および製塩土器の良好な一括資料が出土した。完形品が多いことから何らかの祭祀行為を示すものと推定されよう。これらは長原遺跡の古墳時代中期における土師器の共伴関係を検討するうえで貴重な資料となった。

飛鳥時代の遺構としては溝が認められ、集落の一部であった可能性がある。

中～近世にかけては耕作に係わる溝が検出されており、周辺は耕作域として利用されたと考えられる。

２）NG08－３次調査

今回の調査では、各時代において土地利用を示す成果を上げることができた。近隣との成果を合わせると調査地の変遷はおおよそ次の通りとなる。

縄文時代以前については石匙が１点出土したのみであり、詳細は不明であるが、近隣に集落が存在したと推定できる。

弥生時代中～後期では多くの土器とともに、土壙・溝・建物跡などが検出された。同時期の集落は周辺の調査でも確認されており、調査地周辺が集落域として利用されていたといえる。

古墳時代の遺構は確認されず、遺物も少なかった。調査地の北側で建物跡が検出されている一方で、東隣のNG07－１次調査[大阪市文化財協会2009a]でも遺構は希薄であり、耕作域もしくはあまり利用されなかった地域といえるかもしれない。

飛鳥時代と考えられる遺構としては水田を検出した。自然流路に近いという地形的な制約はあるものの、正方位から振れる方位であり、長原地域の正方位に基づいた条里制の施行を考える上で興味深い資料となるであろう。

奈良時代のものとして自然流路の一部が検出された。自然流路の左岸でのこれまでの成果と合わせると、概ね東から西方向に蛇行しながら流れる流路が、調査地東側にて一端北流するようである。

平安時代については明らかにできなかったが、NG07－１次調査の結果を参考にすると、一部は第

５層の水成層、一部は第4c層の作土層が相当し、流路埋没後の湿地の状態から耕作域へと変化していったと推定できる。

鎌倉時代以降については複数の水田面を検出した。一帯は耕作域として利用されたのであろう。

３）NG08－４次調査

今回の調査では、縄文時代の倒木痕・木根痕、古墳時代前期の溝と水田、古墳時代中期の自然流路、平安時代の耕作痕跡、江戸時代の土壙などを確認した。

縄文時代では東隣のNG99－19次調査と異なり縄文土器が出土しなかった。標高も低く、西へ下がる谷の斜面に位置していると考えられる。

弥生時代では暗色帯の形成から、離水と滞水を繰返す環境であったと考えられるが、遺構は認められず、人々が利用する土地ではなかったといえよう。

古墳時代前期になると東西方向の溝が掘られ、さらには水田が形成されるなど積極的に利用されるようになる。この時期の水田は近隣の調査でも確認されており、広範囲に拡がっていたと考えられる。

古墳時代前期～中期にかけては第7b層に見られる有機物の堆積など再び滞水する状況となり、第7a層の厚い砂の堆積が示すように大規模な洪水が起こったと推測される。その後、第６層のシルト主体の堆積など静かな水域になったと考えられるが、NR601の埋土などに見られるように洪水は頻繁に発生したと考えられる。

その後、第５層の植物根跡が示すように、調査地はアシなどの繁茂する湿地へと変化していったといえ、完全に離水するのは平安時代になってからのことといえる。この段階以降、耕作痕跡が示すように調査地はおもに耕作地として利用されたといえる。ただし、第３層内には多くの洪水砂が認められ、耕作域として利用されたといえども度々洪水に見舞われる不安定な環境にあったといえよう。

江戸時代には耕作域として利用される一方、西側では大規模な土壙が掘られ、多くの陶磁器類が投棄されるなどやや異なった利用も見られ、区画の溝あるいは池が存在した可能性がある。また、集落はごく近隣に位置していたことが推定される。

（平田）

引　用　文　献

大阪市教育委員会・難波宮址顕彰会1978、「Ⅳ　長吉六反(推定・城山古墳跡)試掘調査」:『平野遺跡群試掘調査報告書』、pp.12－16

大阪市文化財協会1978、『長原遺跡発掘調査報告』

1979a、『大阪市下水管渠工事に伴う平野区所在遺跡発掘調査(NG12次)報告書』

1979b、『大阪市下水道発進口建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG16次)報告書』

1979c、『関西電力管路埋設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG17)略報』

1980a、『大阪市下水管渠築造工事(到達竪坑)に伴う長原遺跡発掘調査(NG23次)計画書』

1980b、『大阪市下水管渠築造工事(到達竪坑)に伴う長原遺跡発掘調査(NG25次)計画書』

1981a、『大阪市下水管渠築造工事(押込口)に伴う長原遺跡発掘調査(NG80－１)略報』

1981b、『八尾～富田林局間同軸ケーブル方式工事(土木)に伴う長原遺跡発掘調査(NG80－２)略報』

1982、『長原遺跡発掘調査報告』Ⅱ

1983、『長原遺跡発掘調査報告』Ⅲ

1984a、『下水工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG83－１)略報』

1984b、『大阪市住宅供給公社長原六反用地ボーリング調査(NG83－５)略報』

1984c、『大阪市平野区長吉出戸における下水道工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG83－22)略報』

1984d、『長吉出戸六反地区幹線下水管渠築造工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG83－43)略報』

1984e、『仲東産業店舗建設に伴う長原遺跡発掘調査(NG83－54)略報』

1984f、『吉内邸新築工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG83－63)略報』

1984g、『関西電力管路新設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG83－65)略報』

1985a、『六反下水管渠推進工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG84－４)略報』

1985b、『長吉出戸地区下水管渠築造工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG84－18)略報』

1985c、『地中送電線工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG84－49)略報』

1985d、『関西電力管路新設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG84－86)略報』

1986、『大阪市土木局カルバート建設に伴う長原遺跡発掘調査(NG85－17)略報』

1988、『長吉中学校増築に伴う長原遺跡発掘調査(NG87－67)略報』

1989、『(株)ビーバーハウスによる建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG88－６)略報』

1990、『長吉長原東市営住宅建設に伴う長原遺跡発掘調査(NG89－86)略報』

1992a、『長原遺跡発掘調査報告』Ⅴ

1992b、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅲ

1993、『長吉長原東市営住宅(第２期)建設に伴う長原遺跡発掘調査(NG92－39)略報』

1994、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅶ

1995、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅷ

1996a、『大阪市都市整備局による長吉長原東市営住宅建設に伴う長原遺跡発掘調査(NG95－36)略報』

1996b、『大阪市教育委員会によるクラフトパーク建設に伴う長原遺跡発掘調査(NG95－77)略報』

1997、『平成８年度大阪市都市整備局による長吉六反第１住宅建設に伴う長原遺跡発掘調査(NG96－

79)略報』
1998a、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅰ
1998b、『平成９年度大阪市都市整備局による長吉六反第１住宅建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG97－41)完了報告書』
1999、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅱ
2000a、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅲ
2000b、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』XV
2001a、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅳ
2001b、長原・瓜破遺跡発掘調査報告』XVI
2002a、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅴ
2002b、『長原遺跡発掘調査報告』Ⅷ
2003、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅵ
2004a、『長原遺跡発掘調査報告』XI
2004b、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅶ
2005a、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅷ
2005b、『長原遺跡発掘調査報告』XII
2006a、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅸ
2006b、『長原遺跡発掘調査報告』XV
2007、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅹ
2008a、『長原遺跡発掘調査報告』XVI
2008b、『長原遺跡発掘調査報告』XVII
2008c、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』XI
2009a、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』XII
2009b、『長原遺跡発掘調査報告』XVIII
2010、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』XIII
大阪文化財センター1980、『亀井・城山』
1986a、『城山(その１)』
1986b、『城山(その２)』
1986c、『城山(その３)』
尾上実1983、「南河内の瓦器椀」：古代を考える会編『藤澤一夫先生古稀記念古文化論叢』　藤澤一夫先生古稀記念論集刊行会、pp.689－705
尾上実・森島康雄・近江俊秀1995、「瓦器椀」：中世土器研究会編『概説　中世の土器・陶磁器』　真陽社、pp.315－327
川西宏幸1978、「円筒埴輪総論」：『考古学雑誌』第64号第２巻　日本考古学会、pp.95－164
絹川一徳2000、「石器器種とその分類」：大阪市文化財協会編『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅲ、pp.150－189
古代の土器研究会1992、『古代の土器１　都城の土器集成』
小山正忠・竹原秀雄1996、『新版　標準土色帳』17版　日本色研事業株式会社
佐藤隆1992、「平安時代における長原遺跡の動向」：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』Ⅴ、pp.102－114
1995、「大阪市内における中世集落の動向の一例－中国製磁器の出土傾向を中心に－」：日本中世土器研究会『中

世土器の基礎研究』XI、pp.45－54
高橋工1999a、「長原遺跡および北部周辺地域における古墳時代中期～飛鳥時代の地形環境の変化と集落の動態」：大阪市文化財協会編『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅱ、pp.79－106
1999b、「奈良時代以降の長原遺跡東北地区」：大阪市文化財協会編『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅱ、pp.123－127
高橋工・杉本厚典・大庭重信・絹川一徳2000、「長原遺跡東北地区の基本層序」：大阪市文化財協会編『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅲ、pp.10－11
田辺昭三1966、『須恵邑古窯址群』Ⅰ　平安学園考古学クラブ
1981、『須恵器大成』　角川書店
趙哲済1995、「本書で用いる層位学的・堆積学的視点からの用語」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅷ、pp.41－44
2001、「長原遺跡の地層」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』XVI、pp.7－28
2003、「大阪平野のおいたちと人類遺跡」：『日本第四紀学会「大阪100万年の自然と人のくらし」普及講演会資料集』、pp.1－16
2005、「河内平野の古地理変遷」：平野区誌編集委員会編『平野区誌』、p.24
2010、「土層の認識と表土・包含層の発掘」：文化庁文化財部記念物課編『発掘調査のてびき－集落遺跡発掘編－』、pp.93－116
寺沢薫・森井貞雄1989、「1河内地域」：『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅰ、pp.132－146
寺沢薫・森岡秀人1989、『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅰ
1990、『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅱ
村元健一2003a、「長原遺跡東北地区の基本層序」：大阪市文化財協会編『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅵ、pp.9－18
2003b、「長原遺跡とその周辺における古代の様相」：大阪市文化財協会編『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅵ、pp.86－100
森田勉・横田賢二郎1978、「大宰府出土の輸入中国陶磁器について－型式分類と編年を中心として－」：『九州歴史資料館研究論集』4、pp.1－26
八尾市文化財調査研究会2000a、「Ⅴ　太子堂遺跡第7次調査(TS97－7)」：『(財)八尾市文化財調査研究会報告』66、pp.59－73
2000b、「Ⅵ　太子堂遺跡第7次調査(TS98－8)」：『(財)八尾市文化財調査研究会報告』66、pp.75－93

索　引

い　石匙……34,59,83
　石庖丁……50
え　円盤状土製品……50
か　瓦器……11,27,31,56,59,61
　瓦質土器……74
　瓦……6,27,59,74
　関西系陶器……74
　韓式系土器……19,47,50,56,70,71
く　杭……46,47,59
け　畦畔……16,31,50,52,56,59,61,65,70,73
こ　黒色土器……11,27,29,61,64,72,73
さ　祭祀……6,56,77,82,83
　サヌカイト……6,34,50
し　地震……7,13,16,23,30,34,41,44,47,64,83
　縄文土器……75,84
　城山(遺跡)……4
す　水田……5,6,7,9,16,50,52,56,59,60,65,68,70,71,75,83,84
せ　製塩土器……13,19,21,30,83
　瀬戸美濃焼……74
そ　槽……70,77,82
た　竪穴建物……6,34,40,41,50
て　出戸……1,2,6,8
と　動物遺体……56
　土壙……6,7,31,34,40,41,44,45,46,50,59,65,73,74,75,76,83,84
な　長原遺跡……1,2,4,7,11,30,40,61,83
は　柱穴……6,7,52
　畠……6,7
ひ　肥前磁器……11,74
ふ　舟形木製品……7,27,77,82
へ　平城宮土器……72
ほ　掘立柱建物……5,6,7,41
み　溝……6,7,9,11,13,19,23,24,25,26,30,34,40,41,44,46,50,52,54,59,65,68,72,73,74,75,76,83,84
ゆ　弓状木製品……19,82
り　流路……4,6,7,9,13,16,30,31,50,52,54,56,60,65,66,68,70,75,83,84
ろ　六反……1,2,8,9

Archaeological Report of the Eastern Sector of Nagahara Site in Osaka, Japan

Volume XIV

A Report of Excavations
Prior to the Development of
the Eastern Sector of the Nagayoshi Area
in fiscal 2008

March 2011

Osaka City Museums Organization
Osaka City Cultural Properties Association

Notes

The following symbols are used to represent archaeological features, and others, in this text

SB : Building
SD : Ditch
SK : Pit
SP : Posthole or Small Pit
SX : Other feartures
NR: Natural river

CONTENTS

Foreword
Explanatory notes

Chapter I The Environment of the site and Background of Research 1
S.1 Location of the Nagahara site and former research results 1
1) Topographical setting of the site 1
2) Former research results 2
S.2 Progress and outline of the excavation 8
1) NG08-2 8
2) NG08-3 8
3) NG08-4 9

Chapter II Investigation Results 11
S.1 NG08-2 11
1) Stratigraphy 11
2) Features and Remains 16
3) Remains inclueded the Stratum 27
4) Conclusion 30
S.2 NG08-3 31
1) Stratigraphy 31
2) Features and Remains 34
3) Conclusion 59
S.3 NG08-4 61
1) Stratigraphy 61
2) Features and Remains 65
3) Conclusion 75
S.4 Tree speacies of wooden remains 77
1) Purpose 77
2) Methodology 77
3) Identification 78
4) Tree speacies and Using 79
5) Results 82

Chapter Ⅲ Conclusion 83

References and Bibliography 85

Postscript and Index

English Contents

Reference Card

報　告　書　抄　録

ふ　り　が　な	ながはらいせきとうぶちくはっくつちょうさほうこく14
書　　名	長原遺跡東部地区発掘調査報告XIV
編　著　者　名	田中清美・平田洋司・小田木富慈美
編　集　機　関	財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
所　　在　　地	〒540－0006　大阪市中央区法円坂１－１－35　TEL.06－6943－6833
発 行 年 月 日	西暦　2011年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ながはら 長原遺跡	おおさかしひらのく 大阪市平野区 ながよしでとちょうめ 長吉出戸８丁目 ・ながよしろくたんちょうめ 長吉六反１丁目	27126	－	34° 36′ 15″	135° 34′ 25″	2次 080823～081128 3次 081027～090317 4次 081020～090319	250㎡	長吉東部地区土地区画整理事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
長原遺跡	集落	弥生時代	竪穴建物・土壙・溝	弥生土器
	田畑・その他	古墳時代	水田・土壙・自然流路	土師器・須恵器・製塩土器
	その他	奈良時代	自然流路	土師器・須恵器
	田畑	平安～江戸時代	畦畔・溝・土壙	土師器・須恵器・瓦器・国産陶磁器

要　　約

本書は、長原遺跡において2008年度に行われた３件の発掘調査の成果を報告するものである。

弥生時代では、中期の溝のほか、後期の竪穴建物跡・土壙・溝を確認し、集落域の一端に当ることを追認した。

古墳時代では前期の水田のほか中期の流路を検出した。また祭祀に伴うと推定される中期の土器・製塩土器が一括出土した。

奈良時代では過去の調査で検出されていた自然流路の一部を検出した。

平安時代以降は水田やそれに伴う耕作痕跡などが検出され、耕作域として利用されていたことが判明した。